

二 日独伊三国同盟

103

昭和15年3月14日

有田外務大臣より
在伊国天羽大使宛（電報）

訪伊使節団長に佐藤元外相が決定した旨通報

本省 3月14日4時40分発
（電報）

第七一號（至急）

訪伊使節團團長ハ前外務大臣佐藤尙武氏ニ正式決定セルニ
付其ノ旨伊側ニ御通達相成度

英、獨ニ轉電アリ度

佛ニ轉電セリ

編注 本電報の發電時間が午前・午後のいずれであるかは不

明。

~~~~~

104

昭和15年3月26日

訪伊使節団派遣に関する外務省決定

付記 昭和十五年三月二十二日、欧亜局第二課作成

「訪伊經濟使節團ト日伊親善關係増進ノ政治  
的措置ニ關スル考察」

昭和十五年三月十九日起案  
同 三月廿六日決裁

高裁案

遣伊使節團ニ關スル件

現下ノ國際情勢ニ因リ日伊間友好關係ヲ一層緊密ナラシム  
ル必要アリ且曩ニ伊國カ「パウリツチ」侯及「コンチ」伯  
ノ兩使節團ヲ我方ニ派遣シ好意ヲ示シタルニモ鑑ミ今般我  
方ニ於テモ日伊經濟關係ノ緊密化ヲ主タル目的トスル親善  
使節ヲ派遣致シ度ニ付別記ノ通任命方取計フコトト致シ度  
右仰高裁

記

遣伊使節團派遣方ノ件

一、任 務 日伊經濟關係ノ緊密化（日滿伊經濟協定改

訂交渉ヲ含ム）ヲ主タル目的トスル親善使

節ナリトス

二、構成及資格 團員ハ別表一、二號表人員ヲ以テ組織シ日

伊親善増進經濟問題商議ノ爲ノ帝國首席代

表者ハ大正六年六月十三日附勅令第六四號

ニ依ル特命全權大使トス尙御信任狀ヲ捧呈

スルコトトス

但シ團員中一號表記載ノ分ハ日伊親善増進  
經濟問題商議ノ爲ノ使節トシテ正式ニ發令  
シ又二號表記載ノ分ハ外部ニ對スル關係上  
ニ於テハ別個ノ出張命令ニ依ルモ外務省限  
リノ(公表セサルコト)辭令ニ於テハ前記同  
様ノ命令ヲ發シ事實上之ニ參加シ本件事務  
ニ關與セシムルモノトス

### 三、注意事項

(イ)本使節團ハ當省以外ノ外部ニ對シテハ前  
記三ノ主旨ニテ説明シ、其ノ政治的使命  
ヲ有スルモノナルコトヲ特ニ印象ツクル  
コトナキ様注意スルコトトス

(ロ)必要ニ應シテハ本使節團ハ曩ニ伊國カ  
「パウリツチ」侯及「コンチ」伯ノ兩使  
節團ヲ我方ニ派遣シ好意ヲ示シタルニ酬  
ユル爲日伊兩國ノ經濟關係増進ヲ主タル  
目的トスル親善使節トシテ派遣スルモノ  
ナルコトヲ説明スルコトトス

(ハ)本使節團トシテノ行動ハ伊太利滯在中ニ

限定セラレ從テ同國ニ於ケル任務終了ト  
共ニ之ヲ解散スルコトトス

(ニ)伊國以外ノ國ニ於ケル行動ハ往復ノ旅行  
ト看做スコトトス

### (付記)

訪伊經濟使節團ト日伊親善關係増進ノ政治的措施

ニ關スル考察

(昭和一五、三、二二 歐二)

一、日伊兩國ノ政治的關係ハ昭和十一年頃ヨリ漸次改善セラ  
レ支那事變勃發後ハ伊國ノ對日好意の態度竝ニ伊國ノ防  
共協定參加ニ依リ緊密ノ度ヲ増シ更ニ昭和十三年三月伊  
國ノ「ファシスト」使節團本邦訪問行ハレ特ニ帝國國民  
中ニ對伊好感ヲ醸成セリ

然ルニ其ノ後日獨伊防共協定強化問題ノ蹉跌次テ歐洲戰  
亂ノ勃發等ノ爲特ニ日伊間ニ親善關係ヲ強調シ乃至ハ提  
携ヲ強化スル爲ノ政治的措施ハ執ラレス又「パウルク  
チ」使節團ニ對スル答禮使節團派遣モ屢次關係當局間ノ  
議ニ上リタルモ實現ヲ見ルニ至ラス今日ニ及ヒタル次第

ナルカ今佐藤大使ヲ首班トスル經濟使節團ノ伊國ヲ訪問スル機會ニ於テ日伊關係ヲ現在以上ニ緊密ナラシムル措置乃至兩國親善關係ヲ印象付クル措置ヲ執ルコトノ可否及其ノ影響等ヲ十分考慮ノ要アリ必要ニ應シ使節團ノ主タル使命タル兩國經濟關係ノ増進以外ニ何等カノ政治的「ヂエスチヤー」ヲ示スコトモ亦適當ナルヘシ

一、日伊親善關係増進ノ可否

日伊關係ヲ現在以上ニ強化スルノ可否ハ固ヨリ其ノ提携ノ程度及強弱等ニ依リ定メラルヘキモノニシテ一概ニ之ヲ斷スルコト能ハサル處日伊關係強化ノ可否ヲ考慮スルニ當リテハ特ニ我方トシテ日英關係、日米關係、日蘇關係及日獨關係及事變處理對策ニ及ス影響ヲ充分考慮ノ上帝國外交方針ノ根本的見地ヨリ決スルノ要アリ

(イ) 先ツ日英關係ニ付考慮スルニ英、獨ハ現在交戰關係ニアルヲ以テ對英、對獨ノ關係ヨリ日伊ハ中立國トシテ共通ノ立場ニ起チ共通ノ利害關係ヲ有スト二通商障害ノ點ヨリ對英關係上ノ主張ニ於テ共通スルモノ多キ次第ナレハ右ノ點ヨリ日伊カ其ノ提携ヲ或程度強化スルハ英國側ニ對スル一種ノ挑戰トモ言ヒ得ヘク日英關係

改善ノ趣旨トハ背馳スルモノアリト雖モ又其ノ效果ナシトセス

乍然右ハ兩國ノ提携カ或ル程度ヲ超ヘサル限度内ニ止ルニ於テハ寧ロ英國側ニ對シ或ル種ノ牽制的作用ヲ爲シ且ツ特ニ之カ爲ニ日英關係乃至英伊關係ヲ惡化スルトモ認メラレサルニ依リ必スシモ惡影響ノミ多シト斷シ難ク又英國側カ或ル限度内ノ日伊ノ接近ニ對シ直ニ報復的措置ヲ執ルカ如キ事ハ到底考ヘラレサル處ナリ

(ロ) 日米關係上ハ日伊接近ノ「ヂエスチユア」カ米國側ニ多少ノ反感ヲ與フヘキハ當然覺悟セサルヘカラサルモ目下伊國ハ其ノ對米關係ヲ改善セントシ居リ又日伊提携ノ結果カ米國ヲ對象トセサルコトモ歷然タルモノナルニ依リ右カ軍事同盟等攻撃的乃至挑發的ノ性質ヲ帶フルモノニ非サル限り特ニ遠慮ノ必要無カルヘシ

(ハ) 最モ重大ナルハ日蘇關係上ノ影響ニシテ特ニ蘇聯ハ歐洲戰亂ヲ繞リ「バルカン」方面ニ於テ伊國トノ利害關係錯綜セルモノアリ伊蘇兩國間ニ介在スル獨逸ノ苦心モ專ラ茲ニ存スル次第ナルハ「ブレンネル」會談等ノ議題等ニ付テハ窺ハルル所ナルカ日伊提携ハ元來防共

協定ニ依リ結ハルルモノナルモ抑モ日伊提携ニ依ル蘇聯ニ對スル壓力ハ甚タ間接的ニシテ伊國ノ從來意圖セル所モ亦茲ニ存セス其ノ對英關係上ノ利用ニ在リタルコトハ明白ナリ從テ或ル程度ノ日伊提携ハ對蘇關係上特ニ惡影響有リトハ言ヒ難シ尤モ蘇聯ヲ目標トスル軍事同盟ニ非サル場合ノコトニシテ右カ對蘇軍事同盟等ノ場合ニ於テハ蘇聯側ノ惡感ヲ無益ニ挑發シ日蘇間諸交渉ノ進捗ヲ阻害スヘキハ謂フ迄モ無キ次第ナリ

(二)日伊關係カ日伊間ノミノ話合ニテ強化セラルコトハ從來ノ經緯ヨリ獨逸側特ニ「リッペン」外務大臣ノ不快トスル所ナルヘキモ現在獨逸ハ交戰國ニシテ伊國ハ非交戰國ナリ右立場ノ相違ヨリ必要的ニ中立國トシテ立場ヲ同シクスル日伊カ或ル種ノ提携ヲ爲スコトニ付假令獨逸側ヲ除外スルヤノ感ヲ與フル措置ニ出ツルモ亦已ムヲ得サル次第ニシテ獨逸側トシテハ其ノ對英佛關係上日伊ノ接近ハ之ヲ嫌惡スヘキ理由ナシト認メラル

一、以上考察ヨリ日伊關係ノ強化ハ必スシモ帝國ノ諸列強トノ關係上不可ニ非ストノ結論ニ達スヘシ、尤モ日伊關係

強化ヨリ生スル我方ノ利益ハ中立國ノ立場ノ強化スルコト及東亞ノ事態ニ對スル伊國ノ協力ヲ確保スル以外ニ特ニ顯著ナルモノヲ期待シ難シ乍然從來伊國ノ支那事變ニ對スル好意的態度ヨリ見テ伊國カ常ニ好意的態度ヲ持續スル様我方トシテ之ヲ繼ギ置クコト肝要ニシテ特ニ事變ヲ繞リ將來列國ノ會議等開催ノ場合ヲ考慮スルニ於テ然リ

二、尙提携ノ内容ヲ考察スルニ嘗テ伊國側カ希望セル日伊間中立及協議ニ關スル條約ハ目下ノ歐洲戰爭狀態ニ顧ミ少ナクトモ中立ニ關スル限り問題トナラス即チ伊國カ參戰スル場合ニ日本カ中立ヲ約シ又ハ日本カ參戰スル場合ニ伊國カ中立ヲ約スト謂フモ寧ロ今日ノ事態ニ於テ意味ナキ次第ナリ

一方協議ニ關スル條約ニ付テハ日伊カ特ニ共通利益ヲ有スル事情ニモ鑑ミ考慮シ得ラレサルニ非ス

即チ日伊間ハ中立國トシテ其ノ交戰國トノ關係上共通ノ問題ニ當面スルコト多キヲ以テ右ノ如キ場合成ルヘク緊密ナル聯絡ヲ執リ特ニ政治的ニ重大ナル事態ニ直面シ態度ヲ決スルカ如キ場合ニハ出來ル限り豫メ隔意ナキ協議

ヲ遂ケ成ルヘク共同ノ目的ニ邁進セントスルヲ趣旨トスル協定ノ如キモ一案ナルヘシ

尤モ斯ル程度ノ日伊關係ノ強化ハ多少行進ミノ感ナキニシモ非ス徒ニ伊國側ノ歡心ノミ買フコトトモナル惧レアリ斯クノ如キ協定ヲ締結スルコトハ後日ノ研究ニ俟ツコトトシ不取敢佐藤經濟使節團長訪伊ニ當リ帝國政府總理大臣及外務大臣ヨリ「ムツソリーニ」首相及「チアノ」外相ニ宛テタル「メッセーヂ」ヲ携行セシメ右「メッセーヂ」ノ内容ヲ相當充實シタルモノトシ使節團伊太利着後右ヲ發表スルコトニ依リ或ル程度日伊關係緊密ナル狀態ヲ世界ニ誇示スルコト適當ナルヘシ

又「メッセーヂ」等ヲ携行スルコトハ別トシ伊國首腦部ト會談ノ後ニ於テ右會談カ相當兩國ノ提携等政治問題ニ關聯シ日伊兩國カ相互理解ヲ一層深メタル趣旨ノ共同「コミュニケーション」等ヲ發表スルコトモ亦一案ナルヘシ右「メッセーヂ」案ニ付キテハ別紙ノ通り

編注 別紙は見当らない。本書第107文書参照。

105 昭和15年4月2日 有田外務大臣より  
在伊国天羽大使宛(電報)

佐藤大使は訪伊後非公式にドイツ等を視察する予定である旨通報

本省 4月2日後7時0分発

第八八號

訪伊使節團ハ使命達成後伊國ニ於テ解散スル處一行中佐藤大使及ビ伊藤公使ハ全然非公式ニ瑞西、獨、蘭、白、佛、英、「バルカン」諸國、土、西班牙等ヲ旅行シ政情視察後米國經由歸朝ノ豫定ナリ不取敢御含置迄  
在歐各大公使ニ轉電アリタシ  
米へ轉電セリ

106 昭和15年5月17日 有田外務大臣より  
在伊国天羽大使宛(電報)

欧州情勢の変化によりイタリアとの協定締結は再考を要すとの結論につき佐藤大使へ通報

付記 昭和十五年六月四日、欧亞局第二課作成

「日伊間相互支援協定締結ニ關スル考察」

本省 5月17日後5時0分発

第一七〇號(至急、館長符號扱)

貴電第三九三號ニ關シ

伊國ガ非交戰國トシテ立ツ限リ帝國ト共通ノ立場ヲ有スルヲ以テ日伊間ノ提携ヲ益々緊密ナラシムル事諸般ノ關係ヨリ兩國ノ爲ニ有利ナルベシトノ考慮ヨリ使節團着伊后先方トノ接觸ノ次第二依リテハ兩國間ニ情報交換乃至協議條項ヲ規定スル協定ノ締結方等ヲ一應考究シタルモ使節團出發后ノ歐洲形勢特ニ最近伊國ノ態度等ニ鑑ミ右ハ此ノ際再考ヲ要ストノ結論ニ達セリ右佐藤大使ニ御傳達相成度

(付記)

日伊間相互支援協定締結ニ關スル考察

(昭和一五、六、四 歐二)

今次歐洲大戰ノ歸趨ハ未ダ遽ニ予斷シ難キモ來ルベキ伊國ノ參戰等ニ依リ戦局ガ短期ノ裡ニ終結ヲ見ル可能性ナキニ非ズ其ノ場合何レガ勝利ヲ得ルトスルモ其ノ結果日本側ハ立場ヲ弱メラルル虞レアリ從ツテ日伊間ニ相互支援ノ協定ヲ爲シ置キ將來媾和會議等ノ場合ニ於ケル與國ヲ獲得シ置

クコト然ルベシトノ在伊天羽大使ノ稟請ニ付キ伊國ガ當然參戰ヲ爲スベシトノ假定ノ下ニ考察セル所左ノ通り

一、利害得失

日伊關係ノ強化ハ當然日本ノ不介入方針ノ或ル程度ノ變更ヲ意味シ對英佛關係ノミナラズ對米關係ニ重大ナル影響アルベキハ當然予測セラルル所ナリ

サリナガラ右不介入方針ノ内容ニ於テ日本ガ獨伊ニ與シ參戰スルト云フガ如キ性質ノモノニ非ズシテ單ニ之ニ「モーラル」ノ支持ヲ與ヘ且戰後ニ於テ相互ノ尊重、協力スベシトノ内容ナルニ於テハ必ズシモ之ヲ以テ米國等ガ日本ニ不當ナル壓迫ヲ加フル理由ト爲シ得ザルベシサリナガラ戰爭ノ終結ガ獨伊側ノ敗北ニ終リタル際ハ日本ハ英米佛勝利國ノ前ニ相當不利ナル立場ニ置カルコトトナルベキモ天羽大使ノ意見ノ通り現在ノ戦局ヨリ推斷スルニ於テハ英佛側ノ勝利ヲ得ルハ今後戰爭ガ長期戰トナリ交戰國ガ何レモ疲弊シタル後ニ於テ初メテ實現シ得ルコトニシテ今後數年ヲ要スルモノト思考セラルルヲ以テ此ノ場合我方ニ於テハ既ニ支那事變ヲ適當處理シ戰後ニ於ケル列國ノ壓迫ニ備ヘ得ルノ實力ヲ養ヒ得ルノ余

裕アルモノト考ヘラル

問題ハ米國ノミナルベキモ日本ガ不介入方針ヲ一擲シ戦  
争ニ参加スル場合ハ戦後聯合國側ヨリ相當ナ壓迫アルベ  
キモ現在通り不介入方針ヲ支持シツツ「モーラル」ノ支  
援ヲ與フル程度ナルニ於テハ必ズシモ不利ナル點多シト  
斷ジ難シ況ヤ獨伊側ガ勝利ヲ得ル公算大トナレルニ於テ  
ヲヤ

結局問題ハ日伊ガ如何ナル點ニ於テ締結スルヤノ點ニ歸  
着スル次第ニシテ大体ニ於テ天羽大使稟請ノ如ク日本政  
府ガ支那ニ於ケル伊國ノ權益ヲ尊重スルノミナラズ今後  
共差支ナキ範圍ニ於テ伊國ノ東亞ニ於ケル活動ニ最モ好  
意的考慮ヲ拂フベキコトヲ約シ伊太利側ハ日本ノ東亞ニ  
於ケル地位ヲ認メ凡ユル場合ニ其ノ立場ヲ支援スルコト  
ヲ約ス程度ニナルニ於テハ双方ノ利害一致シ居ルニ付キ  
可ナリト認メラル

サリナガラ今日ノ所伊國側ガ右ノ如キ微温ナル取極メ  
ヲ欲スルヤ否ヤハ明カナラザルモ從來「ムツソリーニ」  
及「チアノ」外相ガ我が當局者ニ繰返シ言明セル所ニモ  
鑑ミ從來ノ言明ヲ文書ニナシ置ク位ノ輕キ意味ニテ何等

カノ取極メヲ爲スコトハ此ノ際必ズシモ不可ナラズト思  
考ス

右ニ關スル具体案左ノ通り

一、祕密覺書案

日伊兩國代表者ハ本國政府ノ許可ヲ得テ兩國政府ノ政策  
ガ左ノ點ニ於テ一致セルコトヲ確認ストノ趣旨ニテ覺書  
ヲ交換シ置キ右ヲ我方國內手續上ニ於ケル國際約定ト爲  
サザルコト一案ナリトス

二、内容ノ重大ナルニ鑑ミ我方國內手續上國際約定ト爲シ左  
ノ趣旨ヲ規定ス

取極メノ内容

一、日伊兩國政府ハ今後生ズベキ外交上ノ諸問題ニ付キ出來  
得ル限り緊密ナル連絡ヲ保チ相互ニ支援スベキコトヲ約  
ス

二、日本政府ハ東洋ニ於ケル伊太利國ノ權益ヲ尊重シ且其ノ  
經濟的活動ニ對シ最モ好意的考慮ヲ加フベキコトヲ約ス  
一、伊太利政府ハ日本國ノ東亞ニ於ケル地位ヲ認メ右ニ關聯  
スル國際問題生ズル場合ニ於テハ日本ノ立場ヲ支援スベ  
キコトヲ約ス



昭和15年5月17日

有田外務大臣より  
在伊国天羽大使宛（電報）

イタリアが欧州大戦へ参戦した場合における

ムツソリーニ首相およびチアノ外相宛メツ

セージの修正方訓令

別電一 昭和十五年五月十七日発有田外務大臣より在

伊国天羽大使宛第一七三号

右ムツソリーニ首相宛メツセージ修正案

二 昭和十五年五月十七日発有田外務大臣より在

伊国天羽大使宛第一七四号

右チアノ外相宛メツセージ修正案

付記一 昭和十五年四月八日付

右ムツソリーニ首相宛メツセージ原案

二 昭和十五年四月八日付

右チアノ外相宛メツセージ原案

本省 5月17日後8時0分発

第一七二號（極秘）

訪伊使節團ハ米内總理及ビ本大臣ヨリ夫々「ム」首相及ビ

「チ」外相ニ宛テタル「メツセージ」ヲ携行シタル處歐洲

政局ハ近ク伊國ガ参戦乃至貴電第三八八號末段ノ如キ獨自ノ措置ニ出ヅル危險ヲ胎ミ居ルニ付右「メツセージ」ノ内容ニ付テモ再應考慮ノ要アリト思考セラル就テハ使節團「ム」首相等ト會見ニ先チ伊國ノ参戦ヲ見ルガ如キ場合ハ別電第一七三號及第一七四號ノ「メツセージ」ヲ貴方ニテ豫メ可然準備シ置カレ之ヲ手交スルコトトセラレ度ク（此ノ場合署名ナキモノトナルモ已ムヲ得ザルニ付先方ニ對シ卒直ニ電報ヲ以テ接受セルモノナルコトヲ告ゲ使節團出發ノ際用意セル「メツセージ」ハ非交戰國ノ立場ヲ強調シ居ルニ依リ事態ニ即セザルニ至リタリトノ趣旨ヲ打明ケラルルモ差支ナシ從テ日附ハ使節團到着後ノ日附トセラレ度シ）伊國側ノ態度ニ變化ナキ場合ハ使節携行ノモノヲ其儘手交セラルルコトト致度

尙「メツセージ」本文ハ日本文ニシテ右佛譯文ハ使節團ニ於テ船中準備シ置クコトトナリ居ル處其ノ儘提出ノコトトナル場合モ貴使ニ於テ前記次第御含ノ上譯文ニ付キ充分御注意相成り度シ

編 注 チアノ外相宛メツセージは五月二十一日、ムツソリー

二首相宛メッセージは五月二十三日、それぞれ原案通り先方へ手交された。なお、イタリアの対英仏宣戦布告は六月十日になされた。

(別電一)

第一七三號

本省 5月17日後7時20分發

米内總理大臣ノ「ムツソリーニ」首相宛「メッセーヂ」  
總理大臣閣下

曩ニ貴國政府ハ「パウルツチ」侯ヲ團長トスル「ファシスト」黨親善使節團ヲ帝國ニ派遣シ「ファシスト」伊太利國ノ帝國ニ對スル深キ友情ノ證左トセラレ更ニ「コンチ」伯爵團長トスル經濟使節團ヲ派遣シテ日伊兩國ノ經濟關係ノ増進ニ多大ノ成果ヲ擧ケラレタルカ今般日伊兩國ノ經濟的提携關係ノ緊密化ト兩國ノ傳統的親善關係ノ増進ヲ使命トシテ貴國ニ特派セラルル使節團々長佐藤尙武大使閣下ヲ通シ閣下ニ對シ「ファシスト」伊太利政府及伊太利國民ニ對スル日本政府及日本國民ノ深キ尊敬ト友情ノ念ヲ傳達スルノ機會ヲ得タルハ予ノ最モ光榮且欣快トスル所ナリ

今ヤ東亞ニ於ケル新秩序建設ノ大業ハ新支那中央政府ノ樹立ト共ニ其ノ輝カシキ黎明ヲ見ルニ至リシカ伊國官民ハ支那事變當初ヨリ今日アルヲ明察シ終始一貫帝國ニ對シ最モ理解アル好意的支持ノ態度ヲ堅持セラレ帝國官民ニ深キ感銘ヲ與ヘラレタリ東西ニ輝カシキ傳統ト文化ヲ誇ル日伊兩國ノ提携カ政治經濟文化ノ各方面ニ亘リ日ト共ニ益々其ノ緊密ノ度ヲ加ヘツツアルハ單リ日伊兩國ノ爲ノミナラス世界人類平和ノ爲同慶ニ堪ヘス

今次歐洲戰爭勃發ニ伴フ世界ノ情勢ハ極メテ重大ナル處光輝アル古「ローマ」ノ傳統ヲ繼承シ愛國ノ熱火ニ燃ユル新興「ファシスト」伊太利國民カ此ノ複雜ニシテ機微ナル世界ノ情勢ニ對處シ祖國ノ爲努力ヲ拂ハレツツアル歴史の時機ニ際シ本使節團ニ「メッセーヂ」ヲ託シ閣下ニ予ノ深甚ナル敬意ヲ表スルヲ特ニ欣幸トス茲ニ日伊兩國ノ益々敦厚ナル親交ヲ祝福シ併セテ友邦伊太利國及伊太利國民ノ前途益々多幸ナランコトヲ祈念ス

昭和十五年四月八日

伊太利國

(米内總理大臣自署)

總理大臣 「ベニト、ムッソリーニ」閣下

(別電二)

第一七四號

本省 5月17日後7時20分發

有田外務大臣ノ「チアノ」外相宛ノ「メッセーヂ」  
外務大臣閣下

日伊兩國經濟關係ノ緊密化ト兩國ノ傳統的親善關係ノ増進  
ヲ使命トシテ今般貴國ニ派遣セラルル使節團々長佐藤尙武  
大使閣下ニ本「メッセーヂ」ヲ託シ閣下竝ニ伊太利國民ニ  
對スル予ノ衷心ヨリノ敬意ヲ表スルノ機會ヲ得タルハ予ノ  
最モ光榮且欣快トスル所ナリ

日伊兩國間ノ經濟提携關係ハ曩ニ貴國政府ノ派遣セラレタ  
ル「コンチ」伯ヲ團長トスル經濟使節團來朝ニ依リ一層増  
進セラレタルカ其ノ後ノ東亞及歐洲ニ於ケル事態ノ展開ニ  
伴フ世界ノ情勢ハ日伊兩國ノ經濟關係ニ新タナル檢討ヲ加  
ヘ兩國ノ相互扶助關係ヲ更ニ密接ナラシムルヲ適當ト認メ  
シムルニ至レリ

今次使節團派遣ノ主タル目的ハ此ノ新タナル事態ニ對處シ

曩ニ「コンチ」伯ノ本邦訪問ノ機會ニ締結セラレタル協定  
ニ改訂ヲ加フルノ可能性ヲ檢討スルト共ニ日伊兩國ニ共通  
ノ利害アル諸問題ニ關聯シ一層相互ノ理解ヲ深メントスル  
ニ在リ

日伊兩國ノ親交關係カ防共協定締結以來兩國民ノ深キ相互  
理解ト信頼ヲ背景トシ日ニ益々敦厚ヲ加ヘツツアルハ單ニ  
兩國民ノ爲ノミナラス世界人類ノ福祉ノ爲慶賀ニ堪ヘサル  
所ナリ我日本帝國カ過去二年有餘ニ亘リ其ノ努力ヲ傾注セ  
ル東亞ノ秩序再建設ノ事業ニ對シ伊太利國官民ハ終始一貫  
最モ理解アル好意の支持ノ態度ヲ堅持セラレタルカ今ヤ新  
支那中央政府ノ樹立ト共ニ東亞ハ其ノ新シキ秩序ニ確乎タ  
ル礎石ヲ築クニ成功セリ

現下世界ノ情勢ハ極メテ重大ニシテ歐洲戰爭ノ進展ト其ノ  
歸趨如何ハ帝國政府カ其ノ不介入ノ態度ヲ堅持シツツ重大  
關心ヲ以テ注視シ居ル所ナルカ世界文明ノ將來ヲ左右スヘ  
キ機微ナル局面ニ對處スル伊太利國民ノ熱烈ナル愛國心ハ  
日本國民ノ全幅ノ讚歎ヲ惜マサル所ニシテ此ノ日伊兩國民  
ニ共通ナル愛國ノ精神コソ兩國ヲ強固ニ結合スル紐帶ト云  
フヘク兩國ノ緊密ナル提携ハ眞ノ世界平和ノ爲益々其ノ光

彩ヲ發揮スヘキモノナルコトヲ疑ハズ

予ハ茲ニ閣下ニ對シ深甚ナル敬意ヲ表スルト共ニ友邦「ファシスト」伊太利國ノ前途益々多幸ナランコトヲ祈念ス

昭和十五年四月八日

(有田外務大臣自署)

伊太利國

外務大臣伯爵「ガレアツツォ、チアノ」閣下

(付記一)

米内總理大臣ノ「ムッソリーニ」首相宛「メッセーヂ」

總理大臣閣下

曩ニ貴國政府ハ「パウルツチ」侯ヲ團長トスル「ファシスト」黨親善使節團ヲ帝國ニ派遣シ「ファシスト」伊太利國ノ帝國ニ對スル深キ友情ノ證左トセラレ更ニ「コンチ」伯爵團長トスル經濟使節團ヲ派遣シテ日伊兩國ノ經濟關係ノ増進ニ多大ノ成果ヲ擧ケラレタルカ今般日伊兩國ノ經濟的提携關係ノ緊密化ト兩國ノ傳統的親善關係ノ増進ヲ使命トシテ貴國ニ特派セラルル使節團々長佐藤尙武大使閣下ヲ通シ閣下ニ對シ「ファシスト」伊太利政府及伊太利國民ニ對

スル日本政府及日本國民ノ深キ尊敬ト友情ノ念ヲ傳達スルノ機會ヲ得タルハ予ノ最モ光榮且欣快トスル所ナリ

今や東亞ニ於ケル新秩序建設ノ大業ハ新支那中央政府ノ樹立ト共ニ其ノ輝カシキ黎明ヲ見ルニ至リシカ伊國官民ハ支那事變當初ヨリ今日アルヲ明察シ終始一貫帝國ニ對シ最モ理解アル好意の支持ノ態度ヲ堅持セラレ帝國官民ニ深キ感銘ヲ與ヘラレタリ東西ニ輝カシキ傳統ト文化ヲ誇リ日伊兩國ノ提携力其ノ深キ相互理解ト共通ノ正義ノ理念ノ上ニ政治經濟文化ノ各方面ニ亘リ日ト共ニ益々其ノ緊密ノ度ヲ加ヘツツアルハ單リ日伊兩國ノ爲ノミナラス正義ニ基ク恆久の平和ノ樹立ヲ渴望スル世界人類ノ爲同慶ニ堪ヘス

今次歐洲戰爭勃發ニ伴フ世界ノ情勢ハ極メテ重大ナル處光輝アル古「ローマ」ノ傳統ヲ繼承シ正義ト愛國ノ熱火ニ燃ユル新興「ファシスト」伊太利國民カ此ノ複雑ニシテ機微ナル世界ノ情勢ニ對處シ國際正義ノ確立ト祖國ノ興隆ノ爲拂ハレツツアル努力ト其ノ成果トハ日本國民ノ深キ共感ト友情ヲ以テ注視シ且祝福スル所ニシテ防共協定ノ締結以來不動ノ基礎ヲ確立スルニ至レル日伊兩國ノ提携ハ此ノ混亂セル世界ノ暗黒ヲ通スル一道ノ光明トシテ將來益々其ノ光

彩ヲ發揮スヘキ天與ノ使命ヲ有スルモノト信ス  
予ハ此ノ歴史の時機ニ際シ派遣セラルル使節團ニ本「メッ  
セーヂ」ヲ託シ閣下ニ深甚ナル敬意ヲ表スルト共ニ日伊兩  
國ノ益々敦厚ナル親交ノ表徴トナシ併セテ友邦伊太利國及  
伊太利國民ノ前途益々多幸ナランコトヲ祈念ス

昭和十五年四月八日

(米内總理大臣自署)

伊太利國

總理大臣 「ベニト、ムッソリーニ」閣下

(付記一)

有田外務大臣ノ「チアノ」外相宛ノ「メッセーヂ」

外務大臣閣下

日伊兩國經濟關係ノ緊密化ト兩國ノ傳統的親善關係ノ増進  
ヲ使命トシテ今般貴國ニ派遣セラルル使節團々長佐藤尙武  
大使閣下ニ本「メッセーヂ」ヲ託シ閣下竝ニ伊太利國民ニ  
對スル予ノ衷心ヨリノ敬意ヲ表スルノ機會ヲ得タルハ予ノ  
最モ光榮且欣快トスル所ナリ

日伊兩國間ノ經濟提携關係ハ曩ニ貴國政府ノ派遣セラレタ

ル「コンチ」伯ヲ團長トスル經濟使節團來朝ニ依リ一層増  
進セラレタルカ其ノ後ノ東亞及歐洲ニ於ケル事態ノ展開ニ  
伴フ世界ノ情勢ハ日伊兩國ノ經濟關係ニ新ナル檢討ヲ加  
ヘ兩國ノ相互扶助關係ヲ更ニ密接ナラシムルヲ適當ト認メ  
シムルニ至レリ

今次使節團派遣ノ主タル目的ハ此ノ新タナル事態ニ對處シ  
曩ニ「コンチ」伯ノ本邦訪問ノ機會ニ締結セラレタル協定  
ニ改訂ヲ加フルノ可能性ヲ檢討スルト共ニ世界情勢ノ進展  
ニ伴ヒ生起スヘキ日伊兩國ニ共通ノ利害アル諸問題ニ關聯  
シ一層相互ノ理解ヲ深メントスルニ在リ

日伊兩國ノ親交關係カ防共協定締結以來兩國民ノ深キ相互  
理解ト信頼ヲ背景トシ日ニ益々敦厚ヲ加ヘツツアルハ單ニ  
兩國民ノ爲ノミナラス正義ニ基ク恆久的の平和ノ確立將又世  
界人類ノ福祉ノ爲慶賀ニ堪ヘサル所ナリ我日本帝國カ過去  
二年有餘ニ亘リ其ノ努力ヲ傾注セル東亞ノ秩序再建設ノ事  
業ニ對シ伊太利國官民ハ終始一貫最モ理解アル好意の支持  
ノ態度ヲ堅持セラレタルカ今ヤ新支那中央政府ノ樹立ト共  
ニ東亞ハ其ノ新シキ秩序ニ確乎タル礎石ヲ築クニ成功セリ  
現下世界ノ情勢ハ極メテ重大ニシテ歐洲戰爭ノ進展ト其ノ

歸趨如何ハ帝國政府カ其ノ不介入ノ態度ヲ堅持シツツ重大關心ヲ以テ注視シ居ル所ナルカ世界文明ノ將來ヲ左右スヘキ機微ナル局面ニ對處スル伊太利國民ノ熱烈ナル正義心ト愛國心ハ日本國民ノ全幅ノ讚歎ヲ惜マサル所ニシテ此ノ正義ト愛國ノ精神コソ日伊兩國ヲ強固ニ結合スル紐帶ト云フヘク右ニ依リ結ハルル兩國ノ緊密ナル提携ハ此ノ重大ナル時局ニ際シ將來益々其ノ光彩ヲ發揮スヘキモノナルコトハ疑ナキ所ナリ

予ハ茲ニ閣下ニ對シ深甚ナル敬意ヲ表スルト共ニ友邦「フアシスト」伊太利國ノ前途益々多幸ナランコトヲ祈念ス

昭和十五年四月八日

(有田外務大臣自署)

伊太利國

外務大臣伯爵「ガレアツツオ、チアノ」閣下

108

昭和15年5月20日

在独国外務大使より  
有田外務大臣宛(電報)

欧州戦局の変化に应じ日中戦争処理方針の適

宜再検討方意見具申

ベルリン 5月20日前発  
本省 5月21日前着

第五一三號(館長符號扱)

一、<sup>(1)</sup>前同大戦ニ於ケル「マルヌ」會議ノ先例ハ有之モ獨逸ノ蘭白進撃カ如何ニモ目覺シク且新兵器新戦術ノ偉力モ頻リニ傳ヘラレ居ル結果我國一部ニ於テハ獨逸カ此ノ儘武力ノミニ依リ一氣ニ英佛ヲ壓迫シ得ルモノト即斷シ居ルヤニ推セラルル節アル處(我參謀本部ノ判斷ハ然ラスト傳承ス)本使ノ所見ヲ以テスレハ恐ラク獨逸カ今日最モ苦心シツツアル所ハ外交手段ヲモ竝用シ戦局ヲ有利且迅速ニ終結セシメル方策如何ニ存シ現ニ獨逸海軍首腦部カ蘭印問題ノ關係ニテ當館遠藤武官ニ對シ今後日本ノ行動如何ニ依リ戦局ヲ獨逸ノ爲有利迅速ニ收拾シ得ル機會出現シタル場合ハ日本カ見逃ササランコトヲ望ムト申越セルカ如キ蓋シ其ノ片鱗ト見ルヲ得ヘシ

二、前同大戦同様戦線何處ニ於テカ膠着シ長期戦トナルハ獨逸ノ最モ避ケント欲スル所ナルト同時ニ當面ノ目標タル英佛ヲ急追スルノ余リ甚タシク兵力器材ヲ消耗シ背面ニ控ヘ居ル蘇聯ヲシテ軍事經濟ノ双方ニ亘リ獨逸ノ急所ヲ

握ラシムルニ至ルカ如キモ亦相當遠大ナル慮リヲ有スヘキ「ヒットラー」等トシテ警戒ヲ怠ラサル所ナルヘク其ノ間ノ掛合頗ル微妙ニシテ從ツテ伊太利參戰ニ關シテモ獨逸トシテハ戰線擴大ノ得失、大体定評アル伊國陸兵ノ素質及巴爾幹ニ於ケル獨蘇伊ノ利害必スシモ一致セサル關係等ヲ考慮シ少クトモ今直ニ伊國ノ參戰ヲモ望ミ居ルモノトハ思考スルヲ得ス

三、<sup>(2)</sup>蓋シ獨逸トシテハ對英佛決戰及來ルヘキ和平兩方面ニ於テ伊太利ヲ利用セン肚ナルヘク從來米國力和平問題ニ關シ常ニ伊太利ヲ念頭ニ置キ「ウエルズ」使節ノ如キモ順路トハ言ヘ先ツ非交戰國タル伊國ト意見ヲ交換シタルコト及米國力差當リ手ノ付ケ様ナシトハ知リツツモ戰爭不擴大又ハ和平成立ニ向ツテ「ヂエスチュア」ヲ繰返シ伊太利ヲ最後迄動かサントスル情勢ニ至レルニ鑑ミ（伊發往電第三八五號米國ノ對伊警告ハ必スシモ米國最後ノ科白トハ斷シ難カルヘシ）伊國ニ對シテハ寧ろ此ノ方向ニ於テ非交戰國トシテ獨逸ヲ援助スルコトモ期待シ居ルヘク旁々伊太利最近ノ示威的態度ハ實際參戰ノ一步手前ノ態勢ヲ執リ西部戰線ニ於ケル獨ノ作戰の立場ヲ側面援護

セシムルト共ニ他面萬一平和來ノ場合ヲモ考ヘ英、米、佛ニ對シ伊太利ノ地中海ニ對スル要望ヲ深刻ニ印象セシメ置カントスル底意ヲ含ミ居ルヤニ認メラル

四、<sup>(3)</sup>以上ハ主トシテ獨逸側ノ立場ヲ付度シテノ觀測ナルモ英佛將又伊側ニ於テモ勿論種々迷惑アルヘク又米側トシテモ少クトモ英國ノ內密ノ意嚮明カナラサル限り輕々ニ和平運動ニ乗出スカ如キコト萬ナカルヘク旁々外交局面ノ展開ハ戰局同様遽ニ豫斷ヲ許サルモノアルモ何ノ途我國ノ地位利益々重要ヲ加フヘキハ疑ナク此ノ際日支事變ノ關係上我國ノ外交的活動力兎角意ノ如クナラス一部外國ヲシテ些力鼎ノ輕重ヲスラ問ハシメツツアルカ如キ事態ハ成ルヘク急速ニ調整スルコト我國トシテ最モ緊要ナリト思考セラルルニ付既定ノ事變處理方針ニ關シテモ如上ノ重大時局ヲ考慮シ適宜再檢討ヲ加ヘラルルコト切ニ希望ニ堪ヘス（英發往電第七七一號御參照）

右卑見敢テ具申ス

米、伊、蘇ヘ轉電セリ

伊ヨリ英、佛ヘ轉電アリタシ

109

昭和15年5月25日

有田外務大臣より  
在伊国天羽大使宛(電報)

佐藤大使のドイツ訪問が公式訪問の形になら

ぬよう注意喚起

本省 5月25日後8時30分発

第一九四號(極秘、館長符號扱)

貴電第四三二號二關シ

佐藤大使へ

豫定通り旅行セラレ差支ナキモ獨逸訪問ガ恰モ公式訪問ノ  
如キ形ヲトル事ハ對伊關係上モ面白カラザルニ付此ノ點御  
如才ナキコト乍ラ充分御留意相成度

~~~~~

110

昭和15年6月8日

有田外務大臣より
在伊国天羽大使宛(電報)

今後のドイツの動向等に関し独要人へ打診方

佐藤大使へ訓令

本省 6月8日後7時0分発

第二三三號(極秘、館長符號扱)

貴電第四九五號二關シ

佐藤大使へ

豫定通り獨逸ヲ訪問セラレ差支ナク獨逸側ニ於テ多少宣傳
的ニ取扱フモ已ムヲ得ザルニ付出來得ル限り先方要人トノ
接觸ヲ遂ゲラレ獨逸今后ノ動向等打診セラルル様致度
獨へ轉電アリタシ

~~~~~

111

昭和15年6月24日

有田外務大臣より  
在独国来栖大使宛(電報)

ヒトラー總統等との会談の際の発言要領につ

き佐藤大使へ訓令

別電

昭和十五年六月二十四日発有田外務大臣より

在独国来栖大使宛第三九九号

右要領

付記

昭和十五年七月(日付不明)発有田外務大臣よ

り在独国来栖大使宛電報

ヒトラーおよびリッペントロップ外相との会

談の際に意見交換すべき諸点

本省 6月24日後7時0分発

第三九八號(極秘、大至急、館長符號扱)



佐藤大使へ

貴使「ヒットラー」等ト會談セラルル際ハ別電第三九九號ノ趣旨ヲ述ヘラルルコトト致度シ尙其ノ際話ノ都合ニ依リテハ貴使「ムツソリニ」話合ノ次第ヲ適宜通ジ置カルルコトモ一案ナルヘシト思考ス、又佛印問題ニ關シ來栖大使ヨリ「ワ」次官ヘ申入レノ次第モ適宜御利用相成度別電ト共ニ伊ニ轉電アリタシ

(別電)

本省 6月24日後7時0分發

\*第三九九號(大至急、館長符號扱)

今日ノ世界ニ於テ各國ハ政治的經濟的ニ相關性アリ其ノ一隅ニ起リタル事件モ他ノ世界ノ部分ニ影響ヲ及サザル事ナキ處他面種々ノ原因ニ依リ世界ノ諸國ニハ地域的分野カ自ラ存在スルコトモ否ミ難シ殊ニ最近ノ世界的變動期ニ至リ(一)東亞及南洋地方(二)歐洲及亞弗利加地方(三)南中北米地方ガ三大分野ヲ形成セントスルノ傾向ハ顯著ナルモノアリ從テ此ノ三大區域内ニ於ケル平和ヲ維持シ進ンテ世界ノ平和ヲ確保センコトハ各區域内ニ於ケル安定勢力タル國家重大ナ

ル責務タルト共ニ各地域内ノ安定勢力タル國家各々他方ノ政治、經濟上ノ特色ヲ尊重シ互ニ相侵サス進ンテ該地域ノ安定ニ協力シ而モ資源及文化ノ上ニハ有無相通シ長短相補足スルノ理解ト雅量トヲ有スルコト肝要ナリ

從テ帝國トシテハ南洋地方ヲ含ム東亞ノ諸民族ト共ニ之等地域ノ安定ニ基ク惠福ヲ分タントスルモノニシテ從來幾度カ干戈ヲ辭セサリシモ亦右關係ニ基クモノニ外ナラズ蓋シ我建國ノ大義ニ照スニ世界萬物各々其ノ所ヲ得シムルヲ以テ理想トス從テ我對外政策ノ根本方針モ亦帝國ノ世界ニ於ケル當然ノ地位ヲ確保スルニアルハ勿論ナルト同時ニ世界諸民族ガ均シク其ノ所ヲ得ンコトヲ望ミテ已マザルモノナルカ先以テ帝國トシテハ其ノ分擔スル地域ノ安寧福祉確保ニ努力セントスルモノナリ

(付記)

☆佐藤大使へ

本省 發

往電第三九八號ニ關シ

貴使獨側首腦ト會談セラルル際往電第三九八號別電ノ趣旨

ヲ述ヘラルルコトハ勿論ナルモ「ヒトラー」又ハ「リッペン」トハ左記御含ノ上此等諸點ニ付テモ腹藏ナキ意見ヲ交換セラレタシ

一、日獨兩國ハ夫々東亞(南洋ヲ含ム)及歐洲(阿弗利加ヲ含ム)ニ於テ新秩序建設ニ邁進シ居レルカ其ノ前途ニハ幾多ノ障礙アリ正義ト公平ニ基ク世界新秩序建設ノ共通ノ理念ヲ有スル兩國カ各其分野ニ於テ活動シ相互ニ協力スルコトハ前記目的達成ノ爲極メテ有益且必要ナルモノト信ス

二、帝國ハ過去三ヶ年以來支那ニ於ケル新秩序ノ實現ニ努力シ居レルカ其ノ反響トシテ英米佛ノ勢力ヲ牽制シ歐洲ニ於ケル新秩序ノ建設ニ好都合ナル事態ヲ齎シ居レルハ理解ニ難カラサルヘク又歐洲ニ於ケル獨逸戰勝ノ結果ハ南洋ヲ含ム東亞ノ事態ニ少ナカラヌ影響ヲ齎シ居レル事モ事實ナリ一言ニシテ云ヘハ日獨兩國ハ世界政策遂行上共存共榮ノ體勢ニ在リ

三、蘇聯ニ對スル問題モ日獨間ニ共通ナル問題ニシテ現下ノ事態ニ於テハ兩國共蘇聯トノ平和維持ヲ必要トシ日本モ之カ爲努力シツツアルカ蘇聯トノ平和維持ニ關シ日獨兩

國ハ相互ニ協力シ得ル立場ニアリト思考ス

四、歐洲及東亞ニ於ケル新秩序建設體勢ニ鑑ミ米國ヲシテ其ノ分野ヲ守リ妄リニ他方面ニ容喙セシメサルヲ日獨兩國共通ノ利益ナリト思考ス

五、斯クノ如ク日獨兩國ハ其ノ世界政策上多クノ點ニ於テ共通ノ利害關係ニ在ルヲ以テ帝國トシテハ其ノ自然的生存圈内ニ在ル東亞及佛印蘭印其他南洋地方ニ對スル日本ノ政策ヲ獨逸カ理解シ之ヲ支持セムコトヲ期待スルト共ニ獨逸カ歐洲及阿弗利加方面ニ於テ其ノ政策ニ成功セムコトヲ希望スルモノナリ尙經濟問題ニ付テハ帝國ハ東亞及南洋方面ニ對シ此等地方ノ平和ト繁榮トヲ確保シ其ノ資源ヲ人類福祉ノ爲開發利用セムコトヲ期スルモノナルカ此レト同時ニ帝國モ亦獨逸カ安定圈相互間ニ於テ同様經濟上有無相通ズル政策ニ出テムコトヲ期待スルモノナリ六、前項ト同様ノ理由ニ依リ支那事變處理ニ付テモ帝國トシテハ獨逸ノ理解アル態度ヲ期待スルモノニシテ帝國カ支那事變ヲ速ニ處理シ自由ナル立場ニ歸ルハ間接ニ獨逸ノ爲ニモ有益ナルヘシト思考ス

112

昭和15年6月25日

在独国外務大臣宛(電報)

フランス降伏後の欧州情勢を踏まえたわが方の採るべき立場につき具申

ベルリン 6月25日後発

本省 6月26日後着

第七七八號(極秘、館長符號扱)

一、<sup>(1)</sup>佛ヲ屈服セシメタル獨逸ハ今ヤ渾身ノ力ヲ舉ケテ英國攻撃ニ移リタルカ此ノ調子ニテ行ケハ遠カラス對英制空權把握、英本土上陸作戰ノ成功等ニ依リ英本國モ亦獨軍ノ支配ニ歸スル公算モ少カラスト認メラルル處此ノ場合英政府カ例ヘハ加奈陀ニ移轉シ米ヲ後楯ニ飽迄抗爭ヲ續クルヤ否ヤ今日ノ情勢トナリテハ可成リノ問題ト云フヘク何レニスルモ歐洲、地中海、阿弗利加ニ於ケル限り獨伊ノ所謂「レーベンスラウム」ハ大体確保セラルルニ至ルヘシ「ヒトラー」政權掌握以來八年遂ニ強敵佛ヲ屠リ更ニ英帝國ノ本據ヲ衝カントスル獨軍及銃後ニ能率發揮ニ

必勝ノ精神力ニ付テハ其ノ因テ來ル所ヲ虚心坦懷檢討シ他山ノ石ト爲スヘキニシテ又蘭白、佛ニ於ケル獨軍ノ軍紀嚴正、安民ノ效果ヲ舉ケツツアル顯著ナル事實ノ如キ色々ノ説明ハアルヘキモ要スルニ獨爲政者及軍部ノ對英作戰ニ控フル尋常一樣ナラサル覺悟ヲ反映スルモノト認ム

二、近キ將來歐洲ヲ中心トシ獨ノ霸業成ルトスルモ海上權ヲ伴ハサル限り米國ヲ中心トシ英屬領ヲ糾合セル反獨伊「ブロック」(數百萬ノ獨伊系ノ住民ヲ國內ニ有スル伯拉西爾、亞爾然丁等モ對獨伊恐怖感及「ラテン」的「イデオロギー」ヨリ恐ラク之ト同調スヘシ)ニ迄止ヲ刺スコト不可能ニシテ結局之等ハ獨伊樞軸ト海ヲ隔テテ對峙關係ヲ持續スヘシ

三、<sup>(2)</sup>尤モ經濟問題トシテハ一方歐洲大陸ノミノ自給自足經濟確立ハ假令可能ナリトスルモ少クトモ多大ノ困難ニ逢着スヘキト同時ニ他方米國、加奈陀、濠洲(亞爾然丁モ同様)等ニ取リテモ其ノ農產物ノ主要輸出先タル歐洲市場ヲ長ク喪失スルハ頗ル苦痛ナルヘキヲ以テ前記兩「ブロック」ノ對立ハ早晚緩和セラルヘキ素因ハ充分存スルモ

國際關係ハ素ヨリ經濟ノミヲ以テ律スヘカラス佛ハ言ハスモカナ「アングロサクソン」國家群ノ臥薪嘗膽的氣分ハ容易ニ拭ヒ去ルヘクモアラス國際政局ノ將來ハ戰後ニ來ルヘキ社會上經濟上ノ變革ト相俟テ相變ラス完全ナル安定ヲ期スルヲ得サルヘシ

四、如上兩國家群對峙ノ間ニ介在シ帝國ノ地位ハ今後益々重キヲ加ヘ其ノ一舉一動ハ蘇聯邦ノ向背ト共ニ歐米諸國ノ重大ナル關心ノ目標トナルヘキ趨勢ニ在リ此ノ間亞細亞、南洋ノ諸民族カ帝國ニ對シ無言ノ期待ヲ寄セ居ルコトハ留意ヲ要スヘシ（本使來歐以來努メテ亞細亞諸國ノ外交團同僚ト接觸シ來レル結果其ノ感特ニ深シ）帝國トシテ現下ノ重大國際政局ニ處スルト雖賢明ナル途ハドツシリ東亞ニ腰ヲ下シ之ヲ侵サントスル勢力ハ其ノ何國タルヲ問ハス國內結束全力ヲ舉ケテ之ヲ排撃スルノ構ヲ具現スルニ存スヘク東亞ノ盟主トシテ世界ヲ相手スヘキ地位ニ鑑ミ單ニ歐洲一角ノ事態ニ幻惑シ一ノ追隨外交ヲ斥ケテ他ノ追隨外交ニ情シ自之獨往ノ態度ヲ忘ルルカ如キ最モ戒シムヘキ所ナリト思考ス

五、<sup>(3)</sup>此ノ關係ニ於テ大切ナルハ何ト言ヒテモ事變處理ニシテ

先ツ諸外國ノ援將勢力ヲ排除スルノ御趣旨ヲ以テ既ニ英佛ニ對シ壓力ヲ加ヘラレ且蘇聯ニ對シテモ蘇宛貴電第四二五號ノ方策ニ出テラレントシツツアルモノト拜察ス就テハ東亞、南洋問題ノ今後ニ最モ關係ヲ有スヘキ米國ニ對シテモ米宛貴電第二一二號前段ノ次第ハ有之モ何等カノ措置ニ出テラルルコト必要ト存ス蓋シ東亞ニ於テハ曩ニ野村外相就任ノ際太平洋平和維持ニ對スル我方ノ提案ニ耳ヲ藉ササリシヤニ傳ヘラレ歐洲ニ於テハ「ミュンヘン」會議以來「チエンバレン」ノ「アツピーズメント」政策ヲ論難シ在英佛米大使ノ言動相俟テ英佛等ノ對獨戰爭熱ヲ煽リタルニ過キサル米國モ最近ノ歐洲戰局ニ直面シテハ流石ニ國際政局ヲ慎重且現實的ニ考慮スルノ傾向ヲ帶ヒ來ルニ相違ナシト想像セラレ（今回ノ米內閣改組モ其ノ現レニアラスヤト思ハル）大体前掲米宛貴電末段ノ情勢近ツキツツアルヤニ思考セラルル次第ナリ輓近我國ノ有力ナル一部ニ對獨伊關係強化論擡頭シ居リ政府ニ於カレテモ種々御研究中ノコトト察スル處本使ノ觀ル所ヲ以テスレハ此ノ際日支關係ハ勿論蘭印、佛印問題等總テヲ包含スル西太平洋平和維持ニ關スル抱負及決意ヲ適

當ナル方法ニ依リ天下ニ明カニセラレ現下ノ國際情勢ニ  
即シ米英ノ再考ヲ促シ根氣強ク特ニ米ノ態度轉換ヲ期セ  
ラレ、以テ事變處理、對南方發展ニ資セラレンコト第一  
義ト信ス

米、蘇、伊、壽府へ轉電セリ

壽府ヨリ英へ轉電アリタシ



113 昭和15年7月10日

在独国外務大臣宛(電報)  
有田外務大臣宛(電報)

### 佐藤・リッベントロップ會談報告

ベルリン 7月10日前發

本省 7月10日夜着

☆ 第八七〇號(極秘、館長符號扱)

<sup>(1)</sup> 貴電第四二七號ニ關シ

佐藤大使ヨリ

「リ」外相久シク不在ノ爲漸ク本八日伯林ニテ面會來栖大  
使、河相公使ト共ニ會談一時間二十分ニ亘リ意見交換ヲ爲  
セルカ其ノ要領左ノ通り

一、本使ヨリ先ツ獨ノ歐洲新秩序建設ノ企圖着々進捗シ佛ニ

於テ偉大ナル成功ヲ贏得ラレタルコトニ對シ日本政府ノ  
慶祝ヲ呈スル旨挨拶シタル後本使伯林通過ノ機ニ於テ帝  
國政府ノ命ニ依リ日本政府ノ意見ヲ傳達致度ク且自分ハ  
近々歸朝スヘキニ付獨政府ノ意嚮モ日本ヘ齎ラスヘシト  
前置シ冒頭電記載ノ各項ヲ説述シ更ニ蘭印、佛印等ノ問  
題ニ付帝國政府ノ採レル見解ニ對シテハ既ニ累次來栖大  
使ヨリ外務次官ニ説明セル處アルニ付多分貴聞ニ達シ居  
ルコトト存スルモ是等ノ諸點ニ關シ貴見ヲ伺フヲ得ハ幸  
甚ナリト述ヘタル處「リ」ハ逐一之ヲ傾聽シタル後帝國  
政府カ各般ノ問題ニ亘リ獨逸政府ト協力ヲ欲セラルル點  
ハ獨逸ノ欣快トスル所ニシテ獨トシテハ過去ニ於テモ日  
本ト密接ナル行動ニ出テ充分ナル了解ニ到達スヘク努力  
シタルハ御承知ノ通りナリ唯自分ハ獨力何ヲ欲スルヤノ  
點ニ付テハ明カナル認識ヲ有スルモ日本ノ企圖カ奈邊ニ  
アリヤニ關シテハ遺憾乍ラ明確ナル知識ヲ持チ兼ヌル次  
第二シテ兩國間ノ協力モ必要乍ラ先ツ日本カ果シテ具體  
的ニ何ヲ希望セラルルヤヲ承知致度シ尤モ日本ノ極東ニ  
於ケル行動カ歐洲ニ對シ大ナル影響ヲ與ヘ獨逸力之ニ依  
リ大ナル便宜ヲ得タルハ御説明ノ通ニシテ日本モ亦獨逸

ノ理解アル態度ニ依リ支那問題ニ關シ各般ノ利益ヲ獲得セルハ事實ニシテ若シ獨逸ノ斯クノ如キ好意の態度ナカリセハ日本カ現ニ支那ニ於テ收メタルカ如キ大ナル戰果ハ或ハ期待シ得サリシナルヘシト述ヘタリ

二、<sup>(2)</sup>仍テ本使ハ成程從來日本ノ外交政策カ外觀ニ於テ捕捉シ難キ點アリシヤモ知レサルモ右ハ日本カ滿洲事變發生以來九年ニ亘リ直面シタル外交上ノ種々ナル困難障礙ノ爲或場合ニハ或方向ニ進マントシツツ次ノ場合ニ於テ局面ノ變化ノ爲曩ノ方針ニ大ナル改變ヲ加ヘサルヲ得サリシ等ノ事實ノ爲外觀ノ疑惑ヲ買ヒタル場合モアリシヤニ認メラルルモ日本カ九年此ノ方特ニ過去三年來邁進シ來リタル要點ハ支那ニ於テノ新秩序建設即チ華盛頓體制ヨリ離脱シテ日本ト友好的ナル新シキ支那ヲ造ラントスル點ニシテ之カ爲英米佛等ノ強大ナル勢力ニ拮抗シ來リタル次第ナリトテ過般伊太利當局ニ對シ述ヘラレタル所ト同様ノ趣旨ヲ以テ九箇國體制脱却ノ根本方針ニ關シ意見ヲ開陳セリ

三、次ニ「リ」ハ日米間ノ問題ニシテ特ニ相互ノ了解ヲ困難ナラシムル點ハ果シテ右新秩序ノ問題ノミナルヘキヤ其

ノ他ノ點例ヘハ日米間海軍ノ平等問題等カ兩國國交ヲ阻害シ居ルニアラスヤト質問シ來レルニ依リ本使ハ日米間紛爭ノ最大原因ハ正ニ支那問題ニ在リ米人ハ良カレ惡シカレ支那ノ保護ヲ以テ任スルカ故日本ノ新秩序建設ノ主張ハ彼等ノ喜フ所ニアラス米國ハ常ニ大西洋上ニ於ケル海軍ノ優勢ヲ保チ之ニ依リ太平洋ノ警察權ヲ把握スルヲ念トスルモノニシテ支那問題ニ關スル限り日米間主張ハ相容レサルモノアリト説明セル處「リ」ハ之ニ對シ米ハ資本生産共ニ飽和シ居ル結果戰後ニ於テ商品ノ捌口ニ窮シ寧口進ンテ日本ニ對シ原料及製造品ノ供給ヲ潤澤ナラシムヘク斯クシテ日米關係ハ好轉ノ機運ニ向フニアラスヤト想像セラルト述ヘ

更ニ一國ノ政治力カ強大トナレハ經濟上ノ諸問題ハ自然<sup>(3)</sup>ニ其ノ欲スルカ如キ形ニ於テ解決セラルルモノニシテ獨逸ノ如キ最近其ノ政治力カ強大ヲ加フルニ從ヒ原料問題ノ如キ製造品輸出問題ノ如キ皆常ニ獨ノ満足スル様解決セラレ居レリトテ暗ニ獨逸大勝ノ後ニ於ケル經濟力ノ發展ヲ誇示シ且米國ハ世界ノ金ヲ殆ト九割ヲ占有スルニ至リタルモ金ハ既ニ物資交換ノ用具ニアラス戰後ニ於テモ

獨逸ハ國內のニ全然金ニ倚存セサル經濟ヲ建設シ僅ニ國際間ノ貿易決濟ニ金ヲ利用スルニ過キサルヘシ米國ハ有餘ル金ヲ保持シ生産力擴充ノ結果商品溢レ外國市場ノ獲得ニ日モ足ラサル有様トナルヘシトテ米カ商品賣込ニ急ニシテ大國トシテ左程恐ルルニ足ラサルヤノ口吻ヲ洩ラセリ

四、依テ本使ハ日米間ノ疎隔ハ前述ノ如ク支那問題ニ端ヲ發シ居リ其ノ間米カ支那ニ實利實害ヲ有セサル關係上常ニ主義上ノ問題ニ拘泥シ居ル結果兩國間ノ了解ハ極メテ困難ナリ而シテ日本カ若シ或程度ヲ逸脱センカ米ノ輿論ハ直ニ激發シテ經濟上ノ壓迫ヲ加ヘ來ルヘキ可能性ナシトセス既ニ日米通商條約ハ廢棄セラレ居レリ他面米ニ對スル日本ノ經濟上ノ依存關係ハ現在ニ於テモ可ナリ廣範圍ニシテ經濟斷交ノ結果ハ日本ニ取り輕視スヘカラサルモノアリ萬一石油補給ノ途ニテモ杜絶スルコトアリトセハ日本ハ之ヲ死活問題トシテ南洋ニ目ヲ轉スヘク茲ニ日米戰爭ノ危機皆無ト言ヒ難シ

而シテ<sup>(4)</sup>一度戰爭發生セハ之カ歐洲ニ對シ重大ナル影響ヲ與フヘキコトハ多言ヲ要セスト述ヘタル處「リ」ハ言下

ニ之ヲ肯定シ可成リ「イムプレス」サレタル様子ニ見受ケラレタリ

五、更ニ「リ」ハ獨逸ハ「ベルサイユ」條約以後ニ於テ最モ封鎖ノ苦惱ヲ受ケタル國ナリシモ現在ニ於テハ英國ト其ノ地位ヲ顛倒セリ獨逸ハ對佛作戰ト同様對英作戰ニ於テ極メテ短期間ニ完全ナル戰果ヲ獲得シ得ルモノト確信シ居ル處其ノ結果世界ノ大勢ハ經濟の二見テ歐洲及阿弗利加ハ獨逸、東亞ハ日本、其ノ餘ノ亞細亞ハ蘇聯邦ノ各分野トナリ之ニ米國ヲ加ヘ各區域間ノ主人公タル國々ニ於テ自己消費ノ剩餘ヲ交易スルコトナルヘシト述ヘタリ

六、次ニ「リ」ハ支那問題ニ言及シ事變急速解決ノ目算アリヤト質問セルニ付本使ヨリ迅速解決トハ言ヒ得スル<sup>(マ)</sup>トスルモ兎モ角今ヤ汪兆銘ノ新政府モ新設セラレ日本ハ之ト友好的協定ニ入ルヘク現在交渉ノ最中ト心得居レリ之カ成立ノ曉ハ新政府ニ於テ國ノ内外ニ公正妥當ナル政府ヲ行フコトナルヘク右ハ東亞ノ安全ニ資スル所大ナルヘク米國ニモ好影響ヲ與ヘ彼ヲシテ東亞ノ新事態ニ對スル認識ヲ改メシムルニ至ルヘク之カ日米關係調整ノ契機トモナルヘシト考フト答ヘ置キタリ



七、更ニ蘇聯邦ニ關シ「リ」ハ獨蘇協定以來兩國間國境確定シ互ニ其ノ境界ヲ永久的ニシタル次第ナルカ豫テ自分ノ希望シタルカ如ク最近數ヶ月ニ亘リ日本カ獨逸ト同シク蘇聯邦トノ間ニ諸種ノ案件ヲ解決シテ良好ノ關係ヲ恢復スヘク努力セラレ居ルハ自分ノ欣幸トスルト述ヘ居タリハ、最後ニ本使ヨリ對英作戦終了ノ曉歐洲平和克服ノ爲採ラルヘキ手段ニ付何等貴見ヲ拜聽シ得ヘキヤト述ヘタルニ對シ「リ」ハ目下獨逸ノ神經ハ對英作戦ニ集中セラレ居リ到底平和克服ノ形態乃至ハ手續等ニ關シ考慮ヲ繞ラシ居ル餘地ナシトテ深入ヲ避ケタリ

會見既ニ一時間餘ニ及ヒタルヲ以テ本使ヨリ重ネテ日本ノ關心ヲ有スル諸問題ニ關シテハ既ニ來栖大使及本使ヨリ申述ヘタル所ニ依リ貴大臣ニ於テ充分御了解成リタルコトト存ス右ニ對シ獨逸政府力相當ノ考慮ヲ拂ハレンコトヲ希望スルト述ヘ會談ヲ打切りタリ

九、以上ノ經過ニテ御承知相成ルヘキ通り獨側ニテハ蘭印、佛印等ニ關シ伊首相ノ與ヘタルカ如キ明確ナル態度ヲ一切見受クルヲ得ス確約言質等ヲ取り付クルヲ得サリシハ甚タ遺憾ニシテ獨側ニテハ之等諸問題ニ對シ寧口確定的

前約ヲ與フルヲ避ケントスル様子ニ見受ケラレタリ  
尙先方ノ希望モアリ本電内容外部ニ洩レサル様特ニ御配慮  
相煩度シ

伊、米、蘇、英へ轉電セリ

編 注 本書第III文書付記と思われる。



114

昭和15年7月10日

在独国來栖大使より  
有田外務大臣宛(電報)

佐藤・リッベントロップ會談を契機に日独協力

問題につき独側と協議開始の見通しについて

ベルリン 7月10日前発

本 省 7月10日夜着

第八七一號(館長符號扱、至急)

一、日獨協力ニ關スル帝國政府ノ御方針モ貴電第四二七號ニ依リ大體ノ輪廓拜察セラルルニ付往電第八七〇號佐藤大使「リ」外相會談ヲ契機トシ今後ハ本使ニ於テ時宜ニ依リ話ヲ進ムルコトト致スヘシ

二、然ルニ最近我國ノ内部ニハ熱心ノ餘リ殆ト獨逸ノ一顰一



笑ヲ氣ニ掛ケ居ル向モ有之ニアラスヤト印象セラルル處  
何事ニモ一應負被セ來ル傾向アルニ加ヘ戰勝ニ意氣舉レ  
ル獨逸人ニ對シ右様ノ態度ヲ示スハ外交上頗ル不得策ナ  
ルハ申ス迄モナク斯ル不對等ナル氣構ノ下ニ妥結セル協  
力ノ如キハ其ノ效果甚タ覺束ナカルヘシト存ス

三、以上ノ考慮ニ基キ本使ハ佐藤大使力前記往電ノ會談ヲ終  
ヘラレ辭去スルニ當リ「リ」外相ニ對シ本日ノ會談ニ依  
リ獨逸側ニモ日獨協力ノ希望ヲ有セラルコト判明セル  
ハ本使ノ特ニ欣快トスル所ニシテ實ハ最近時々獨逸ノ對  
日態度冷却ヲ本使ニ傳ヘ來ル者アリ不幸ニシテ萬一事實  
ナリトセハ豫テ日獨接近ヲ希望セル本使トシテモ右新事  
情ノ下ニ最善ノ方策ヲ考慮スルノ外ナキカト私カニ思案  
シ居リタル次第ナリト述ヘタル處「リ」ハ右ハ頗ル意外  
ナリトシ強ク之ヲ否定シタルヲ以テ本使ヨリ然ラハ先刻  
佐藤大使ニ御質問ノ日本ノ希望スル協力ノ方法ノ如キハ  
双方ニ協力ノ意思存スル限り自ラ明カトナルヘク右ニ對  
シテハ今後御希望ニ依リ本使ニ於テ意見交換致スヘシト  
申置キタリ

四、右會談ニ列席セル「スターマー」ト同夜晚餐ノ席上懇談

ノ機會ヲ得タルカ「ス」ハ「リ」外相ハ戰後ノ事態ヲモ  
考ヘ日本トノ協力ヲ考慮シ居リ其ノ範圍ハ外交經濟ノ双  
方ニ及フコトヲ希望シ居ルモノノ如クナルカ四圍ノ情勢  
上右仕上ケハ成ルヘク速カナルヲ欲シ居ル模様ナリト内  
話シ居タリ

英、米、伊、蘇ヘ轉電セリ



115

昭和15年7月11日

在ウイーン山路総領事より  
有田外務大臣宛(電報)

日獨間における利害衝突の可能性等に関する

親日要人の発言につき報告

ウイーン 7月11日後発

本省 7月12日夜着

第一三〇號

最近會談セル當地二三親日要人ノ言中我方トシテ參考トス  
ヘキモノ左ノ通り

(一)日獨間ニ於ケル利害衝突ノ惧アル唯一事ハ獨逸側ニ於テ  
「イラン」又ハ阿富汗ヲ通スル印度洋方面ヘノ進出ヲ蘇  
聯ニ認ムル要アリト思考シ居ルニ對シ日本側ニテ快ク思

ハサル點ナルヘシ但シ場合ニ依リテハ日本側ニテ浦潮等ト交換スル意味ニ於テ右ヲ承認セラレテハ如何

(二)獨逸側トシテハ佛國及和蘭等カ今後獨逸ノ友好國トナルヘキ故其ノ植民地ハ成可ク之ヲ其ノ儘其ノ有トシテ殘シ置キ度キヲ以テ日本カ佛印及蘭印等ヲ占領セラルコトハ餘リ歡迎セス、尤モ是等植民地ニ於ケル日本人ノ經濟的發展ニ對シテハ充分好意的態度ニ出ツヘク尙又南洋ニ於ケル舊獨領委任統治地域ノ領土權ヲ日本ニ讓渡スルハ勿論蘭印ノ東半ヲモ讓渡シ差支ナカルヘシ

(三)日本ハ獨伊ノ對英大攻撃開始等ノ適當時期ニ於テ香港、緬甸、新嘉坡、濠洲等ノ英領ヲ占領セラレテハ如何其ノ場合英國ガ大シタ抵抗ヲ爲シ得サルハ勿論米國政府最近ノ態度緩和等ニモ鑑ミ其ノ軍事的干涉モ起ラサルヘシ(若シ英獨間ノ和平成レル上ハ獨逸側ハ前記(二)ノ如キ態度ニ出ツヘシ)

蘇、獨、伊、土、瑞西、洪へ轉電セリ

瑞西ヨリ英へ轉電アリタシ

~~~~~

116

昭和十五年七月十二日

日独伊提携強化に関する外務・陸軍・海軍間の
事務当局協議録(第一回)

付記 昭和十五年七月十二日、外務省作成

「日獨伊提携強化案」

日獨伊提携強化ニ關スル陸海外協議議事録

(昭、十五、七、十二)

出席者

陸軍省 高山中佐

海軍省 柴 中佐

軍令部 大野大佐

外務省 安東課長

石澤課長

德永事務官

安東「先般佐藤大使ニ訓令シ日獨提携強化ニ付獨逸側ト話ヲセシメラルコトトナツタガ、佐藤大使ハ「リ」外相ト會見シ日獨双方ノ大体ノ意見ヲ交換スルコトヲ得タ其ノ會談ノ際「リ」外相ハ「日本ハ一体何ヲ欲シテキル

カ分ラヌ」ト語ツテキルガ此ノ機會ニ日本側ヨリ曩ノ佐藤大使宛訓令ヨリ一步進ンダ具體的ノ案ヲ提出シテ日獨提携強化ヲ計ルコト必要ト認ムル、今皆様ニ差上ゲタ案ハ全クノ試案ニ過ギナイガ之ヲ一應審議シテ皆様ノ御意見ヲ伺ヒタイ」

(高山中佐ノ要求ニヨリ案ノ説明ヲスルコトナル)

安東「本案ハ獨逸カ何レニセヨ英國ヲ屈服セシメ歐洲及阿弗利加ニ於ケル霸權ヲ掌握シ歐洲阿弗利加ニ新秩序ヲ建設スルコトヲ前提トシテ日獨提携ヲ強化センコトヲ目的トスルモノデアル日本ニトリ重要問題タル對蘇問題ニ付テハ獨逸ト結ンデ蘇ヲ牽制セントシ又最近米蘇ノ提携ノ傾向ナキニシモ非ザルコトガ伺ハレルガ日獨提携ヲ以テ之ヲ牽制セントスルモノデアル

日獨提携ノ限界ニ付テハ案ノ中ニアル如ク現在ノ日本ノ國內情勢特ニ經濟狀態ニ鑑ミ又蘇及ヒ米トノ關係ヨリ見テモ參戰ヲ避ケルヲ賢明トスル(此ノ點ニツキ陸海軍トシテノ意見ヲ求メタル處陸海トモ全然同意ノ旨意思表示シタリ)而シテ參戰ニ至ラサル限度ニ於テ最大限ノ提携ヲ計ラントスルモノデアル」

高山「本案ハ單ニ三省ノ間ノ意見ヲマトメテ之ヲ上ニ提出シ審議シテモラウタメノ案ナルヤ」

安東「本件ハ急速ニ運ブ事ヲ最モ緊急トスルニヨリ三省ニ意見ヲマトマラバ之ヲ上ニ提出シ直チニ國策トシテ之ヲ實行ニ移スコトニシタイ」(陸海共賛成)

(内容ノ説明ニ移ル)

安東「佛印、蘭印及其ノ他ノ南洋ニ付テノ日本ノ獨逸ニ對スル要求デアルガ先般來之ノ問題ニ付テ日本ノ「フリー、ハンド」ヲ認メシメルト云フ案ガ出テキタガ「フリー、ハンド」ト云フモ曖昧ナルニヨリ之ヲ具體的ニ述ベテミルト案ノ如クナルト思フ之ノ點ニ付テハ尙皆様ノ意見ヲ伺ヒタイ

案ノ目的ハ日本ハ之等ノ地域ニ付テ領土の野心ヲ有スルワケニハ非ズ之等ノ地方ニ於テ經濟的自由活動ハ勿論政治的指導權ヲ確立セントスルヲ目的トシ之ヲ獨逸ニ認メサセントスルモノデ又獨逸ニ於テ之ヲ認メ易キ形式ヲ執ラントスルモノデアル」

高山「南洋ニ於ケル日本ノ政治的指導權ヲ獨逸ニ認メサセルト云フガ支那滿洲ニ於ケル日本ノ政治的指導權トノ關

係如何」

安東「支那及滿洲ニ於ケル日本ノ政治指導權ハ當然ノコトトシテ特ニ列記シナイ」

安東「尙之等ノ地方ニ付テハ英、佛及蘭領ノ各々ニ付細目ハ後ニ議スルコトトスル」

安東「支那事變處理ノ爲ニ獨力適當ナル支持ヲ與フノ點ニ付テハ日本ノ態度ハ自主的デナケレバナラヌ例ヘバ最近問題ニナリカケタル蔣政權トノ和平仲介ノ如キモ、日獨提携ノ一般的問題ノ一環トシテ獨逸トシテ支那事變ヲ解決シテ日本ノ立場ヲ強化スルコトハ即チ獨逸ニ有利ナリトスル見解ヨリ之ヲ行ハシメナケレバナラヌ我方ヨリ懇願スルガ如キ態度ハ避クベキデアル又新政權ノ承認蔣側ニ對スル輸出禁止等具體的ニ研究スル必要ガアル」

安東「歐洲及阿弗利加トノ通商其ノ他ノ經濟的考慮ヲ加フノ點ハ獨逸ガ歐洲阿弗利加ニ「ブロック」經濟ヲ形成セル場合閉鎖經濟ヲトルコトアラバ日本トシテ困マルカラ日本ノ東亞南洋經濟圈ト獨逸ノ新經濟圈トノ間ニ通商、其ノ他ノ經濟關係ノ有無相違關係ヲ確保セントスルモノデアアル」

安東「日本ガ獨逸ニ對シ約スルモノノ中最モ問題トナルハ

第二ノ英國ノ屈服ヲ容易ナラシムル爲東亞ニ於テ出來得ル限りノ牽制手段ヲ執ルノ點デアアルガ之ノ點ニ付テハ陸海軍ニ果シテ如何ナル手段ガアルカ研究ヲ願ヒタイ自分トシテハ英國ガ極東ニ於テ有スル政治的權益ヲ壓迫スルトカ或ハ情勢ノ變化ニ應ジ「ビルマ」、印度ニ於ケル獨立運動ヲ祕ニ援助スル等ノコトガ牽制手段トナリハセヌカト考ヘル」

安東「第三ノ點ハ獨逸ガ日本ノ南洋ニ於ケル優越權ヲ認メシメル代償トシテ考ヘラルルモノデ、支那、南洋ニハ獨逸ガ熱望スル品物例ヘバ「ウオルフラム」、「ゴム」、錫等デアリ之等ヲ獨ニ供給シテヤルコトニシ又獨逸ノ支那及南洋ニ於ケル經濟活動(投資企業ヲ含ム)ニ好意的考量ヲ加ヘテヤル之ノ(イ)及(ロ)デ「バランス」ガ良クトレルコトトナルト思フ」

大野「獨逸ハ戰後場合ニヨツテハ蘭印佛印及支那ニ對シテ經濟的活動ヲ活潑ニ行フコトアルベク殊ニ佛國及和蘭ヲ自己ノ屬國ノ如クセル後佛印蘭印ヲ自己ノ領土トセザル迄モ活動的ナル「ナチ」黨員ヲ派遣シテ之ヲ自己ノ政治

の指導ノ下ニ置クベキコトモ考ヘラルルニ付日本ノ對佛印、蘭印工作ハ之ヲ豫防スルタメニ急速ナルヲ要スル日本トシテハ佛印蘭印自身ヲ歐洲ヨリ切離スコトニ努力スルヲ要スル」

安東「(二)ノ對蘇關係ニ付テデアルガ現在ノ所デハ日獨双方トモ蘇聯ト平和ヲ維持スルコトヲ有利トスルニ於テハ同ジデアルガ戰爭終了後ニ於テ獨逸ガ對蘇關係ヲ如何ナル方向ニ向ケルヤ今ノ所斷定ハ出來ナイ併シ乍ラ日獨双方共對蘇關係ニ於テハ同ジ立場ニ立ツカラ今カラ獨逸トノ間ニ何等カノ取極ヲナスコトモ必要デアル併シ目下ノ所獨逸ニトリ對蘇關係ハ機微ナル點ガアリ日本ニ對シ本當ノ腹ヲ割ラヌコトモアリ得ル依ツテ場合ニヨツテハ後段ヲ「ドロツプ」スルモ可デアル」

高山「蘇聯ガ羅馬尼等ニ進出スルコトハ獨逸トシテハ好マザルトコロナルベク之ヲ東部ニ牽制スベク獨逸ヨリ依賴ガアツタ場合ニ果シテ如何ナル手段ガ考ヘラレルカ」

右ノ手段ニ付色々ノ話アリ

次ハ(三)ノ對米關係ニ移ル

高山「之ハ結局日本ハ米國トノ間ニ何等ノ諒解等ヲ行ハズ

トノ意ナリヤ例ヘバ日米間ニ太平洋平和保障協定ノ如キモノガ成立シ米國ニシテ太平洋方面ニ脅威ヲ感ゼザルニ至ラバ米國トシテ歐洲問題ニ干渉スルニ至ルコトアルベク之ハ獨逸ノ好マザル所ナルベシ」

安東「然ラズ、日米間ニ太平洋保障協定ノ如キモノガ出來ルトシテモソレハ米國ハ米大陸ニ立籠ルベキ意味ニ於テ行ハルルモノデ南洋等ニ手出シヲセザル様スルモノデアルベキデアル

最近「ヒットラー」ハ米ハ米大陸ニ止マリ他大陸ニ干渉スベカラズト云ヒ又佐藤大使トノ會談ニ於テ「リ」外相ハ米ヲ牽制スルタメニ日米關係ガ惡化スルコトヲ望ンデキル様ニハ見受ケラレズ獨トシテハ米ガ獨逸ニ對シ攻撃ノ態度ニ出デザル限り現在モ將來モ米ト平和關係ヲ維持センコトヲ希望スル如ク見受ケラル、從テ獨ハ日米關係ガ特ニ惡化スルヲ好ムモノニ非ズト思ハル」

高山「米ガ英側ニ參戰スルコトヲ防グタメニ日本ガ何等カノ措置ヲトルコトヲ要求セザルヤ」

安東「右ノ如キ心配ハ今回ノ戰爭ノ當初ニハアリタルモ現在ノ所殆ドナシ何トナレバ獨ハ米ノ參戰ナキモノト見テ

居ルカラデアル」

石澤「對米問題ニ付日本トシテ考ヘテ置カナケレバナラヌ點ハ今後二、三年立テハ米海軍ハ一大飛躍ヲスルコトニナル之ニ對シ日獨相共ニ牽制スルコト必要デアル」

安東「日獨トモ米國ト唯ミ合ハズ平和のニ牽制スルコト必要デアル」

石澤「現在ノ日米双方ノ主張ヲ見ルニ兩者間ニハ相當ノ開キアリ之ヲマトメルニハ非常ナ努力ヲ要スル、一方歐洲ニ新秩序建設セラレタル曉ニハ米ノ歐洲干涉ガ困難トナリ一方米ハ比島「ハワイ」等ヲ根據地トシテ極東ニ干涉スルコトトナルベク日米平和体制ヲ作ルニシテモ米ハ日本ニ對シテ相當ノ條件ヲ提出スルダロウ從テ獨ヲシテ米ヲ牽制セシメントスレバ日本ハ獨逸ニ對シテ大ナル借方トナラウ」

安東「然シ米ガ日本ニ壓力ヲ加ヘル事ニナレバ日本ノ對蘇牽制力ガ減ズルコトニナルカラ之ハ獨ノ欲セザル所ナルベク日獨ノ對米蘇關係ハ結局同ジモノトナラウ」

高山「獨逸ハ戰前ヨリ相當南米ニ進出セル如ク見ユルガ戰後ニ於テモ獨ハ南米進出ヲ絶對ニ必要トスルモノニ非ズ

ヤ、果シテ然ル時ニ米ガ之ヲ許容セズ、獨米間ニ爭起ルコトナキヤ」

右ノ點ニ付議論アリ

柴「最近來朝シタ「ヘルフリツヒ」ノ言ニ依レバ日本デハ戰後獨逸ハ疲弊スベク考ヘ居ル向キ少ナカラザルモ、之ハ全ク誤ニシテ、戰前及戰爭中擴大セル工業力ハ戰後其ノ販路ヲ求メルタメ經濟の大活動ヲナスベシト云ツタ戰後獨逸ハ南洋支那等ヲ狙ツテ經濟的ニ大イニ進出シテ來ルダロウ」

安東「第四ノ點ニ付テハ既ニ皆様ノ意見ガマトマツテキル様ニ參戰ノ要求アリトモ之ハ應諾出來ナイ」

安東「三ノ伊太利ノ問題デアルガ伊太利ハ之迄明白ニ日本ノ東亞政策ヲ支援スル旨述ベテキルコトデモアリ又戰勝ニ誇ル獨逸ヲ牽制スル意味ニ於テモ日本トシテ伊太利ト友好的關係ヲ保持シ行クハ重要デアルカラ本件ヲ獨逸ニ持出スト同時ニ伊太利トモ交渉スルコトヲ適當ト認メル」

（陸海共贊同）

「伊太利トノ間ニ問題ニナルノハ對蘇關係デアルガ伊太

利ハ蘇聯トノ間ニ平和ヲ維持スルコトニ賛成ナリヤコノ
點ガ問題ニナル」

高山「現戰爭進行中ハ獨伊ノ對蘇態度ハ強弱ノ差コソアレ
平和ヲ維持シタキ點ニ於テハ一致スルダロウ」

尙條約ノ形式ニ付議論アリ、正式ノ條約トスルニハ時間ヲ
要ス、先方カ條約ヲ希望スレバ兎モ角然ラザル限り政府間
ノ交換公文位ニシ政治的ノ了解ヲ遂ケルコトトス(尤モ日本
ノ蘭印、佛印ニ對スル地位ノ承認ハ協定ニシオクコト可ナ
リ)要スルニ急速ニ事ヲ運ブコトニ一致ス

尙夫々各項ノ具體的問題ノ細目ヲ至急慎重ニ研究スルコト
ニ一致シタ

編注 本文書付記と思われる。

(付記)

昭和十五年七月十二日

日獨伊提携強化案

一、提携強化ノ目的

現下ノ國際變局ニ處シ南洋ヲ含ム東亞新秩序建設ニ邁進

スル帝國ト歐洲ニ於テ新秩序建設ニ戰ヒツツアル獨伊ト
ノ間ニ速カニ緊密ナル協力關係ヲ具現シ帝國ノ目的達成
ヲ容易ニスルト共ニ歐洲戰後ノ世界情勢ニ對處シテ帝國
ノ國際的立場ヲ強固ニセントス

二、日獨提携

方針

日獨兩國相互ニ密接ナル聯絡ヲ保持シ且ツ外交上及經濟
上ノ支援ヲ與フルコトニ付具體的ナル政治的ノ了解ヲ遂ク
ルモノトス

要領

(一)獨逸ハ日本ニ對シ左記ヲ約ス

一、佛印蘭印其ノ他南洋地方諸民族ノ自治又ハ獨立ニ
干涉セス右地方カ日本ノ生存圈內ニアルヲ認め右
地方ニ對スル日本ノ政治的指導及協力ヲ容認シ之
ヲ支持ス

一、支那事變處理ノ爲ニ適當ナル支持ヲ與フ

一、歐洲及「アフリカ」トノ通商其ノ他ノ經濟關係ニ
關シ好意的考慮ヲ加フ

(ロ)日本ハ獨逸ニ對シ左記ヲ約ス

一、獨逸ノ歐洲及「アフリカ」ニ於ケル政策ヲ支持シ
獨逸指導下ノ歐洲新秩序ヲ容認ス

一、英國ノ屈服ヲ容易ナラシムル爲東亞ニ於テ出來得
ル限りノ牽制手段ヲ執ル

一、獨逸ノ必要トスル支那及南洋ニ於ケル物資ノ供給
竝ニ支那及南洋ニ於ケル獨逸ノ經濟活動ニ好意的
考量ヲ加フ

(二)日獨兩國ハ「ソ」聯トノ平和維持ニ協力スルコト萬一
其ノ一方カ「ソ」聯ト戰爭狀態ニ入ル場合ニハ他方ハ
「ソ」聯ヲ援助セサルノミナラス右ノ場合及日獨兩國
ノ一方カ「ソ」聯ノ脅威ヲ受クル場合兩國ハ執ルヘキ
措置ニ關シ協議スルコトトス

(三)日獨兩國ハ米國ヲシテ米大陸以外ノ他方面ニ容喙セシ
メサル様協力シ米國カ日獨何レカニ對シ政治的又ハ經
濟的壓迫ヲ爲ス場合日獨共ニ米國ヲ支持スルカ如キ政
策ヲ執ラサルコトトス

(四)獨側ヨリ我方ノ參戰義務應諾ヲ主張スル場合現段階ニ
於テハ之ヲ受諾セス

(五)來栖大使「リ」外相ト交渉スルヲ可トスルモ右カ不可

能ナラハ東京ニテ之ヲ行フ

三、日伊ノ提携

獨トノ交渉ト併行シテ羅馬ニ於テ伊太利トノ交渉ヲ開始
ス其ノ内容ハ大体獨ニ準シ伊太利ノ歐洲及「アフリカ」
ニ於ケル政策ヲ支持シ地中海ヲ中心トスル新秩序ヲ容認
スルト共ニ他ハ獨ニ對スルモノト同シ



117

昭和15年7月12日

在独国來栖大使より
有田外務大臣宛(電報)

日独提携問題等に関するヘルフェリツヒ元訪

日經濟使節團長の内話について

ベルリン 7月12日前発

本省 7月12日夜着

第八八三號(館長符號扱)

小谷ハ三日日獨協會主催講演會ノ爲伯林ニ來レル「ヘルフ
エリツヒ」ト面會更ニ六、七兩日「ヘ」ノ客トシテ漢堡ニ
滞在セルカ「ヘ」ハ蘭印問題其ノ他ニ關シ要領左ノ通り内
話セル趣ナリ長文ニ過クルノ感アルモ時局ニ鑑ミ御參考ト
ナル點鮮カラサルヘシト認メ特ニ電報ス

一、蘭印關係

- (イ) 四月十五日ノ有田聲明ハ英佛米ノ策動ヲ封スル意味ニ於テ獨側ノ「アツプレシエート」セル所ナリ
- (ロ) 獨ハ伊太利ト異リ蘭印ニ付テハ經濟的利害關係多キニ付關心モ大ナリ
- (ハ) 蘭印力政治のニ蘭本國ト遊離シテ全然別個ノ獨立國トナル可能性モ絶無ニハアラサル處獨側ハ右様事態ヲ拱手傍觀スルカ如キコト無カルヘシ
- (ニ) 日本ハ石油問題ノ爲「ボルネオ」ノ領有ヲ希望スルコトヲ考ヘ居レル處蘭印全體ノ領有ハ若干問題ナルヘシ
- 〔ヘ〕ハ蘭印ノ運命ニ關シ獨側ニハ日獨間ニ政治的ノ話合アルヘキヲ希望スル向アルヲ言外ニ仄シ居レリ
- (ホ) 自分ハ蘭印ニ於ケル獨側利益ノ保護ヲ日本ニ要請スル様進言シ政府モ是ヲ容レテ日本側ニ「アツプローチ」セル處日本側力國際的ニ「デリケート」ナル關係アリトテ是ヲ引受ケサリシハ遺憾ナリ(右ニ對シ小谷ハ香港及新嘉坡ニ於ケル保護ノ件ハ承知シ居ル處蘭印ニ對シテハ獨ヨリ正式要請アリシヲ聞知セス「ヘ」ノ言フコト事實ナリトセハ右ハ恐ラク在京獨大使館側ノ努力

足ラサリシ結果ナラスヤト反問セル處「ヘ」ハ或ハ然ラントノ體ニテ領ケル由)

- (ヘ) 在蘭印獨逸人虐待問題ハ獨側ノ默過シ得サル處ニシテ自分ハ監禁其ノモノヲ撤廢セシムルコトヲ目標トシテ種々對抗策ヲ進言シ居レリ

- (ト) 兎モ角蘭印ノ將來ニ付テハ政治的のニモ經濟的のニモ日獨間ニ充分ノ打合ヲ遂クルコト必要ナリ

(2) (イ) 和蘭關係

- (イ) 自分ハ歸獨後政府ノ要請ニ依リ一週間和蘭ニ滞在シテ宣撫工作ノ樞機ニ參與セルカ在蘭出先獨官憲ハ自分ノ援助ヲ多トシ再度出張方依頼越セルニ付「リッベン」又ハ其ノ他ノ外務首腦ト懇談ノ上來ル十四日ヨリ一週間ノ豫定ニテ再ヒ和蘭ニ赴ク豫定ナリ

- (ロ) NSB一派ハ獨側ニ於テ和蘭ノ政治ヲ同黨ニ一任スル様要請セルカ獨側ハ自分ノ助言ニ基キ同黨方國民大多數ノ支持ヲ受クルニ至ラサル限り考慮ノ餘地ナシトシテ之ヲ拒絶シ一切ノ(以下十語不明、照會中)ニ出テ居レリ

- (ハ) 和蘭人ノ中ニハ自分ニ種々愚痴ヲ零ス者アル處自分ハ

中立政策ナルモノハ政策ト呼フニ價セス要スルニ和蘭ハ列強ノ相互牽制ニ依リ餘力ヲ保チ居タルニ過キサル次第ナレハ今後ハ獨ノ傘下ニ歐洲新秩序ニ協力スルヨリ外ナシトノ趣旨ニテ説教シ居レリ

三、植民地問題ニ對スル獨ノ態度

「ヒトラー」ハ「ケニヤ」其ノ他阿弗利加東部ニハ興味ナク(伊太利ニ讓ル爲カト考ヘラル)「ニジリア」ヲ中心トシテ阿弗利加ノ西部方面ニ纏リタル大植民地(「ニジリア」「カメルウン」佛領阿弗利加領「コンゴ」等ナルヘシ)ヲ建設セントスル模様ナルカ同方面ハ「パームオイル」其ノ他植物性油脂原料ニモ富ミ獨逸ヨリノ距離近ク交通便ナルニ付自分モ結構ナコトト考ヘ居レリ

四、⁽³⁾新秩序關係

(イ)今後ノ世界ハ獨ヲ中心トスル歐洲「ブロック」蘇聯、日本ヲ中心トスル東洋並ニ米洲ノ四大圈トナルヘキ處獨トシテ右新事態ニ如何様ニ對處スヘキヤノ根本方針ハ未タ決定シ居ラス

(ロ)目下獨經濟界ニハ二様ノ論アリ一ハ「シヤハト」ヲ中心トシ獨ハ戰後米國ヨリ弗資金ヲ借りテ新秩序ヲ建設

スヘシト論シ他ノ一派ハ右「シヤ」ノ論ハ從來ノ英米ヲ主トスル自由主義經濟ノ繼續ナルヲ以テ一顧ノ價值無シトシ四大生存圈相互間ノ取引ハ「バーター」制ヲ建前トスヘク決濟ノ爲ニハ特殊ノ國際機關ニ依ルヘシト主張シ居レリ

(ハ)本件ハ尙研究ヲ要スル點多キモ自分ハ大體後者ノ論ニ贊成ナリ唯蘇聯邦ハ一寸別問題ニ付實際ハ日獨米ノ問題トナルヘシ而シテ日モ獨モ金ニ不足セル國ナルカ例ヘハ年數億ノ輸出超過ヲ繼續シ得ル蘭印ノ經濟ヲ如何様ニ「コントロール」スルヤハ本件解決ニ重大ナル關係アリ此ノ點ニモ日獨ノ話合ハ必要ナリ

五、日滿支關係

(イ)自分ハ歸獨後對日滿支ノ經濟的並ニ政治的關係ニ付二通りノ報告書ヲ政府ニ提出セルカ獨ハ日滿支ノ圓「ブロック」ニ對シ統一アル政策ヲ採リ廣汎ナル權限ヲ有スル通商代表ヲ日本ニ派遣スヘシト云フ自分ノ主張ハ概ネ關係省ノ贊同ヲ得タリ

(ロ)尙滿支ニ於テハ獨ハ經濟的ニ日本ニ次ク地位ヲ獲得スルコト可能ナラハ右ニテ満足スヘキモノニシテ假令第

二位タリトモ日滿支側ト協力シテ爲スヘキ仕事ハ頗ル多シトノ趣旨ニテ關係方面ヲ説キ居レリ

(ハ) 政治的二ハ自分ハ今尙日本ハ蔣介石ト話合ヲ遂クルコトカ日支事變解決ノ爲賢明ナリト考フルモノニシテ日本サヘ其ノ氣ニナレハ自分ハ凡ユル方面ヲ動カシ斡旋ノ勞ヲ執リ得ヘシト思考ス

六、⁽⁴⁾日獨提携關係

(イ) 自分ノ日本旅行ハ愉快且有意義ニシテ「リッペン」外相ハ自分ノ口頭報告ヲ熱心ニ聴取セル上自分ノ努力ニ對シ感謝ノ意ヲ表シタルカ更ニ文書報告(上記^五(イ)參照)モ熟讀シ吳レ日獨關係改善ニ關スル提案ニ付更ニ某外務高官ト懇談ヲ重ネル様自分ニ要請越セリ

(ロ) 「リ」外相以外ノ外務系人物ニシテ自分ト最モ良ク意見ノ一致シ居ルハ「スターマー」總領事ナリ

(ハ) 自分ハ直接ノ見聞ヲ基礎トシテ日本國民ノ少ク共七割五分ハ親獨のナリト説明スルト共ニ特ニ日滿側諸氏ノ盡力ニ依リ滿洲里出發前ニ入手セル「滿側ハ五月末頃迄ニ大豆五萬噸ヲ供給スヘシ」トノ書面ヲ證據トシテ日本ハ經濟的二モ獨ト協力ノ用意アリト吹聴シ來リタ

ルカ親獨の氣分ニ付テハ問題無カリシモ大豆ハ其ノ後約束ノ數量カ縮少セラルル一方ナリシ爲相當非難セラレ苦シキ思ヲ爲シタリ

(ニ) 外務省内ニモ日本ヲ良ク理解セサルモノモアリ或ル集會ニ於テ某外務官吏ハ日本ノ從來ノ態度ニ嫌ヲサリシモノカ自分ノ話合ヲ邪魔シテ事毎ニ反駁の誹謗ヲ浴セタルニ付自分ハ激怒シテ之ヲ沈黙セシメタルコトモアリタリ

(ホ)⁽⁵⁾是ヲ要スルニ日本政府從來ノ對獨態度ニ付テハ獨側ニ不滿アリシコトニモアリ獨側ノ壓倒の勝利殆ト確實トナレル今日ニ於テ日獨提携強化ヲ促進スルコトハ心理的二見ルモ爾ク簡單ニ行キ難キ點アルモ他方日本國民ノ大體一貫セル對獨友好感情ハ心アル獨逸人ノ良ク認識セル處ナルト共ニ「ヒットラー」モ戰勝ニ驕テ無理難題ヲ吹掛クルカ如キ人物ニハアラスト確信スルニ付日本政府力眞劍ニ日獨提携強化方ヲ考慮セラルルニ於テハ南洋ヲ含ム東亞ノ諸問題竝ニ對蘇對米關係等總ユル問題ニ付日獨間ニ諒解ヲ遂クルコト可能ナルヘク自分ハ「ヒ」及「リ」ノ依頼アル場合ハ日本訪問ノ際ト

同様ノ意氣込ヲ以テ莫斯科、東京、滿、支等各地ヲ歴
訪シテ斡旋奔走スル用意アリ
蘇ヘ轉電セリ

118

昭和15年7月13日

有田外務大臣より
在独国来栖大使宛(電報)

リッベントロップとの会談内容中ドイツの蘭
印・仏印への関心および対米関係の事項につ
き詳細回示方佐藤大使へ訓令

本省 7月13日後10時発

第四四五號(大至急、館長符號扱)

貴電第八七〇號ニ關シ

佐藤大使へ

一、貴使「リ」外相會談ニハ獨逸ノ戰勝氣分ガ相當露骨ニ反
映シ居ルカ如ク見受ケラルル處「リ」カ蘭印、佛印ニ付
「ノンコンミツタル」ノ態度ヲ持セル際右問題ニ付本來
ハ關心ヲ有セザルモ之ヲ利用シテ日本ヨリ何等求メン
(例ヘバ參戰)トスルノ氣配無カリシヤ又世界ノ大勢ニ付
經濟的二見テ四分野ヲ豫想シ居レルガ右ハ間接ニ各分野

ニ於ケル安定勢力ノ優越性ヲ認メズ南洋ニ就テモ場合ニ
依リテハ佛蘭等ノ東亞ノ植民地ヲ獨ノ傘下ニ收メントス
ル野望ヲ抱キ始メタルガ如キ感ジラ受ケラレザリヤ

二、「リ」ガ對米問題ニ付樂觀的意見ヲ述ベタルニ對シ貴使
ガ日米關係ノ惡化ニ言及セラレ日米戰爭ガ獨ノ對歐工作
ニ惡影響アリト仄カサレタル處右ハ必然的ニ日本ノ南洋
進出ヲ招キ獨ノ野心達成ニ困難ヲ生ズルノ意味合ヲ以テ
獨ノ注意ヲ惹カントセラレシモノナリヤ夫レトモ日米戰
爭ハ日本ノ國力ノ消耗ヲ招キ對ソ迫力ヲ弱ムル結果獨ノ
對歐工作ヲ不利ニスルノ意味合ヲモツテセラレシモノナ
リヤ尙本件會談中日米戰爭ガ惹テ獨米戰爭ニ發展スルコ
トニ付テ迄彼我ノ間ニ言及セラレタルコトアリヤ參考迄
至急御回電アリ度

119

昭和15年7月15日

在独国来栖大使より
有田外務大臣宛(電報)

リッベントロップとの会談内容の詳細につき
佐藤大使より回答報告

ベルリン 7月15日後発
本省 7月16日前着

第九〇一號(館長符號扱)

貴電第四四五號二關シ

佐藤大使ヨリ

一、獨逸カ蘭印等ニ關スル日本側ノ要望ニ對シ確約ヲ與ヘサル反面ニハ之ヲ懸引ニ利用セントスル肚全然ナシトハ限ラサルヘキモ少クトモ獨外相ノ態度ヨリスレハ之ヲ餌トシテ日本ノ參戰ヲ求ムルカ如キ氣配ハ一切見受ケラレヌ寧口現在ニ於テハ獨側ハ日本ノ海軍力ハ別トシ國力ノ點ニ於テ左程重キヲ置キ居ラサルヤニ感ゼラレタリ。又南洋植民地ニ關シ既ニ野望ヲ持チ始メタリト迄ハ申上ケ兼ヌル來栖大使發往電第五二七號當時ニ比シ歐洲大陸ニ於ケル大勝ノ今日獨側ノ心境ニ可ナリノ變化ヲ來シタルハ看過スヘカラスト信セラル

二、對米問題ニ關スル本使ノ所言ハ貴電所載ノ如キ獨ノ南洋ニ對スル野望抑制ノ意味ニ出タルニアラス又日本ノ國力消耗對蘇迫力ノ減退云々ノ意味合ニモ無之往電第八七〇號ニ追電セル九日附拙電ノ通り日米戰爭カ延テ獨米戰爭

ニ發展スル可能性ヲ匂ハセテ外相ノ注意ヲ喚起シタルモノニシテ「獨カ對英作戰ニ專念シ且極力長期抗戰ヲ回避セントシツ、アル際新ニ米ノ對獨參戰ヲ見ルカ如キハ彼ノ最モ苦痛トスル所ナルヲ察シ」少シク脅シ氣味ニテ申述ヘタル次第ニテ彼ノ直感シタル所モ正ニ右ノ弱點ニアリタリト推察セラレタリ、但シ日米戰爭ニ發展スヘシトスル如キ直接法ノ表現ハ之ヲ避ケ拙電所載ノ言廻ハシ方ヲ用ヒタリ

120

昭和15年7月16日

日独伊提携強化に関する外務・陸軍・海軍間の事務当局協議録(第二回)

昭和十五年七月十六日 於外務省

日獨伊提携強化ニ關スル陸海外三省係官

會議議事録(其ノ二)

出席者

外務省 安東課長

石澤課長―(中座)

田尻課長

德永事務官

陸軍省 高山中佐

參謀本部 種村少佐

海軍省 柴 中佐

安東「先日ノ會議ノ際日獨伊提携強化ニ關スル案ヲ差上ケテ置イタガ今日ハ其ノ案ニ付テノ陸海軍ノ意見ヲ承リタイ先ヅ陸軍ヨリ」

高山「案全体ノ考ヘ方トシテハ之デヨク賛成デス一々ノ點ニ付テ述ベルト(一)ノ南洋ヲ含ム東亞新秩序建設ノ句ノ南洋ノ意味デスガ日本ノ腹構ヘトシテハ西ハ印度ノ東部「ビルマ」カラ南ノ方ハ濠洲新西蘭ヲ含ムモノトシテキタイ併シ其ノ中ニハ自ラ第一義ノ南洋ト第二義ノ南洋ガアルベキデ今スグ日本ノ態度トシテ表明スベキ南洋トシテハ第一義ノ濠洲新西蘭「ビルマ」等ヲ含マザル狭イ南洋ヲ意味スベキダガ併シ日本ノ腹構ヘトシテハ廣イ意味ノ南洋ヲ考ヘテ置クベキト思フ」

安東「日本ノ理想トシテハ勿論濠洲新西蘭「ビルマ」等ヲモ包含セシムベキデアル併シ具體的ノ問題ニ對シテ目下

ノ所第一義ノ南洋ヲ採ルベキデアル之ノ點ニ於テ高山中佐ノ意見ニ全然同感デアル」

柴「同感」

高山「次ニ(二)ノ要領ノ點ニ付テデアルガスカル要領ヲ獨逸トノ間ニ定メル前ニ要領ノ根本トナルベキモノ即チモツト原則的ナモノヲ話ス必要ナキヤト考ヘル」

安東「其ノ原則的ナモノト云フノハ獨逸ガ歐洲及阿佛利加ヲ其ノ生活圈トシテ之ニ新秩序ヲ建設シ一方日本ガ南洋ヲ含ム東亞ノ新秩序ヲ建設スル點ニ於テ兩國ハ共通ノ立場ニ在ルヲ以テ兩國ガ互ニ其ノ生活圈ヲ承認尊重シ其ノ中ニ於ケル新秩序建設ニ助力及協力ヲナスベキコトヲ意味スルヤ」

高山「然リ」

安東「高山中佐ノ原則的ナモノニ付テ獨逸トノ間ニ先ヅ話ヲ定メルコトニ異議ナシ」

高山「即チ獨逸ト本件ニ付話ヲスルトキニハ先ヅ第一ニ原則的ナコトヲ話シ之ヲ定メタ上ニ要領細目ニ入ルベシ」

安東「同感」(海軍賛成)

高山「次ニ要領ノ内容ニ入ルガ(一)ノ中ニ、「諸民族ノ自治

又ハ獨立ニ干渉セズ」トノ文句ガアルガ獨逸ニ之ヲ言ハセル必要ナシト思フ」

安東「之等ノ地方ヲ獨逸ガ取ル意向ナキコトヲ示サセルタメノモノナリ」

高山「其レハ明瞭ニ言ハシメル必要ハナイト思フ、佛印蘭印ガ日本ノ生存圏内ニアルコトヲ認メシメ其等ノ地方ノ日本ノ政治的指導ヲ認メシムレバ充分デナイカト思フ」
結局「南洋地方ガ——日本ノ生存圏内ニアルヲ認メ……」トナル

高山「次ニ政治的指導ノ意味デアルガ、之ノ意味ノ最モ強イ場合ハ占領ヲ意味スルガ、今スグニハ占領ハ考ヘニ置イテハキナイ、然シ兎モ角政治的指導ノ點ニ於テ國內ニ於テ腹ヲ合セ一致シテ置ク必要ガアル而シテ成ルベク強キ政治的指導權ヲ獨逸ヲシテ承認セシムルコトニシタイ」

安東「本件強化問題ニ於ケル最モ困難ナル點ノ一ツハ茲ニアルト思フ佐藤大使ヨリノ電報デモ薄々ウカガハレルノデアルガ獨逸デハ蘭印佛印ニ付テハ獨逸自身ガ政治的指導權ヲ握リ日本ニハ經濟的ニ利益ヲ與ヘントスル意向ヲ

有シテキルノデハナイカ、即チ獨逸ハ日本ニ政治的指導權ヲ認メマイトスルノデハナイカト言フコトガウカガワレル」

高山「自分モソシナ氣ガスル、獨逸ニ對シテ出來得ル限り強キ佛印蘭印ノ指導權ヲ認メシメルコトガ必要ダ」

安東「本件強化問題ノ話合ヒニ際シテハスグニ右ノ點ガ問題ニナルト思フガ先日山路總領事ヨリノ電報ヲ見テモ獨逸ハ「蘭印」ノ東ヲ日本ニ提供スル意ガアルト言フテキルガ、之ヲ逆ニ言ヘバ爪哇、「スマトラ」等ハ獨逸ガトルコトヲ意味スルノデアル」

高山「獨逸ガ今後蘭印佛印ニ關シ日本ニ如何ナル態度ヲトルカハ、獨逸ガ戰後蘇聯ニ對シテ如何ナル態度ヲ採ラントスルカニ多ク懸ルト思フ、獨逸ガ戰後アマリ遠カラズ蘇ヲ處分セントスル意向ナク佛印蘭印ハ案外容易ニ日本ニ委スルヤモ知レナイ、併シ先ヅ第一ニ歐洲ノ新秩序建設ニ取りカカルナラバ佛印蘭印問題ハ相當厄介ニナル、而シテ今ノ所日本トシテハ獨逸ガ佛印蘭印ヲモ政治的ニトラントスル意向ノモノトシテ考ヘ之ニ對處シナケレバナラス、ソレニハ相當強イ覺悟ヲ必要トスルノデアル」

安東「同感デアル、獨ガ蘭印等ニ政治的指導性ヲ持タウト
スルコトニハ強ク反對スベキデアル」

石澤「全然同感デアル」

種村「佛印蘭印ノ問題ハ結局海軍力ガ物ヲ言フト思フ海軍
力ヲ持タナイ獨逸ガ如何ニ頑張ツタ所デ日本ノ海軍勢力
圈内デハ日本ニ對抗デキナイ、結局問題ハ日本ノ腹一ツ
デ決スル」

安東「其レハ尤モダガソウナツタ場合ニハ獨逸ハ蘇ヲ利用
シ日本ヲ北ヨリ牽制セシメントスルカモ知レナイ之モ考
ヘ置クベキ點デアル」

種村「如何ナル蘇デモ獨逸ニ利用サレ滿洲ノ北部一部ヲト
ラウトシテウカウカ手出シヲスルコトハシマイ、蘇トシ
テハ近東、印度ヲ狙フダロウ」

高山「(ロ)ノ「英國ノ屈服ヲ容易ナラシムルタメ牽制手段ヲ
トル」ハ前ノ「支那事變處理ノタメ適當ナル支持ヲ與
フ」ト共ニ別ノ項ニシテハ如何？何トナレバ之ハ日獨關
係ノ將來ヲ律スルト云フヨリモ現在ノ問題乃至短カイ期
間ニ終ルベキ事項デアルカラ」

安東「之ハ一ツニハ獨逸ヲシテ南洋ヲ含ム東亞ノ新秩序ヲ

承認セシメ事變處理ニ支持ヲ與ヘシムル代償トシテ考ヘ
タモノデ、別項トシテモ異議アルワケデハナイ」

高山「英國ニ對シテ牽制手段ヲ執ルトアルガ果シテ有效ナ
ル牽制手段アリヤ」

柴「具体的方針トシテハ仲々難シイ」

高山「然ラバ本項ハ文字ヲ換ヘル必要ナキヤ」

田尻「新聞ノ利用ガ考ヘラレル」

高山「日本ノ對英牽制ト獨逸ノ事變處理支持トガ丁度「バ
ランス」トシテ考ヘラレルガ、事變處理ニ付テ考ヘラル
ル新政權ノ承認ニ付テハ波蘭等ノ承認デ「バランス」ガ
トレルガ、支那ノ經濟建設ニ協力セシムル點ニ付テハ對
英牽制ガ「バランス」トシテ考ヘラレルノデハナイカ」

安東「經濟建設協力ニ對スル代償トシテ獨逸ガ欲シイトシ
テキル「ウオルフラム」其他ヲ供給シテヤルコト及企業
ニ或程度參加セシメテヤルコトガ考ヘラレル」

高山「支那ニ於ケル企業ニハナルベク參加セシムルコトヲ
避ケタイト考ヘテキル」

種村「イザトナレバ企業ノ半分近ク迄參加セシメル度量ヲ
示シテモヨイ」

高山「其レハナルベク少クシタイ」

田尻「事變處理ニ付テノ獨逸ノ政治的支持ト言ヘバ之ハ今ノ所和平斡旋ダラウ、經濟問題トシテハ經濟及技術ノ提携デアルガソノ代償トシテ支那南洋ニ獨逸重工業ノ捌ケ口ヲ與ヘテヤル」

高山「獨逸ト共ニ伊太利ノコトヲ考ヘル要アリ」

田尻「代償トシテハ事變以來獨逸ハ沿岸貿易ヲ行ツテ居ルガ、コノ沿岸貿易トカ支那ニ於ケル産業技術ノ援助ヲ認メタラヨイト思フ、日本ハ獨逸ヨリ經濟技術ヲ學ブ必要ガアリハシナイカト思フ」

安東「其レハ必要ダ、亞米利加ノ重工業ハ材料豊富ナ重工業デ言ハバ金持ノ重工業デアリ獨逸ノ重工業ハ貧乏人ノ重工業デアル、日本トシテハ獨逸ノ貧乏人ノ重工業ヲ學ブ必要ガアル」

種村「日本トシテハ滿洲ノ重工業ヲ發展セシムルコトガ非常ニ大切デアル、從テ亞米利加ヨリ入レルコトガ期待デキナイトスレバ獨逸ヨリ之ヲ入レルコトヲ考ヘネバナラヌ、戰後獨逸ノ技術ガ蘇ニ入ル様ナコトニナレバ日本トシテ重大問題デアル戰後獨逸ノ技術ヲ滿洲支那ニ入レル

コトヲ考ヘテ置クベキデアル」

安東「話ハモトニ戻シテ結局對英牽制トシテ何等具體的ノ手段ナシト言フコトニナルカ」

田尻「新聞ヲ利用シテ或程度對英牽制ヲ行ヒ得ル」

安東「國際情勢ノ變化ニ應ジ「ビルマ」、印度ノ獨立運動ヲ密カニ煽動スルコトモ效果アル對英牽制ト考ヘラレル」

種村「支那事變ヲ繞ル對英問題ニ付強硬ナル態度ヲトルコト例ヘバ香港ニ關スル問題、上海天津ノ問題ニ付強硬ナル態度ヲトルコト之ガ對英牽制ニ非常ニ效果アリト考ヘル」

田尻「場合ニヨツテハ香港ノ武裝解除ヲ要求スルノモ一案ダ」

安東「結局第一ニ支那カラ英國ノ政治權益ヲ排除スルコト、第二ニ「ビルマ」印度ノ獨立ヲ煽動スルコトニナル」

高山「之等ハ結局武力發動ニ至ラヌ程度ニ行フ」

安東「海軍トシテハ例ヘバ無國籍艦船ヲ動カス等ノコトハ考ヘラレナイカ」

柴「ソレハ考ヘラレル」

柴「對英牽制ヨリ一步進シテ英國ヲタタク方法ハナイカ」
田尻「蔣介石ガマイツタ時ニハ行ヒ得ルガ今ノ所デハ行ハ
ナイガヨイ」

柴「其レハ事變處理ガ濟ンダラ參戰シテモヨイト云フコト
ニナリハシナイカ」

高山「差當リ現在ノ程度デ進ムガ適當デアル」

柴「コノ對英牽制ノ問題ヲ獨逸側ト話シテキルト新嘉坡ヲ
トツテ吳レト獨逸側ガ云ヒダスカモ知レヌ」

田尻「事變ガ片付ケバ行フト云ヘバヨイ」

種村「新嘉坡ノ攻撃ハ自主的ニ行フンダトスレバヨイ」

高山「結局參戰ノ問題ニ付テハ日本ハ義務ハ負ハナイ、併
シ日本獨自ノ立場ニ於テ對英一戰ヲ行フコトアルベシト
云フ構ヘヲ以テ獨逸ト交渉スルコトトシタラヨイ」

(一 同贊成)

高山「第二項ノ對蘇關係ニ付テハ差當リ平和維持ヲナスコ
ト、結局蘇ヲ日獨共通ノ立場ニ副フ如ク利導スルコト、
場合ニヨツテハ蘇ノ鋒先ヲ「ビルマ」印度ニ向ケルコト
モ考ヘ得ル」

高山「第三項ノ對米關係デアルガ將來ノ問題トシテハ米ニ

對シ日獨ガ南米ニ對シ共同動作ヲ執ルコトガアリウル、
南米ニ對スル經濟施策ニ付日本ガ獨逸ヲ支持スベキコト
ガ問題トナリ得ル日本トシテモ二三年後東亞新秩序成立
ノ後ニハ獨逸ト共ニ米ニ對シ共同動作ヲ執ルコトモ今ノ
中ニ考ヘテオイタ方ガヨクナイカ」

安東「米國ノ問題ニ付テハモツト考ヘル必要ガアル、現在
獨逸ハ米國ニ對シテハ非常ニ樂觀的デアリ又戰後ノ經營
ニ付テモ「シヤハト」ハ米ヨリ金ヲ借リルコトヲ考ヘ他
ノ「ナチス」派ハ「バーター」制ニヨルコトヲ考ヘテキ
ル、結局獨逸ガ米ニ對シ如何ナル態度ヲトルカハ獨逸ガ
英國ヲ倒シタ後ニナツテミナケレバ分ラヌ今ノ所デハ獨
逸ハ「米國ハ歐洲ノ問題ニ口ヲ出スナ」トシテキル日獨
間ノ話合デハ今ノ處案ノ程度以上ハ何トモ云ヘナイト思
フ」

高山「ソレハソウダ、併シ日本ノ腹構ヘトシテハ既ニ述ベ
タ様ナコトヲ考ヘテ置ク必要ガアルコノ意味ニ於テ將來
南米ヘノ經濟進出ニ付テハ日獨協力スルコトヲ考ヘテ置
イテヨイ」

田尻「獨逸ハ米國ノ經濟ヲ金ノ經濟トシテ之ヲ見クビツテ

居リ將來ノ南米ヘノ經濟進出ヲ考ヘテ居ルト思フ、兎モ角獨逸ガ將來米蘇ニ付テ如何ニ考ヘ居ルヤヲ一應打診シ置クコト必要ナリ、獨逸トシテモ米國ガ蘇ノ背後ニ在ルコトハ大イナル脅威デアル」

種村「獨逸ト米國トノ爭ハ近ク實現シハシナイカト思フ獨逸ガ南米ニ進出シ之ヲ米國ガ防衛スルコトニヨリ爭トナル可能性アリ、日本ニトツテモ南米ハ良キ販路ナルニヨリ獨逸ト協力シテ南米進出ヲ計ルベキダト思フ」

安東「結局之等ノコトハ米國ハ米大陸ノミニ止マレトスル政策ニ含マレル、腹構ヘトシテハ高山中佐等ノ言ハルル點ヲ持シテ居ル必要ガアルが目下紙ニ書クモノトシテハ、原案位デヨクナイカ」

高山「第四項ノ參戰義務ノ問題ハ既ニ話シ濟ミノ如ク日本トシテハ義務ハ負ハナイガ自主的ニ對英一戰ヲ行フコトアリウルトノ腹構ヘナルベキコト」

高山「最後ニ伊太利トノ提携ニ付テハ原案ニ贊成」

田尻「伊太利トノ間ニハ別ニ簡單ナモノヲ作ツテドウカ」

安東「伊太利モ大体獨逸ト同様ニシ同時ニシタ方ガヨイ」

高山「獨逸伊太利ニ付テハ、是迄支那ニ於テ有スル經濟的

政治的力ニ於テ差ガアルコトヲ認メネバナラス」

高山「對蘇問題ニ付テハ伊太利ニ對シテハ言ヒ方ヲ少シ變ヘル必要ハナイカ」

安東「之ハ最近ノ大橋忠一氏ノ報告デアルガ伊太利ハ回教徒ヲ利用シテ「イラン」印度方面ヘノ進出ヲ考慮シテ居ルト云フコトデアル、若シ蘇ガ「イラン」ニ出ルコトアラバ伊太利トシテモ對蘇問題ニ相當ノ關心ヲ持ツダロウ、兎モ角程度ノ別コソアレ對蘇問題ニ付テハ獨伊ハ共通ノ立場ニアル、從テ獨伊ニ對シ同様ノ提議ヲナシテモヨイ」

安東「次ニ海軍ノ方ノ意見ヲ承リタイ」

柴「既ニ高山中佐ノ言ハレタ點ニ盡キ其レニ贊成デアル、日獨提携ヲ強化スルニアタリテハ日獨相互ニ其ノ新秩序建設ヲ認メ互ニ協力スルト云フコトヲ骨子トスベキデ日本側ガ物欲シサウナ顔ヲシテハナラス、又提携強化ニ際シテハ對米問題對蘇問題ニツキモツト突進ンデ話ヲスル必要アリハセヌカト考ヘル、日米間ニハ本質的ニ對立スベキモノハナイ、現在ノ日米對立ハ多ク經濟的デアリ又多分ニ感情的デアル、又對蘇關係ニ付テハ日獨ガ之ヲ利

導スルコトが必要デアル、只之等ノ點ヲ條約ノ文面ニ出スコトハ勿論考ヘモノデアル」

高山「米、蘇ノ問題ハ條約ノ表面ニ出サズ祕密條項トスベキダ」

高山「コノ原案ヲ實現スルニ如何ナル手順ガトラルルカ」

安東「日獨双方デ話合ヒ要點ヲ交換公文トスルコトニデモナルダロウ」

安東「是レデ係官ノ間デハ大体意見ガ纏ツタ、實施ノ爲時ヲ失ハナイコトガ肝要ダト思フ」

(一 同賛成)

高山「今迄ノ話合テ陸軍ハ纏メ得ラレルト思フ」

柴「海軍モ同様デアル」

高山「獨逸デ話合ヲスルコトニナレバ、電報デハ意ヲ盡シ得ナイカラコチラノ腹ヲ傳ヘル爲ニ説明ニ行ク必要ガアロウ」

(二 同賛成)

121

昭和15年7月18日

在独国来栖大使より
有田外務大臣宛(電報)

第二次近衛内閣成立に関する独国紙論調報告

ベルリン 7月18日後発

本省 7月19日後着

第九二三號

獨新聞ハ内閣交迭ニ對シ多大ノ注意ヲ拂ヒ居ル處十七日 Voelkscher Beobachter ハ近衛公ハ果斷ニシテ實行力アル政治家ナルヲ以テ同公ヲ首班トスル内閣ハ今後ノ日本政治動向ニ對シ徹底的意義ヲ有スヘシ米内閣ノ妥協政策ニ對シ國民ノ大多數ハ日本ノ權威及大國トシテノ地位ニ副ハストナシ又陸軍ハ同内閣力歐洲ノ事態ヨリ何等明確ナル結論ヲ抽出シ得サリシヲ非難セリ近衛内閣ハ總ユル重大問題ヲ果斷ニ處理スヘシト期待セラル云々ト論シ同日 Frankfurter Zeitung ハ米内閣ノ瓦解ハ歐洲事態ヲ反映シ日本ノ經濟界陸軍及輿論ノ中ニ釀成サレタル根強キ力ノ動キニ原因ス然レ共近衛内閣モ過去ノ諸内閣ト同様幾多ノ困難ニ當面セサルヲ得サルヘシ日本ハ其ノ政治形態ニ關スル精神の闘爭ヲ未タ完結シ居ラス日本ヲ以テ獨伊ノ如キ全體主義國家等ニ爲スハ誤リナリ蓋シ日本ニ於テハ未タ曾テ獨伊ニ於テ見タルカ如キ一大民族運動ナク又日本國民ニハ

或特定ノ政治家ニ全幅ノ信頼ヲ措カサルヘカラストスル感情ナシ政黨及各種ノ勢力カ今猶決定の解決ヲ求メ鬭爭ヲ續ケ居レリ斯ル環境ニアリテ如何ナル首相ト雖一定ノ政策ヲ貫徹スルコトハ日本國民カ妥當ナル政治形態ヲ發見シタル時始メテ政治家ハ自己ノ政策ヲ一貫シテ施行シ得ヘシ云々ト報シタリ

122 昭和15年7月18日 在独国来栖大使より
有田外務大臣宛(電報)

第二次近衛内閣成立に関する独国外務省機関

紙の論調報告

ベルリン 7月18日後発
本省 7月19日後着

第九二五號

新内閣成立ニ關シ當國外務省機關紙(獨逸外交政治通信)ハ要旨左ノ通り論シタリ

獨伊樞軸國カ歐洲ヨリ西方諸國ノ干涉ヲ排除シ得タルニ反シ日本ノ外交擔當者カ東亞ノ強國ニ相應シキ地位ヲ日本ニ與フルコトニ成功セス天津現銀、上海租界、緬甸ノ武器輸

出、淺間丸問題等英帝國トノ個々ノ問題ニ關スル交渉ニ拘泥シ一時ノ妥協ニ到達シタルモ東亞ニ於ケル霸權確立ト言フカ如キ明白ナル外交ニ轉換ヲ遂ケ得サリシコトニ關シ久シキ以前ヨリ外交擔當者ニ對スル國民及軍部ノ不滿増大シ遂ニ今日ノ政變ヲ招來スルニ至レリ從テ今次政變ハ國民ノ大部分ノ要望ニ依ルモノニシテ今後ノ政策ノ方向ハ大命拜受者ノ人格ニ依リ表明セラレ舊キ傳統ト共ニ東亞新秩序ヲ妨害セントスル勢力ニ對抗シ歴史的使命ヲ遂行セントスル日本ノ若キ意思ヲ代表スヘシ云々

123 昭和15年7月23日 在独国来栖大使より
松岡(洋右)外務大臣宛(電報)

松岡外相就任を機に對米關係の立て直しを図るべき旨意見具申

ベルリン 7月23日後発
本省 7月23日夜着

* 第九四六號(館長符號扱)

⁽¹⁾ 松岡外務大臣親展

一、蘭印、佛印問題等當面ノ案件ハ暫ク之ヲ措キ抑々我國ノ

對米關係ハ過去三十年間殆ト惡化ノ一途ヲ辿リテ遂ニ今日ニ至リ且米國カ最近膨大ナル軍備擴張計畫ヲ進メツアルカ如キ態勢ニ直面シ我國トシテ對獨伊關係ノ強化對蘇關係ノ思切ツタル打開ヲ計ルハ蓋シ當然ノ措置ナルヘシト雖一方事變以來我國側ノ採り來レル對米措置ニ關シテハ其ノ邊ノ御造詣特ニ深キ閣下ニ於テ自然種々御所懷ヲ有セラルル儀ト拜察セラルルヲ以テ此ノ際閣下ノ御就任ヲ機會トシ對米關係ニ關シテモ新ナル構想ノ下ニ方策ヲ施サレ少クトモ日米關係ヲシテ一層險惡ナラシムルニ先立チ我國側トシテ盡スヘキヲ盡クシ置カルルハ本使ノ切望ニ堪ヘサル所ナリ

二、⁽²⁾惟フニ歐洲戰局ハ獨逸ノ英本土攻略ヲ以テ或ハ一段落ヲ告クヘシト雖獨英ノ抗爭ハ素ヨリ之ノミヲ以テ完全ニ清算セラルヘクモアラス此ノ間ニ處シテ眞ニ世界平和ノ克服ヲ齎シ得ルモノハ共ニ無瑕ナル大海軍ヲ擁スルト同時ニ一ハ英國ノ姉妹國タル一ハ獨逸ノ準與國ト見ラレツツアル日米兩國ノ合作ニ依ル公平ナル斡旋ニ依ルノ外ナキハ恐ラク米國ニ於テモ具眼ノ士ノ敢テ首肯ヲ惜マサル所ナリト信ス

三、日米兩國ニシテ幸ニ前述ノ重大責務ニ目覺メ其ノ見地ニ立ツテ先ツ一方ハ西半球ニ於ケル米國ノ優越地位ヲ他方ハ東洋、南洋ニ於ケル日本ノ優越的地位ヲ相互ニ理解尊重スルノ合意ヲ固メ適當ノ時期ニ於テ日米相携ヘテ歐洲和平ノ斡旋ニ乗出スノ態勢ヲ整フルニ於テ米國トシテハ嘗テハ英佛ノ對獨開戰ヲ煽リ今日ニ至リ參戰ノ困難ニ惱ミツツアル現下ノ「ジレンマ」ヨリ品位ヲ保持シツツ脱却スルヲ得ヘク又我國トシテハ支那ノ對米依存ヲ清算セシメ事變處理ニ一大巨歩ヲ進メ得ルト共ニ戰後ノ蘭印問題ニ關シ今日ノ如ク徒ニ焦慮スルコトナク東亞ノ盟主ニ相應シキ堂々タル態度ヲ以テ之ニ對處スルヲ得ヘシト思考ス

四、⁽³⁾勿論時恰モ米國大統領選舉戰ニ際シ此ノ種對米工作ノ微妙困難ナルハ申迄モナカルヘシト雖既ニ共和、民主兩黨大統領候補者ノ會見ニ依リ重大ナル外交問題ヲ「エレクシヨン、イツシユ」ノ外ニ置カントスル氣運モ擡頭シ居ルノミナラス最近米國カ大統領祕書官談ノ形式ニ依リ不完全乍ラ歐亞各自ノ「モンロー」主義的主張ヲ容認シ且支那問題ニ關シテモ宋子文ノ救訴ヲ退ケタルヤニ察セ

ラルル等最近ノ諸傾向ニ鑑ミ此ノ際米國人心理ニ通曉セラルル閣下ニ於テ機宜施策セラルルニ於テハ現今ニ於テモ述上對米工作ノ機會絶無ナラサルヘシト信ス

五、蓋シ我國ハ事變以來米國ノ基督教會、海軍及「ウオール」街ノ三大勢力ヲ向フニ廻ハシ居ルト共ニ何分「セオドル、ルーズベルト」「ジョン、ヘイ」ノ如キ巨人見當ラサル米國ノ現狀ニ鑑ミ右様工作ノ成否ハ勿論予斷ヲ許ササルヘシト雖假令不幸ニシテ我國折角ノ苦心力遂ニ徒勞ニ歸シタル場合ニ於テモ其ノ結果我國力採ルニ至ルヘキ外交政策ハ中外ノ識者ヲシテ充分之ヲ理解セシムルヲ得ヘク殊ニ對獨伊提携ニ關シ無言ノ間ニ一抹ノ不安反感ヲ抱キ居ル國內一部ヲモ充分承服セシムルニ至リ茲ニ始メテ我國ノ新外交政策ニ對スル國民ノ一致結束ヲ確固不動ナラシムルヲ得ヘキ次第ナラスヤト思考ス事態緊迫ノ際僭越乍ラ卑見敢テ申進ス

124

昭和15年8月1日

松岡外務大臣
在本邦オット独國大使——會談

松岡外相・オット大使會談要領

付記 昭和十五年七月三十日、作成者不明

「日獨伊提携強化ニ關スル件」

昭和十五年八月二日 歐亞二課

松岡大臣「オット」獨逸大使會談要領

大臣ノ求メニ應シ八月一日獨逸大使來訪午后五時ヨリ六時四十分過キマテ懇談ス要領左ノ如シ

大臣 本大臣ハ先日、日獨乃至貴大使本官ノ間ニハ言葉ヲ要セスト告ケタルカ、拙者ノ心中ハ御承知ノ通りナリ又外日話シタル如ク予ハ所謂親英テモ親獨テモナク謂ハハ親日家デアリ日本ノ運命ヲ如何ナル他國又ハ他國人ニモ委セル如キ事ニハ絕對反對テアル、併シ本大臣カ日獨防共協定ノ發案者乃至發頭人ノ一人ナルコトハ「ヒットラー」總統竝ニ「リ」外相モ御承知ノ筈ニシテ閣下亦之ヲ知ル、其ノ後日獨軍事同盟ノ話アリタル時モ貴大使御承知ノ通りニシテ本大臣ノ獨伊ニ對スル感情竝ニ立場ニ付テハ茲ニ更メテ説明スル要ハナイト考ヘル今ヤ我朝野ヲ通シテ樞軸強化ニ傾ケルコトハ御看取ニ難カラサルヘキモ廟議トシテハ未タ確定トマテハ行カナイ、而シテ本大臣ノ抱イテキル考ヲ行フニ先チ之ニ對シ獨逸ハ一体如何

ナル考ヲ有シ又如何ナル態度ヲ以テ臨ムカ其ノ大体ノ輪廓ヲモ知ラスシテハ近衛總理竝ニ同僚ヲ説得スル譯ニハ行カナイ、換言スレハ自分ノ考ヘテキル點ニ付キ獨逸側ノ態度カ大体明瞭ニナラナケレハ之ヲ行フコトカ出來ナイカラ此ノ點ニ付テ獨逸ノ意見ヲ承ハリ度イ

大使 誠ニ尤モナ次第タト存スル乍然一体日本カドウシヨウトスルノカ其レニ付テ具体的ニ承ハルニ非スンハ伯林ニ於テモ返答シ得ラレヌコトト存ス

大臣 本大臣ハ常ニ含蓄ノアル外交的辭令ヲ用ユルコトハ御承知ノ通り大厭イダ、卒直ニ本大臣ノ考ヘヲ申ス次第ナルカ既ニ政府ヨリ公表セル如ク日本ハ今日日滿支ヲ一環トシ南洋ヲ含ム大東亞ノ新秩序建設ヲナサントスルモノテアリ之ノ圈内ニ在ル總テノ國民、民族ノ解放ト自由ヲ日本ハ志シ各國民各民族ノ共同相互ノ利益ヲ圖リ共ニ榮ヘルコトヲ計ラントスルモノナリ之ヲ逆ニ言ヘハ征服ヤ搾取ニハ反對ナリ予ハ日本カ之ヲ行フコトニモ反對デアル勿論日本ノ一部ニ於テハ之等ノ地域ヲ征服シ又ハ搾取スル事ヲ考ヘテキル者モアラウ、ソレハ彼等歐米人カ教ヘタノテ即チ歐米カブレノ人達デアアル、本大臣ハソレ

ガ日本ニ依リテ行ハレヤウガ歐米ニ依リテ行ハレヤウガ之ニ絶對反對デアアル。若シ我國カ左様ナ事ヲ敢テセントスルナラ飽迄抗爭スル決心ヲ有シテル、予ト同様ノ思想ヲ有スル日本人ハ相當數アル、即チ總テノモノカ共同相互ノ利益ヲ得相互ノ繁榮ヲナスコトヲ欲スルノテアル、日本ハ之等ノ地域ニ歐米人カ入ルコトヲ拒ミ之ノ地域ヨリ歐米人ヲ驅逐スルモノニ非ス、然シ右ニ述ヘタ主義コソ直ニ歐米人ニモ多クノ利益ヲ齎スモノト信スル、現前ノ支那事變ヲ皮相ニ觀レハ如何ハシク思ハレルカモ知レナイガ籍ス(南支)ニ時ヲ以テセハ日本ハ支那ニ就テモ必スコノ理想ヲ實現スルデアラウ。

サテ支那ニ關シテハ日本單獨ニテ之ヲ處理シ得ルト予ハ信スルカラ前ニ獨ニハ問ハナイガ獨逸ハ南洋ニ付右ニ述ヘタル如キ日本ノ理想乃至方針ヲ前提トシテ如何ナル態度ヲ採ラントスルモノナリヤ又獨逸ハ南洋ニ於テ何ヲ求メントスルモノナリヤ次ニ獨逸ハ日蘇ノ關係ニ付テ何ヲ希望シ又何ヲ爲シ得ルカ又日米ノ關係ニ付テハ本大臣ハ常ニ想フソレハ來ルヘキ世界文明ハ太平洋文明ニシテ之ノ太平洋文明ニ於テ恐ラク日米兩國ハ共ニ大ナル役割ヲ

演スルモノト思考シ從ツテ兩國ノ關係ハ人類ノ明日ニ至大ノ影響ヲ及ホスヘキ重大事ナリト信スルトコロ之ノ大キナ見地ヨリシテ一体獨逸ハ何ヲ爲サントシ又日本若クハ米國ニ何ヲ求メントスルカト問ヒタイガコレハ余リニ大キク且遠イ問題ナルカ故ニ暫ク措キ現前ノ日米關係ハ御承知ノ通りナルカ之ニ關シテ獨逸ハ一体米國ニ對シ何ヲ爲サントスルカ又日本ノ爲メニ何ヲ爲シ得ルカ承知シ度イ

大使 御意見御尤モノ次第ナルカ先ツ第一ニ日本ノ考ヘル南洋トハ如何ナル範圍ナリヤ承ハリ度シ

大臣 之ハ全ク本大臣ノ私見タルニ止マルガ目下ノ處「シヤム」迄ヲ南洋ノ範圍ニ入レ居ルモ然シ將來形勢ノ推移如何ニヨツテハ漸次擴大スルコトモアラン

大使 コレハ私見ナレトモ南洋ニ關シテハ獨逸ハ大キナ三ツノ觀點カラ見ナケレハナラヌト思フ即チ獨逸ハ現在英本國ト戰爭ヲシテ居ルカ之ノ戰爭ハ將來英帝國全体トノ戰爭(英帝國崩壞戰)ニ發展スル可能性アリ獨逸トシテハ之ノ見地ヨリ南洋問題ヲ見ナケレバナナイ即チ(一)斯カル戰爭トナリタル場合獨逸ハ南洋ニ對シテ何ヲシナケレ

バナラヌカヲ考ヘナケレバナラヌ(二)又如何ナル物ヲ如何ナル量求メル必要アリヤ(三)畢竟之ノ大戰爭ニ於テ獨逸ガ南洋ニ付日本トノ關係ヲ如何ニスルカ如何ニ在ラシメルカニ懸ツテ來ルモノト思考スル斯卡ル獨ノ對英國戰爭ノ大見地ヨリ見ルトキハ支那事變ノ如キハ單ナル一事件ニ過ギザルニ非ラサルヤ又コノ世界ノ動亂ナリ動向ナリヲ離レテ處理出來ヌト思フガ如何

大臣 最後ノ見解ニ付テハ私見トシテハ本大臣モ同感ニシテ其ノ趣旨ヲ曾ツテハ雜誌ニ寄稿セルコトモアル次第ナルガ現在日本人ノ多數ガ支那事變處理ヲ第一ノ急務ナリト考ヘ居レルコトハ御承知ノ通りナリ日本國ノ外務大臣タル拙者トシテハ日本人ノ輿論ヲ一應ハ尊重セザルヲ得ナイ支那事變ハ世界混亂ノ一環ナレドモ然シ之ガ處理ハ日本ニトリ重要ナル問題ナリ

大使 一体日本ハ支那ヲ如何ニ解決セントスルモノナリヤ大臣 蔣介石ヲ徹底のニヤツツケル考ヘナリ

(大使少々驚キノ色アリ)
大使 其レモ一方法ナルカ之ノ際蔣介石ト話合ヲ爲スヘキ可能性ナキヤ本使ハ蔣介石トノ話合ヲ賢明ナル方策ナリ

ト考フ

大臣 本大臣モ蔣介石トノ話合ヲ全的ニ拒マントスル者ニ非サルモ日本人ノ氣性ヨリスレハ蔣介石ヲヤツツケザルヲ得ス又只今ノ處飽迄彼ヲ屈服セシメサレハ止マナイ考ナリ、無論ソレハ必ズシモ武力ノミニ依ルト云フ譯ニテモアラズ兎モ角支那事變ダケハ日本ノ力ノミニテ之ヲ處理シ得ルト信スルモノナリ

大使 然シ支那事變處理ニ際シテハソ聯ガ相當大キナ問題タルコトニ重點ヲ置カザルヲ得ナイト思フ、獨ソノ關係ヨリセバソ聯ハ最早獨ニトリ差シテ危險ナリトハ思ハレズ

大臣 本大臣モ同様ニ看取ス、恐ラク「ヒットラー」「カンプフューラー」ヲシテ疾風迅雷丁、白、蘭ヲ侵シ「フランダース」ノ電撃戰ヲ決意セシメル即チ少クトモ其重大ナル動機ノ一ハ「スターリン」ノ動キニ關シ朝、夕ヲ計ラレヌ深憂措カサリシカ爲ナルベシ(獨大使點頭)シカモ獨軍巴里入城ノ時「ヒットラー」ハ「スターリン」ニ勝テリ、ソノ瞬間カラ最早獨ハ「ソ」ニ關シテ安心セリト予ハ結論シ居レリ

大使 予モ同感ナリ、日本ニ於テ希望アルニ於テハ獨逸ハ日蘇間ヲ斡旋セントスルモノニシテ本使ハ日蘇話合ヲ爲スコトヲ賢明ナリト思考スルモノナリ本使ノ信スル所ニ依レハ「ヒットラー」ハ蘇聯ト事ヲ構ヘヨウト考ヘ居ラス又事ヲ構ヘシテ充分行キ得ルモノト思考シ居ルモノナリ

米國ノ問題ニ付テハ獨逸ハ米國ハ參戰セスト見居ルモノナリ而シテ此際特ニ留意シテ頂キコトハ將來獨逸ハ米國ト爭フ考ナク寧ロ米國ト諒解ヲ遂ケ度シト考ヘ居リ其ノ可能性ヲ信シ居ルモノナリ要スルニ獨逸ノ西半球ニ對スル主ナル利害關係ハ南中米ニ在リ而シテ南米トノ貿易ヲ行ヒ經濟的ニ發展ヲナス爲メニハ米國ト友好關係ヲ結ハサルヘカラス又合衆國自体トノ貿易其他ノ經濟關係モ増進ノ要アリト考ヘ居レリ若シモ日本ノ對米(南北)關係カ右ト同様ナルニ於テハ利害ハ獨ト一致スル譯ニテ獨ト同様ノ對米態度ニ出デラルベキ筈ナリ然ラバ獨逸ハ却ツテ日本ノ爲ニ日米間ノ接近親善ヲ回復増進スル爲ニ斡旋ノ勞サヘ取り得ヘシト史料ス

大臣 日本モ亦合衆國、南中米、「カナダ」等ニ對シテハ

全ク經濟問題ニシテ特ニ近年南中米ニ對貿易躍進ノ方針ヲ取り居リ又企業ヲモ發展セシメント欲シ居ルモノニシテ此ノ點ニ於テ獨逸ト全ク同シ立場ニ在リ獨逸ト同シ考ヲ抱ケル次第ナリ

然シ乍ラ二、三日來ノ新聞ヲ見レハ米國民ハ參戰熱ヲ昂メ居ルヤノ報道アリ貴大使ハ之ヲ如何見ラルヤ

大使 獨逸ハ亞米利加ニ付テハ相當確實ナル情報ヲ有スルモノナルカ米國民カ參戰熱ヲ昂メ居ルトハ嘘ナリ最近「ルーズベルト」大統領ハ益々窮地ニ陥リ居レリ貴大臣ハ「ヒットラー」總統ノ「ウキーガンド」ニ與ヘタル「インタービュ」ヲ御讀ミニナラレタルコトト存スルモ其ノ「インタービュ」ヲ與ヘタル理由ハ獨逸ノ見ル所ニ依レハ米國民ハ大統領カ米國ヲ戰爭ニ參加セシメントスル政策ニ益々反對シ大統領ノ政策ヨリ離レントシ居ルモノナルカ之ヲ益々強メンカ爲メ「ヒットラー」ハ前述米人記者ニ對シ「インタービュ」ヲ與ヘタルモノナリ要スルニ獨米ノ關係ハ必スシモ惡化セス漸次改善セラル、見込アリ

大臣 尙ホ先日某氏ヲ通シテ獨逸大使ヨリ申入レアリタル

(一)蘇滿西比利經由獨逸ヘノ物資輸送ノ件(二)支那ニ於ケル獨逸人被害ノ早急解決(三)英字新聞ノ反獨の記事取締ノ件ハ本日ノ閣議ノ席上關係大臣等ト十五分以内ニテ何レモ主義上大使ノ御希望ニ應スルノ決定ヲナシタリコレニテ貴大使ハ「バルリン」ニ歸還ノ要ナキコトナレリ、然シ何レノ國モ「レツド、テープ」ハ免カレス實行上遲延スルコトモアルヘク、其點ハ豫メ含ミ置カレタシ但シ(一)ト(二)特ニ(一)ハ自分ガ直接指揮管掌スヘク又(三)ハ已ニ下僚ヨリ關係省ニ打合セノ手續ヲ取リタリ

「オット」大使ハ右三件ニ關スル獨文覺書ヲ爲念持參外務大臣ニ手交スルト同時ニ米大陸ニ在ル軍籍無關係ノ獨人ヲ獨本國ニ歸還セシムル件ニ付在米大陸日本官憲等ハ兎角本立證ヲ澁リ勝チナリトテ之ニ關スル覺書ヲモ手交シ松岡大臣ニ好意措置ヲ希望セリ、松岡大臣ハ之ニ對シ同僚殊ニ遞信大臣等トモ打合セ至急措置シ極力好意ヲ示スヘク出先官憲ニモ發訓スヘシト答ヘタリ

尙訪伊使節團ニ付「オット」大使ハ「自分ハ本使節團ハ日本ガ獨逸ト伊太利ヲ離間セシメントスルタメニ派遣セラレタルモノト固ク信ジ居ルモノニシテ不快ニ思ヒ居ル次第ナ

リ、豫テ獨逸ニ良カラザル佐藤大使ガ伊太利ニ派遣セラレ其ノ歸途獨逸ニ立寄りタリトシテモ獨逸ヨリ決シテ好遇セラレザリシハ當然ノコトナリ」ト述べタルニ依リ松岡大臣ヨリ予モカ、ル「デマ」ヲ耳ニシタルコトアルモ左様ナルコトハ有り得ス、之ヲ耳ニシタル當時モ予ハ余リニ馬鹿氣タルコト唯笑ヒタリト告ゲタリ然ルニ「オット」大使ハ飽迄之ヲ信スル態度ニ見受ケタリ

又「オット」大使ヨリ「本使ガ日本駐在大使トナリタル以後本使ノ得タル感ジハ全ク不愉快ナルモノバカリナリ是迄霞ケ關ハ全ク獨逸ヲ無視シ居ルモノガ獨逸大使館ヨリ提出スル案件ニ付テハ少シモ解決シ呉レズ或モノニ付テハ返答サヘ呉レザル次第ナリ是ノミニテモ本使ハ本國政府ヨリ召還セラルベキ充分ノ理由アルモノニシテ又事務以外一度ト雖本使ニ會フ機會サヘ與ヘラレズ本使ハ英米大使以下ニ取扱ハレ殆ンド堪エ難キ侮辱ヲ蒙レリ。獨逸トシテハ尙予ニ幾分ノ望ヲ繫ギテ召還セズ今日ニ至リシ次第ナリ」ト述べタリ

尙大臣ヨリ大使ニ對シ本日「アンリー」大使ニ對シ佛印ニ付テノ日本ノ要求ヲ話シ置キタルガ、之ハ佛印國境附近作

戰上絕對必要ニシテ急ヲ要スルモノナリ。佛政府ハ或ハ本件ヲ獨逸政府ニ「リフアー」スヘキヤト想像スルトコロ若シモ本件ニ付佛政府ヨリ獨逸政府ニ之ヲ「リフアー」シタル時ハ遲滞ナク日本ノ要求ヲ容ルル様返答アルヤウ、又「リフアー」セストモ佛國政府ニ於テ愚圖ツク様子ナラハ獨逸政府ヨリ進ンテ右ノ趣旨ヲ佛政府ニ申送ラルルヤウ至急獨逸政府ニ電報セラレタシト述ヘタルニ「オット」大使ハ早速電報スベキ旨返答セリ。

（付記）

日獨伊提携強化ニ關スル件

（欄外記入）

昭和一五、七、三〇

一、方針

帝國ト獨逸トハ世界新秩序建設ニ對シ共通の立場ニ在ルコトヲ確認シ相互ニ其ノ生存圈ノ確立及經倫ニ對スル支持及對蘇對米政策ニ關スル協力ニ付キ了解ヲ遂ク

二、要領

（一）帝國ト獨逸間ニ於テ右方針ニ基ク基本的了解ヲ遂ク（別紙第一）

註、右基本的の了解ニ基キ更ニ日獨伊間又ハ日獨、日伊間

ニ所要ノ協定ヲ行フモノトス

(二)現在日獨伊各國カ夫々直面シ居ル支那事變及歐洲戰爭ニ關スル相互支持協力ニ關シ右基本的の了解ト共ニ速カニ了解ヲ遂ク(別紙第二)

(三)右實施ハ左ノ各項ニ依ル

イ、前記(一)及(二)ノ交渉ハ別紙第三日獨伊提携強化ニ對處スル基礎要件ヲ体シ且別紙第四交渉方針要領ニ基キ行フ

ロ、前記(一)ハ伯林及羅馬ニ於テ實施ス

ハ、前記(二)ハ(一)ト共ニ一併伯林及羅馬ニテ提案シ其ノ具體的交渉ヲ東京ニ於テ行フ

(四)以上ノ了解ハ必シモ協定ノ形式ヲ執ルヲ要セサルモ獨伊ノ希望アルニ於テハ協定トスルヲ妨ケス

別紙第一

日獨伊提携強化ノ爲ノ基本トナルヘキ政治的の了解事項

一、日本及獨伊兩國ハ現在其實現ニ努力シツツアル世界ノ新秩序建設ニ關シ共通ノ立場ニ在ルコトヲ確認シ公正ナル

世界平和ヲ助成増進スル爲相互協力ス

二、日本及獨伊兩國ハ夫々新秩序建設ノ爲日本ノ企圖スル南洋ヲ含ム東亞ニ於ケル生存圈竝獨伊ノ企圖スル歐洲及阿弗利加ニ於ケル生存圈ヲ相互ニ尊重シ右地域ニ於ケル新秩序建設ニ對シ相互ニ支持ヲ與フ

三、日本及獨伊兩國ハ相互ニ密接ナル經濟的協力ヲ行フ之カ爲其生存圈內ノ所產ノ優先的相互交易竝ニ技術ノ交換ヲ行フト共ニ夫々自己ノ生存圈內ニ於ケル相手國ノ經濟的活動ニ付好意的の考量ヲ加フ

四、日本及獨伊兩國ハ「ソ」聯トノ平和ヲ維持且「ソ」聯ノ政策ヲ兩者共通ノ立場ニ副ハシムル如ク利導スルコトニ協力スルト共ニ其ノ一方カ蘇聯ト戰爭狀態ニ入ル危險アル場合ニハ執ルヘキ措置ニ關シ協議スルコトトス

五、日本及獨伊兩國ハ米國ヲシテ米大陸以外ノ方面ニ容喙セシメサルト共ニ之ニ對シ兩者ノ政治的の經濟的利益ヲ擁護スル爲相互協力ス又其ノ一方カ米國ト戰爭狀態ニ入ル危險アル場合ニハ兩者ハ執ルヘキ措置ニ關シ協議スルコトトス

日本及獨伊兩國ハ中南米ニ對スル施策ニ關シ緊密ニ協力

ス

備考

第四、第五項ハ祕密了解トスヘキモノトス

別紙第二

日本及獨伊兩國ノ歐洲戰爭及支那事變ニ對スル

相互支持協力ニ關スル了解事項

一、日本及獨伊兩國ハ現在兩者カ夫々直面シ居ル支那事變及歐洲戰爭ノ解決ニ方リ何レモ英國カ其主要ナル敵性國ナルニ鑑ミ此見地ニ於テ左ノ如ク相互ニ支持協力ス

日本ハ

(イ)獨伊ノ希望スル東亞南洋方面所在物資ノ取得ニ關シ爲シ得ル限り便宜ヲ供與ス

(ロ)南洋ヲ含ム東亞ニ於テ英國ニ對スル壓迫ヲ強化スルト共ニ獨伊ノ對英戰爭遂行ヲ容易ニスル爲爲シ得ル限り協力ス

獨伊ハ

(イ)日本ノ希望スル機械類等ノ供給並ニ技術ノ援助ニ關シ爲シ得ル限り協力ス

(ロ)支那事變解決ノ爲協力ス

備考

本了解ハ祕密トス

別紙第三

日獨伊提携強化ニ對處スル基礎要件

一、帝國ノ東亞新秩序建設ノ爲ノ生存圈ニ就テ

(イ)獨伊トノ交渉ニ於テ帝國ノ東亞新秩序建設ノ爲ノ生存圈トシテ考慮スヘキ範圍ハ

日滿支ヲ根幹トシ、舊獨領委任統治諸島、佛領印度及同太平洋島嶼、泰國、英領馬來、英領「ボルネオ」、

蘭領東印度、「ビルマ」、濠洲、新西蘭並ニ印度等トス但シ交渉上我方ガ提示スル南洋地域ハビルマ以東、蘭

印、ニューカレドニア以北トシ濠洲、新西蘭及印度ニ付テハ後記(ホ)我方ノ意向ヲ反映セシムルコトトス

(ロ)太平洋ニ於ケル英佛ノ舊獨領委任統治諸島ハ對米戰略上ノ必要ヨリ努メテ帝國ノ支配下ニ歸スル如ク處理ス

(ハ)蘭領東印度ハ獨立態勢ニアラシムルヲ目途トシ差當リ尠クモ我政治勢力下ニ置ク

右ニ關シ萬一獨逸ノ提案ト相觸ルルコトアル場合ニ於
テモ蘭印所產資源ノ優先的供給、蘭印ニ於ケル獨逸人
ノ既存經濟經營繼續ニ關スル保障其他全般ニ於ケル政
治的折衝ニ依リ蘭印ニ於ケル帝國ノ政治的指導權ヲ認
メシムルコトトス

(二)佛領印度支那ニ關シテモ(ハ)ニ同ジ

(ホ)濠洲及新西蘭ハ其ノ他ノ地域トハ其間幾分ノ逕庭ヲ存
スルモ帝國ノ關心ヲ有スル所ナルコトニ差異ナク、從
テ之カ更ニ東亞以外ノ國ノ領土或ハ管理ニ變更セラル
ルヲ欲セス

(ヘ)印度ニ對シテモ帝國カ關心ヲ有スルコト固ヨリナルカ、
對「ソ」協力關係ト關連シ印度西部ニ於テハ考慮ノ餘
地ヲ存ス

二、日獨伊三國ノ經濟協力ニ就テ

(イ)交易ニ關シ帝國ハ日滿支三國ノ農林水產物等ヲ供給ス
ルノ外支那、佛印、蘭印等ノ特殊鑛產物及ゴム等ノ供
給ニ付協力ヲ與フベク獨伊ハ帝國ノ必要トスル技術ノ
援助及航空機、機械類化學製品類等ノ供給ヲ爲ス

(付 箋)

(ロ)右目的ノ爲夫々經濟協定、貿易協定及支拂協定ヲ締結

ス

三、日獨伊三國ノ對「ソ」及對米協力ニ關スル帝國ノ態度ニ
就テ

世界カ東亞、「ソ聯」、歐洲及米洲ノ四大分野ニ分ルルヲ
豫見セラルル戰後ノ新態勢ニ於テ東亞ノ指導者ヲ以テ任
スル帝國ハ歐洲ノ指導勢力タル獨伊ト密接ニ提携シ

(イ)「ソ」聯ヲ東西兩方面ヨリ牽制シ、且之ヲ日獨伊共通
ノ立場ニ副フ如ク利導シテ其勢力圈ノ進出方向ヲ日獨
伊三國ノ利害關係ニ直接影響少キ方面例ヘハ波斯灣ニ
向フ方面ニ指向セシムル如ク努ムルト共ニ

(ロ)又米國ニ付テハ米洲圈ニ對シ力メテ平和ヲ維持スベキ
モ東亞及歐洲分野ノ政治的、經濟的提携ニ依リ所要ニ
應シ米國ニ對シ壓迫ヲ指向シ得ルノ態勢ヲ構成シ以テ
帝國ノ主張ヲ貫徹スルニ寄與セシムル如ク策ス
且又獨伊ハ現在南米ニ相當ノ移民ト經濟的地歩トヲ有
スルヲ以テ將來帝國ノ米國ニ對スル諸般ノ施策ニ之ヲ
利用ス

四、日獨伊三國ノ對英協力ニ關スル帝國ノ態度ニ就テ

(イ)帝國ハ東亞新秩序建設ノ爲、南洋ヲ含ム東亞ニ於テ英

國ノ政治的權益ヲ排除スルノ企圖ヲ有ス

而シテ右帝國ノ企圖ハ英國ノ地位ヲ薄弱化スルモノニシテ現ニ支那ニ於ケル帝國ノ對英政策カ自ラ歐洲戰場ニ有效ニ影響シ居ルコト事實ノ示ス所ナリ

(ロ)帝國ハ更ニ獨伊ノ對英戰爭ニ一層協力スル爲獨逸ノ希望スル南洋ヲ含ム東亞所在資源ノ取得ニ對シテ協力ヲ惜マス、又東亞ニ於ケル英國權益ノ排除、示威及宣傳ニ依ル協力屬領及殖民地ノ獨立運動支援等獨伊ノ對英戰爭ニ關シ一層ノ協力ヲ爲ス

(ハ)帝國ハ(イ)項ノ企圖達成ノ爲對英武力行使ノ場合之カ發動ノ時機ハ(一)支那事變處理ノ進捗程度(二)戰爭準備進捗ノ程度(三)對米對「ソ」外交体制整備ニ依リ制約セラル獨伊側ヨリ對英軍事的協力ヲ求メ來ル場合帝國ハ原則トシテ之ニ應スルモ其發動ノ時機ニ關シテハ前記制約ヲ考慮シ自主的ニ之ヲ決定スルモノトス

別紙第四

交渉方針要領

一、本提携強化具現ノ爲ニハ獨伊カ全力ヲ擧ケテ英國打倒ニ

邁進シアル今ノ機會ヲ逸スヘカラス獨伊ノ戰勝確定後右折衝ヲ開始スルコトトナラハ其ノ效果ハ極メテ減少セラルルニ至ルヘキノミナラス南洋ニ關シテ相當ノ關心ヲ有スル獨逸ノ態度ニモ亦何等カノ變化ヲ來ス處ナシトセザレハナリ

本件交渉ニ付テハ獨伊各別ニ行フモノトス、但獨伊側ヨリ三國間ノ交渉ヲ希望シ來ル場合ニハ之ヲ考慮ス

二、歐洲戰爭及支那事變ニ對スル相互支持協力關係ノ了解ハ獨伊ニ對スル提携強化ノ提議ノ際基本的了解ト同時ニ提案シ其ノ内容ニ付テノ討議ハ東京ニ於テ之ヲ行フコトトスルモ前記ニ了解ハ一体不可分トス

三、獨伊ヲシテ帝國ノ南洋ヲ含ム東亞ニ於ケル生存圈ヲ尊重セシムヘキ別紙第一(二)ノ交渉ニ於テハ南洋ヲ含ム東亞全般ニ付包括的ニ帝國ノ政治的指導權ヲ認メシムルコトヲ主眼トス但シ獨伊側ヨリ特定地區ニ何等留保の態度ニ出ツル場合ニハ別紙第三日獨伊提携強化ニ對處スル基礎要件ノ(一)ノ(ロ)項以下ヲ体シ右地區ニ付具体的折衝ヲ行ヒ之ヲ容認セシム

四、別紙第三日獨伊提携強化ニ對處スル基礎要件第四項(ハ)ニ

關シ獨伊側ヨリ對英軍事的協力ニ質問シ來タル場合ニ於テハ帝國トシテハ原則トシテ之ニ應スルノ用意アルモ武力發動ニ關シテハ諸種ノ制約アルヲ以テ其ノ發動時期(即參戰時期)ハ帝國カ自主的ニ決定スヘキ旨ヲ以テシ獨伊側ヨリ右軍事的協力ヲ求メ來ル場合ニハ前記趣旨ヲ諒解セシムルト共ニ獨伊側ヲシテ帝國ノ對英武力發動ノ諸制約ヲ解除スルコトニ同調セシムル如クナスモノトス

(欄外記入)

訂正案

(付箋)

相互經濟的活動ニ關シテハ帝國ハ特ニ支那及滿洲ニ於テ獨伊ノ優先的地位ヲ認メ其ノ技術及施設ヲ參加セシム

125

昭和15年8月1日

在独国来栖大使より
松岡外務大臣宛(電報)

日本側より日独提携を打ち出すべきとのヘルフェ
リッヒ元訪日經濟使節団長の内話について

*
第九九六號(極秘、館長符號扱)

往電第八八三號ニ關シ

其ノ後小谷ヲシテ更ニ「ヘルヘリツヒ」ト懇談セシメタル處「へ」ハ日本ノ友人トシテ直言スヘシトテ要領左ノ通り内話セル趣ナリ當國一部ノ對本邦空氣ヲ示ス資料トシテ電報ス

一、日本側ハ東洋ニ於テ日本カ英佛米ヲ牽制セルコトカ獨ノ立場ヲ有利ナラシメタルコトヲ強調セラレ居ル模様ナルカ右ハ事實ナルモ本年四月以後獨カ眞ニ國運ヲ^(暗カ)暗シテ戰ヒ蘭白ヲ席卷シ佛ヲ潰滅セシメ英ニ大打撃ヲ與ヘタルコトカ南洋ヲ含ム東洋ニ於ケル日本ノ立場ヲ有利ナラシメタル程度トハ雲泥ノ相違ナリ又日本側ニ於テハ獨ニ對スル日本ノ貢獻ハ伊太利ノ夫レニ酷似スト論スル向アルモ兩者ノ間ニハ大ナル相違アリ即チ自分カ滯日中繰返し述べタル通り獨伊間ニハ軍事同盟ヲ中心トシテ牢固タル約束アリタルニ反シ日獨間ニハスル約束ナキノミナラス從來動モスレハ日本ハ英佛側ト妥協シテ獨ニ不親切ナル態

ベルリン 8月1日後發
本省 8月2日夜着

度ニ出ツルニアラスヤトノ懸念サヘ起サシメ居タルト更ニ經濟的二言フモ伊太利ハ獨製品ノ對外輸出ニ協力セルハ勿論南米產物資ノ獨逸ヘノ輸入ニ付テモ危險ヲ冒シ總ユル便宜ヲ與ヘ其ノ數量ハ日本ヨリノ西比利亞經由輸入量トハ比較ニナラス程多量ニ上リタリ他方獨逸ニ於テハ今次戰爭ノ當初ヨリ日本側ノ獨ニ對スル態度比較の冷淡ナリトシ物足ラス感シ居タルコトハ事實ナリ

三、從テ此ノ際日本側ヨリ提携ノ手ヲ打タルコト然カルヘク其ノ際ハ客年八月ノ獨蘇不侵略協定カ日本側ニ與ヘタル不愉快ナル衝動日本力過去三箇年來支那竝ニ其ノ背後勢力タル英佛米蘇ノ五箇國ヲ相手トシテ直接間接ノ爭鬭ヲ經續シ其ノ間經驗シタル困難ハ獨逸ノ想像シ得ル以上ニ深刻ナルモノアリタルコト等ハ寧口端的ニ説明セラル方宜シカルヘク之ト共ニ今次歐洲戰ニ於ケル獨ノ行動特ニ英佛ニ打撃ヲ與ヘタルコトハ支那事變ノ解決竝ニ南洋ニ對スル日本ノ要望達成ニ貢獻シツツアルコトハ何ト言ヒテモ動カシ難キヲ以テ此ノ點ハ充分「アプリシエー」トセラルルコト然ルヘシ日本側ニ於テ獨逸ハ付ケ上リテ日本ニ不當ノ對償ヲ要求スルヤモ知レスト危惧セラル

ル向アルヤモ知レサル處自分ノ確信スル所ニ依レハ右貢獻ハ日本側ノ米國牽制ト均シク unintentionalノ貢獻ナレハ獨逸トシテ對償ヲ求ムヘキ筋合ニアラサルト共ニ「ヒットラー」モ之ヲ求ムルカ如キ人物ニアラス從テ獨逸貢獻ニ對スル「アプリシエーション」ノ意思表示ハ一文ノ損ナクシテ而モ話合ノ成功ヲ約スル重大ナル關鍵ト自分ハ考フル次第ナリ云々

126

昭和15年8月7日

在独国来栖大使より
松岡外務大臣宛(電報)

松岡外相・オット大使會談内容に關し特に日本側が重視する事項を独国外務次官へ説明について

ベルリン

8月7日後發

本省 8月8日前着

*第一〇一九號(至急)

貴電第五〇七號(六日午前接到)ニ關シ

六日日本使主催午餐會出席ノ「ワイゼツカ」次官二一日貴大臣「オット」大使會談ニ關シ既ニ報告ニ接シタリヤト質ネ

タルニ然リトテ概要ヲ述ヘタルモ果シテ御趣旨カ充分ニ傳達サレ居ルヤ少シク疑問ナリシニ付七日同次官ヲ往訪詳細話ヲ聞キタル處「オット」ノ報告ハ冒頭貴電(一)前段ノ獨逸ノ考ヘ態度ヲ御尋ネニナリ我方ノ意嚮ヲ明カニサレタル點極ク簡單ニシテ(二)ノ蘇聯邦及米國ノ問題ハ全然ナク(三)ノ(イ)、(ハ)、ハ最モ詳細ニ述ヘ(四)ノ佛印問題ハ御話ノ趣旨ヲ詳シク傳ヘ居レリ依テ最モ重要ト認メタル前記(一)ノ點ハ貴電ノ趣旨ニ依リ篤ト説明シ其ノ他ノ諸點ニ付テモ爲念御趣旨ヲ申述ヘタル處「ワ」次官ハ何處ニ重點カ在ルヤ了解セリ何レ「リッペン」外相ニ充分傳達スヘシト述ヘタルニ付本使ヨリ外相モ最近歸伯セラレタル趣ニ付此ノ關係ニテ同外相力更ニ説明ヲ希望セラルルナラハ何時ニテモ御會ヒスヘシト申シ置キタリ

127 昭和15年8月13日

在独国来栖大使より
松岡外務大臣宛(電報)

日独協力問題に関する政府方針の回示方訓

ベルリン 8月13日後発

本省 8月14日前着

*第一〇四八號(至急、極秘、館長符號披)

十二日「スターマー」來訪懇談ノ際本使ヨリ「リ」外相ノ其ノ後ノ心境ヲ尋ネタルニ「ス」ハ同外相ハ戦後ノコトモ考ヘ日本トノ協力ヲ希望シ居ルコトニ變リナシトテ往電第八七一號末段ノ趣旨ヲ繰返シ去ル一日閣下ヨリ「オットー」大使ヘ御話ノ経緯モ能ク承知シ居リタリ依テ近日中「リ」外相ト一應懇談ヲ試ミルハ勿論何等特別ノ御訓令ニ依リタル次第ニアラサルコトトスヘキモ諸般ノ情勢今日ニ及ヒ外交通念上直ニ先方ハ總テ本使一個ノ私見トノミハ聞キ取ラサルヘク旁々會談中ノ心得トシテ往電第九九八號今後ノ日獨協力問題電稟ニ對シ大体ノ御意嚮ナリトモ至急御電示ヲ得置度シ
伊ヘ轉電セリ

128 昭和15年8月19日

松岡外務大臣より
在伊国天羽大使宛(電報)

南洋問題、対ソ・対米關係および日独關係等 につき在本邦伊国大使と會談について

本省 8月19日後10時0分発

第三八五號(極祕、館長符號扱)

本大臣發獨宛電報第五〇七號ニ關シ

十七日午前本大臣在京伊國大使ノ來訪ヲ求メ會談去ル二日

「オット」大使ニ爲シタルト同様ノ趣旨即(一)南洋問題(二)日

蘇關係(獨「ソ」關係ト伊「ソ」關係ニ相違アルコトハ承

知ナル旨附言ス)(三)日米關係(伊國系ノ米國市民モ相當多ク

從テ伊太利ハ米國ニ對シ日本ヨリ以上ノ便宜ヲ有セラルル

コトト信スト附言ス)ニ付質問ヲ發シ伊側ノ意見ヲ承知シ

度キ旨ヲ述ヘ伊太利ハ日獨間ニ付テモ斡旋セラルル最良ノ

地位ニ在リ今後トモ伊太利ニ「デイペンド」スルコト多カ

ルヘシトノ趣旨ヲ述ヘタル處大使ハ自分カ日本ニ赴任スル

ニ際シ「チアノ」外相ハ特ニ日本ノ東亞ニ於ケル指導の立

場ヲ認メ且日本ト協力セサルヘカラサル旨ヲ自分ニ話シタ

ルカ御申出ノ趣旨ハ直ニ之ヲ本國政府ニ傳達スヘシト答ヘ

タリ

尙本會談ニ於テハ佛印ニ關スル懸案其他日獨間ノ懸案ニハ

言及セス

米ニ轉電セリ獨「ソ」ニ轉電アリ度



129

昭和15年8月23日

在独国来栖大使より
松岡外務大臣宛(電報)

日独提携にイタリアの斡旋は不要である旨具申

ベルリン 8月23日前発

本省 8月23日夜着

第一* 第一〇九三號(極祕、館長符號扱)

(一)伊宛貴電第三八五號在京伊國大使ニ日獨間ノ斡旋云々ヲ

申聞ケラレタルハ伊國操縦上特別ノ御深慮ニ出テタル次

第カト思考スルモ抑々對支對蘭・佛印問題ニ關スル獨伊

ノ地位カ實利實力ノ双方ヨリ見テ雲泥ノ相違アルハ言フ

迄モナク(伊發往電第八三三號)戰局今後ノ動向及戰後ニ

於テ獨伊ノ關係カ事實上果シテ對等タリ得ルヤモ頗ル疑

ハシク現ニ伊國ノ參戰ニ關シテモ當國軍部方面等ニ於テ

(一語不明)冷笑的薩口ヲ耳ニスルカ如キ情勢ナルコトハ

此ノ種ノ工作ノ上ニ於テモ充分御賢察ノ次第ナルヘシト

思考ス

(二)日獨關係ニ付本使ノ常ニ最モ苦心シツツアル所ハ兎角思

ヒ上リ易キ獨逸人ノ國民性及ヒ從來ノ所謂對英米依存ヲ

對獨伊依存ニ置キ換ヘタルノミニテハ將來支那問題ノ處

理モ困難ナルヘキヲ考慮シ(戰前軍事經濟ノ双方ニ亘ル獨逸ノ對支活動ハ御承知ノ通り)我カ國一部民論ノ傾向等ニ拘ラス當方ノ氣構ニ於テ飽迄日獨對等ヲ堅持シ居ル點ニシテ(往電第八七一號)日獨關係ハ目下双方腹ノ探り合ヒヲ爲シ居ル姿ナルモ別段他國ノ斡旋ヲ必要トスル事態トハ思考スルヲ得ス蓋シ一方獨逸ハ目下頻リニ戰績ヲ擧ケ居ルモ假令英國制壓後ニ於テモ猶米蘇等ヲ控ヘ居ル關係上恐ラク我カ國トノ友好關係ヲ欲スル事情ヲ生スヘク他方我カ國ハ目下頻リニ英佛ノ(數字不明)ツツアルモ前回大戰後華府會議ニ於テ紙メタル苦キ經驗ニモ鑑ミ今日ヨリ適宜外交上ノ手當ヲ爲シ置ク必要ヲ有スル事情アルヘキヲ以テ右双方ノ事情ヲ充分認識シタル上ニテ兩國ノ提携ヲ考慮スヘキ筋合ニシテ一方他方ノ友誼ヲ「ベツク」スルカ如キハ却テ禍根ヲ貽スヘシト信ス

(三)目下日獨間ニ横ハリ居ルハ主トシテ蘭・佛印ノ問題ナル處蘭印ニ關シテハ既ニ本年五月二十二日「オット」大使ヨリ有田大臣ニ申入ノ次第アリタルハ(貴電第二九五號)我國トシテ常ニ把握シ得ヘキ所ニシテ其ノ後戰局ノ目覺シキ發展等ニ依リ獨逸ノ心境ニ變化アリタリトスルモ元

來獨逸ハ蘭本國ヲ占領シ居ルノミニテ現在ハ勿論戰後ニ於テモ容易ニ實力蘭印ニ及ホシ得ヘキ地位ニアラス此ノ點佛印ニ關シテモ大体同様ト思考セラレ現ニ獨逸カ蘭印ニ關シ往電第一〇八六號ノ如キ工夫ヲ凝ラシ又對佛休戰條約ニ於テ佛國植民地防衛ノ爲佛海軍力ノ一部保留ヲ認メタルカ如キハ此ノ間ノ消息ヲ物語ルモノト觀測セラレ實力ノ見地ヨリ我國トシテ蘭印ニ關シ先ツ念頭ニ置クヘキハ寧口英米(濠洲)等ナルヘキモ彼等トテ又此ノ際蘭・佛印ニ實力ヲ加フルカ如キコトナカルヘキヲ以テ我國トシテハ此ノ際先ツ蘭佛印ニ對シ着々公正ナル完成事實ヲ作り行クヲ主眼トスヘキモノナリト思考ス

(四)貴電合第一七七三號ノ通り蘭印側カ我方ノ要望ヲ容レタルハ一ノ顯著ナル事實ナルモ其ノ後米國ノ軍需物資禁輸体制強化等ノ新事態發生セルニモ鑑ミ此ノ際對蘭印經濟關係ヲ一層強化擴充セラルルト同時ニ成ルヘク速ニ右ニ關スル日蘭ノ合意ヲ發表シ且右合意ノ實施ヲ妨クルカ如キ第三國ノ行爲ハ之ヲ非友誼のト看做ス旨ヲ聲明セラレ以テ他國ノ横槍ヲ抑ヘ時宜ニ依リテハ蘭印物資ノ輸入ニ「コンボイ」ヲ附シ以テ英海軍ノ干涉ヲ排除スル等ノ方

途ヲ講セラレ獨逸ノ希望及態度ニ依リテハ彼ノ必要トス
ル蘭印物資ノ本邦經由供給ヲ可能ナラシムルカ如キ實際
的ノ措置ヲ講セラルルノ要アルヘシト信ス

伊、蘇、米、壽府へ轉電セリ

壽府ヨリ英へ轉電アリタシ

~~~~~

130

昭和15年8月23日

在独国来栖大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

スターマー公使訪日の真意につきリッペン

ロップと会谈予定について

ベルリン 8月23日後発

本省 8月24日後着

第一一〇二號(館長符號扱)

二十日「スターマー」來訪シ今般「リ」外相ノ命ニ依リ約  
三週間滞在ノ豫定ヲ以テ東京へ急行スルコトナリタリ實  
ハ在京獨大使館内部ノ關係モアリ云々ト述ヘ其ノ使命ニ關  
スル印象不明瞭ナルモノアリタルヲ以テ本使ハ寧口之ヲ利  
用シ本件ニ關スル「リ」外相ノ眞意ヲ質スノ名目ノ下ニ豫  
テ電報申上ケ置キタル同外相トノ會談ヲ行フニ決シ近日中

ニ「ザルジユブルグ」ニ滞在中ノ「リ」外相ト會談ノ手配  
ヲ了セリ

尙「ス」ハ今般總領事ヨリ公使ニ昇格シ其ノ資格ニテ赴ク  
モノナル由ニシテ妻同伴二十三日伯林發飛行機ニテ莫斯科  
へ向ヘリ

蘇へ轉電セリ

~~~~~

131

昭和15年8月25日

在独国来栖大使より
松岡外務大臣宛(電報)

スターマー公使訪日の際は責任ある筋との接

触を手配すべき旨具申

ベルリン 8月25日前発

本省 8月25日後着

第一一〇四號(館長符號扱)

「スターマー」渡日ノ件ニ關シ同人ハ御承知ノ通り此ノ春
「ゴータ」大公ノ隨員トシテ渡日シ居タリ外務陸海軍其ノ
他ノ方面ニ知合有ル處折角赴日スルカラニハ責任アル適當
ノ筋ト接觸スル様仕向ケ度ク各方面若手ノ無責任ナル連中
ニ擔キ廻サレ見當違ノ認識ヲ抱イテ歸國スル様ノコトアリ

テハ今後ノ日獨關係上甚タ面白カラスト存シ爲念申上ク
(此ノ點當館陸海軍兩武官モ同感ニテ夫々電報スル筈)

~~~~~

132 昭和15年 8月28日

在独国来栖大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

スターマー公使の訪日および日独協力問題に  
関するリップントロップとの会談報告

ベルリン 8月28日前発

本 省 8月28日夜着

\* 第一一五號(極秘、館長符號扱)

往電第一一〇四號ニ關シ

(1) 二十六日「ザルツブルグ」ニ於テ「リ」外相ト會見ス先ツ  
日獨協力ニ關スル一般問題ヲ論議シタルカ午餐(祕書官其  
ノ他數名陪席シ要談ニ適セス)ノ後引續キ會談ノ予定ナリ  
シヲ以テ、蘭・佛印問題等ハ晝食後ニ讓ルコトトシ置キタ  
ル處食事中「ヒ」總統ヨリ電話ニテ「リ」ヲ招致シ來レル  
爲「リ」ハ急遽「ベルヒテスガーデン」ニ赴クコトトナリ  
食後ノ會談ハ取り止メタルカ今回ノ會談ニテ少クトモ  
(備考)「リ」自身ノ口ヨリ單的且明瞭ニ戰後ニ於テモ日獨ノ協力

ヲ欲スル旨ヲ述ヘ且本使ノ兩國協力ノ私案ニ對シ同外相ヨ  
リ盛ニ意見交換ノ繼續ヲ希望シ從來ノ事態ヨリ多少發展ノ  
傾向ヲ示スニ至リタル次第ナリ會談要領左ノ通り

(一)本使ヨリ先ツ八月一日閣下ト「オットー」大使トノ會談  
以來政府ヨリ何等別段ノ指圖ヲ受ケ居ラサルモ「スター  
マー」日本行等ノコトモアリ意見交換ノ爲來訪シタル次  
第ナリト述ヘタル處「リ」ハ「ス」ノ日本行ハ自分ノ發  
意ニ出ツルモノニシテ實ハ最近「オットー」ヨリ種々電  
報ノ次第アリ旁最近日本ノ國內体制モ重大ナル變化ヲ見  
ツツアル趣ニ鑑ミ一、二「オ」ヘ傳達シタキ所アルト共  
ニ「ス」ヲシテ親シク日本ノ近狀ヲ視察且日本各方面既  
知ノ要人トモ會見セシメ結果歸來後自分ニ報告方申付ケ  
タル次第ナリト述ヘタリ

(二)右ニ對シ本使ハ前回モ申上ケタル通り一部ニハ獨逸ハ英  
國制壓後ハ何等日本トノ緊密關係ヲ必要トセス爲ニ獨逸  
ノ對日態度變化シツツアリ云々ノ取沙汰モ耳ニシ居ル際  
「ス」ヲ我國ニ派遣セラレタルハ差當リ右取沙汰ノ事實  
ニアラサル證左カト考ヘラレ日獨兩國ノ爲本使ノ欣快ト  
スル所ナリト述ヘタルニ對シ「リ」ハ例ニ依リ日獨防共



協定締結ノ經緯ヨリ説キ起シ日獨協力ニ關スル自分ノ方針ノ變ラサル所以ヲ述ヘ防共協定カ防共ヲ表看板トセル政治條約トシテ種々日獨双方ニ與ヘタル利益ヲ述ヘ最近獨カ佛ヲ屈服セシメ更ニ英ヲ攻メ立テ居ル結果トシテ日本ノ東亞ニ於ケル地位擴充ニモ資シ居ル次第ヲ述ヘ萬一逆ニ獨伊側カ英ニ破ルルカ如キコトアラハ日本ハ英米蘇等ノ聯合壓迫ニ依リ折角築キ上ケラレタル現在ノ地歩モ維持困難トナルニアラスヤト思考スト言ヘリ

(三) 依テ本使ハ日獨防共協定以來ノ兩國關係カ兩國ノ執<sup>(英)</sup>レニ多クノ利益ヲ與ヘタルヤ等ノ問題ハ種々論議ノ余地アリト思考スルモ前項貴意末段ノ點ハ前回大戰ニ於テ英佛側ニ參加セル日伊カ戰後ニ受ケタル取扱ニモ鑑ミ本使一個ノ私見トシテハ洵ニ同感ニ堪エサル所ナルカ此ノ際日本内外交政策ノ「テムポ」ヲ理解サルル爲ニハ(一)日本カ目下日支事變ヲ控エ居リ之カ處理ヲ國策ノ第一義トナシ居ルコト(二)我國政治外交上ノ地位カ動モスレハ英米ト相容レサルモノアルニ拘ラス我國ノ經濟關係カ多年ノ歴史ニ依リ英米ト深キ關係ヲ有シ居ルコト(三)我國ト獨逸トノ國內政治態勢カ相違シ居ルコト等ハ常ニ念頭ニ置カルヘキ

ナリト思考スト述ヘ置キタリ

(四)<sup>(3)</sup> 右ニ對シ「リ」ハ日本國內情勢ノ點ハ最近重大ナル變化ヲ見ツツアルヤニ思考セラレ又事變ノ處理ニ關シテモ日獨關係ノ強化ハ結局米國ヲシテ其ノ本來ノ勢力範圍タル米大陸ニ歸ヘラシムルコトトナリ夫レ丈ケ日支事變ノ解決ヲ容易ナラシムヘク又經濟關係ニ於テモ日獨提携ノ上日本カ毅然タル態度ヲ示サルルニ於テハ對米經濟關係ハ却ツテ好轉スヘキニアラスヤト述ヘ獨自身ノ經驗ニ依レハ獨カ協調外交ニノミ依リタル當時ハ對外經濟上種々困難逢着シ居リタルニ比シ對外强硬政策ニ出テタル今日事態ハ却テ好轉セルニアラスヤト述ヘタルニ付本使ハ近代國防上最モ重要ナル重工業、化學工業ノ既ニ完成シ居リタル獨逸ト是等產業確立ノ道程ニ在ル日本トハ其ノ<sup>(二)</sup>ニ於テモ自ラ事情ヲ異ニスルモノアルヘシト説述シ置キタリ

(五) 次ニ戰後ニ於ケル獨ト諸外國トノ關係ニ言及シ「リ」ハ獨ハ目下死活ノ大鬭爭ヲ爲シ居ル次第ニシテ從テ此ノ際各國ノ對獨態度ハ獨トシテ戰後ノ外交ニ於テモ長ク忘ルルコトヲ得サルヘシト述ヘタルニ付本使ハ其ノ點我國モ



同様ニシテ我國カ殆ト全力ヲ傾倒シツツアル事變處理及新秩序確立ニ關シ我國ト協力スルト然ラサル諸國トニ對シテハ當然態度ヲ異ニセサルヲ得サル次第ニシテ此ノ點ヨリ見テ事變ノ當時多數ノ獨逸將校カ支那軍事顧問トシテ種々活動シタルコトアルハ御記憶ノ通りナルカ幸ヒ閣下ノ御就任後右事態ノ終止シタルハ兩國ノ爲ニ慶賀ニ堪ヘサル次第ナリト述ヘ今以テ重慶ノ爲時々蠢動シツツアル是等將軍連ノ行動ニ付婉曲ニ一本決リ置キタリ

(六)<sup>(4)</sup>次テ本使ヨリ根本論ハ其ノ邊トシ此ノ際特ニ端の且卒直ニ承ハリ度キハ戰後ヲモ考ヘタル日獨關係ニ關スル貴見ニシテ本使トシテハ兩國ハ單ニ現在ノミナラス充分將來ヲモ考ヘ且協力ノ目標トシテ單ニ戰時ノミト考ヘス新秩序即チ公正ナル平和ノ確立ニ關シテモ深ク慮ル要アリト考ヘ居リ右見地ヨリ今後兩國ノ協力ノ理由充分存スルヤニ思考シ居ル次第ナリト述ヘタルニ「リ」ハ米及戰後殘サルヘキ英ノ結合ト「リ」ハ敢テ蘇聯邦ト言ハス「リ」日獨トノ關係ニ鑑ミ自分モ右様日獨協力ヲ希望スルモノナリト明言セリ

(七)依テ本使ヨリ既ニ日獨協力ノ意嚮ヲ有セラルル以上右ニ

關シ何等具體的の考案ヲ有セラルル次第ナラハ此ノ際承知シ置キ度シト述ヘタル處「リ」ハ前回ノ成<sup>?</sup>レル經緯ニモ鑑ミ今回ハ日本側ヨリ提案ヲ得タキ次第ニシテ實ハ本日御來訪ニ際シ何等カ日本政府ヨリ具體的の提案等ニテモ之有ヘキヤト私ニ期待シ居リタル次第ナリト答ヘタリ

(八)依テ本使ハ目下日本ハ國內体制建直等重大ナル根本的政治問題ニ專念シ居ルコト御承知ノ通りニシテ從テ此ノ種外交上ノ具體的の問題ノ決定ハ多少手間取ルニアラスヤト思考セラルルヲ以テ此ノ際先ツ大体閣下ノ御内意等ヲモ承ハリタル上ニ私案ヲ作り政府ノ檢討ニ備ヘント欲シ居リタル次第ナリト前置キシ

(五)<sup>(5)</sup>先ツ問題トナルヘキ軍事方面ニ付獨ノ對英作戰モ赫々タル戰果ヲ擧ケ居ル今日獨トシテ何等我國ノ對英軍事の行動ヲ期待セラルルカ如キコトハ萬無之カルヘク殊ニ獨側トシテハ右様軍事行動カ戦局ヲ擴大且長引カシムルト共ニ遂ニハ米ヲ刺戟シ其ノ參戰ヲスラ促スカ如キコトナキヲ保セサルニ鑑ミ獨側トシテ寧口之ヲ避ケラルル次第ナルヘシト述ヘタル處「リ」ハ暫ク沈思ノ上其ノ點ハ全ク考慮ヲ要スル次第ナリト答ヘタリ

(九)續イテ「リ」ヨリ一般日獨協力申合セノ形体内容ニ關スル本使ノ腹案ヲ質セルニ付本使ハ字句條文問題ハ「ガウス」條約局長等ノ専門家ニ俟ツノ外ナキモ大体内容トシテハ日獨兩國ハ夫々南洋ヲ含ム東亞及歐洲大陸ニ於テ各々新秩序ノ確立ニ努力シツツアル所以ヲ理解尊重シ相互ニ之力達成ニ付協力スルコトヲ約シ之カ具体的遂行ノ方法ニ付テハ各案件ニ付最モ有效ナル方法ヲ協議決定スルコトニ申合セタシト考ヘ居ル次第ナリト述ヘ置キタリ

(十)右ニ對シ「リ」ハ自分ニ於テモ二、三考フル所有之二付何レ來週伯林ニ歸リ更メテ意見ヲ交換スルコトトシタシト述ヘタルカ本使ハ時局ニ際シ、蘭・佛印ノ問題等ニ付テモ本使トシテ種々所見有之モ本來右ハ今後ノ日獨關係ニ對スル根本了解確立ヲ見ルニ於テハ別ニ問題ナキ次第ナルヘシト考ヘ居リ旁是等ニ關シテハ伯林ニテ更メテ會談ノ際申上クルコトトスヘシト述ヘ置キタリ

伊、蘇、米、壽府ヘ轉電セリ

壽府ヨリ英ヘ轉電アリタシ

133

昭和15年8月28日

在独国來栖大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

# 欧州戰況の見通しに關するヒトラー側近の心

## 境報告

ベルリン 8月28日前發

本 省 8月28日夜着

第一一八號(極祕、館長符號扱)

往電第一一五號ニ關シ

二十日「ザルツブルグ」ヨリ自動車ニテ「ミュンヘン」ヘノ途中小憩ノ際偶然内閣書記官長格ノ「ランメルス」大臣(前日迄「ベルヒテスガーデン」ノ「ヒ」總統ノ許ニアリ一度「ミュンヘン」ニ歸リタルカ再び總統ニ呼ハレ「ベ」ニ赴ク途中)ニ遭遇シタルカ昵懇ノ間柄ナルニ付種々談話ノ際本使ヨリ最近ノ戰争ノ情勢如何ト問ヒタルニ「ラ」ハ戰爭カ果シテ今年中ニ終了スルヤ否ヤ明白ナル判定ヲ下スハ困難ニシテ而モ米國ハ盛ニ軍備ヲ擴張シツツアリト心配氣ナル面持ニテ答ヘ更ニ言葉ヲ次キテ米ノ軍擴ハ多分日本ニ向ケラレタルモノナルヘシト笑ヒ居タリ最近ニ於ケル當國輿論ノ心境判斷ノ資料トシテ何等御參考迄

伊、蘇、米、壽府へ轉電セリ

壽府ヨリ英へ轉電アリタシ

134 昭和15年 8月28日

在ソ連邦東郷大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

スターマー公使の訪日使命は日独政治協定の  
締結にありとの同公使との会談報告

モスクワ 8月28日後発  
本省 8月29日夜着

第一二〇一號(極秘)

獨逸無任所公使「シユターマー」ハ本使伯林在勤當時「リ  
ツベントロツプ」ノ使者トシテ屢來訪且先般「ゴータ」大  
公ト共ニ歸歐ノ途次當地ニ於テ種々話合ヒタル次第ナルカ  
本月二十四日訪日ノ途次ナリトテ來訪長時間ニ亘リ會談セ  
ル處其ノ使命ハ先ツ以テ日本政府ノ外交方針ヲ突止メ若シ  
日本ニ於テモ希望アルニ於テハ後述政治協定締結ニ資セン  
トスルモノト認メラレタリ

尙本人談話中或點ハ其ノ私見ト斷リタルモ同人ノ地位ニ顧  
ミ大體「リ」ノ意見ヲ表示スルモノト認メラレタル處概要

左ノ通り

一、對英攻撃ハ天候ノ都合上遲延シタルモ今秋中ニハ終了シ  
得ル見込ナリ

一、戰爭ノ延期又ハ擴大ハ獨逸ノ好マサル所ナルカ右ニ關係  
アル蘇米兩國ノ動向ニ付テ觀ルモ先ツ蘇ハ獨ニ對シ衝突  
キ得ヘキ狀態ニアラス又獨モ遠キ將來ハイザ知ラス當分  
蘇聯トノ良好ナル關係ヲ希望スルモノニシテ兩國ノ關係  
ハ懸念ナシ從テ日蘇關係ニ付テモ獨逸トシテハ其ノ良好  
ナランコトヲ希望スルモノナリ

一、次ニ米ニ付其ノ參戰ハ先以テ不可能ト認メラルルモ萬一  
參戰ノ場合ニモ米國軍隊ノ歐洲派遣ハ不可能ニシテ主ト  
シテ海軍ヲ以テ對抗スルノ外ナキ處斯ル場合ニハ獨逸ト  
シテハ其ノ占領地域内ノ全造船所ヲ擧ケテ軍艦ヲ製造シ  
米海軍ニ對抗スルコトモ不可能ニアラス

一、戰後ニ於ケル列強間ノ分野ヲ定ムル必要上ヨリ見ルモ日  
獨間ニ於テモ政治的協定ヲ締結スルノ要アリ蘭印等ニ付  
テハ獨逸ハ政治的關心ヲ有スルモノニアラサルヲ以テ之  
ニ關スル話合ハ容易ナルヘシト思考ス但シ右協定締結ハ  
今次戰爭媾和成立前ナルヲ要スヘシ

獨へ轉電セリ

135

昭和15年 8月31日

在独国来栖大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

スターマー公使は日独協力に関する申合せ案  
を持参して訪日の見通しについて

ベルリン 8月31日後発

本省 8月31日夜着

\*  
第一一四二號(極秘、館長符號扱)

往電第一一五號二關シ

一、「リ」外相ハ來週伯林ニ於テ意見交換續行云々ト申シ居  
タルモ「スターマー」カ出發前「ガウス」條約局長ト相  
談セリト申シ居リタルコト及「リ」カ自分ニモ二、三考  
アリト云ヘル點等ニ鑑ミ「ス」ハ或ハ日獨協力申合ニ關  
スル大体ノ案ヲ具シテ渡日シ時宜ニ依リ之ヲ内示スルモ  
ノカト察セラレ「リ」トシテモ此ノ際ハ先ツ「ス」到着  
後ノ報告ヲ待ツ肚ナルヘシト存セラルルニ付本使トシテ  
ハ(二語不明)ノ情勢ニモ鑑ミ余リ齟齬セス今後ノ「リ」  
ヨリ希望アルニ應シ懇談續行ノコトト致スヘシ

三、二十六日會談ノ際「リ」ハ我國新体制ノ成行ヲ重視スル  
ト共ニ頻リニ白鳥大使大嶋前大使ノ噂ヲ爲シ居タルカ  
「ス」ヲシテ親シク會見セシメタシト云ヘル各方面貴地  
ノ要人トハ主トシテ右兩氏ヲ指セルモノト思ハル

三、昨今獨人中ニハ對英戰爭ハ後四週間位ニテ終了スヘシト  
云フ者アル處空襲及潛水艦戰ニテ果シテ容易ニ英カ手ヲ  
舉クルヤ問題ニテ結局上陸作戰ノ成功ニ俟タサルヲ得サ  
ルヘク此ノ事タル仲々容易ノ業ニアラサルヘク往電第一  
一一八號「ラムネルス」ノ内話ハ必スシモ取越シ苦勞ト  
ノミハ思ハレス將又茲一、二ケ月中ニ獨軍カ英本土ヲ占  
領スルトスルモ結局今次戰爭ニ依ル獨伊ノ霸業ハ歐洲大  
陸及亞佛利加ノ範圍ニ止マリ歐洲復興ノ大業ト對蘇對米  
ノ二大關係ヲ控フル獨トシテハ大筋ニ於テ少クトモ帝國  
トノ協力ヲ有利トスル狀態ニ置カルヘキコト大体間違無  
カルヘシ右御參考迄

伊、蘇、米、壽府へ轉電セリ  
壽府ヨリ英へ轉電アリタシ

昭和15年9月4日 四相會議決定

「日獨伊樞軸強化ニ關スル件」

昭和十五年九月四日總理、陸、海、外四相會議決定  
昭和十五年九月十九日連絡會議決定

日獨伊樞軸強化ニ關スル件

日獨伊三國ノ提携強化ノ氣運最近頗ル濃化シ此際三國間ニ  
取急キ開談ヲ要スル時機ニ達シタリト認メラルルニ付左記  
基本要綱ニ基キ差詰メ獨逸側ト折衝致度

要綱

一、三國間ニ歐羅巴及亞細亞ニ於ケル新秩序建設ニ付凡有ル  
方法ヲ以テ相互ニ協力ヲ與フル爲原則的協定ヲ遂ゲ  
二、右協力ノ最善ノ方法ニ關シ出來得ル限り短期間ニ三國間  
ノ協議ヲ行フ

三、差當リ三國共同聲明トシテ前二項ノ趣旨ヲ内外ニ公表ス

説明書

獨逸政府ハ今般「スターマー」公使ヲ本邦ニ特派スルニ至

レル處右ハ單ニ當方情勢ノ探查ヲ目的トスルヤモ知レサル  
モ同人ハ「リ」外相ニ特別信用アル人物ニモアリ此際我方  
トシテ一段踏込デ日獨伊樞軸強化ニ關シ話ヲ始ムルヲ適  
當トスベク差當リ別紙要綱一、二ノ如キ共同聲明ヲ發スル  
コト内外ノ情勢ニ顧ミ喫緊ナリト認ム右聲明ハ凡有ル方法  
ヲ以テ相互ノ新秩序ノ建設ニ協力スル趣旨ナルヲ以テ必要  
ノ場合皇國トシテ兵力ノ行使ヲモ決意セザルベカラズ尤モ  
英國ノ關スル限り獨逸トシテ直チニ我方ノ武力協力ヲ必要  
トセザルヤモ測ラレズ、然ル場合ニハ主トシテ米國ヲ目標  
トスルコトトナルベク蘇聯ノ問題モ素ヨリ議ニ上ルベキ處  
何レノ途我方トシテ武力行使ノ決意ヲ爲スニ非ズンバ獨逸  
側トノ話合ハ不可能ナルベシ、而シテ右共同聲明ハ畢竟豫  
備的ノモノニシテ引續キ軍事協力ノ交渉ニモ入ルヲ適當ト  
スベク要綱第二項ノ最善ノ方法ニ關シ協議ストハ結局軍事  
協力交渉ヲ意味ス

尙右交渉ハ別紙方針案ニ基キ處置セントスルモノナリ

軍事同盟交渉ニ關スル要綱

一、皇國ト獨伊トハ世界新秩序建設ニ對シ共通の立場ニ在ル

コトヲ確認シ各自ノ生存圈ノ確立及經論ニ對スル支持及對英、對蘇、對米政策ニ關スル協力ニ付キ相互ニ了解ヲ遂ク(別紙第二)

註 右基本的了解ニ基キ更ニ日獨伊間又ハ日獨、日伊

間ニ所要ノ協定ヲ行フモノトス

二、現在日獨伊各國カ夫々直面シ居ル支那事變及歐洲戰爭ニ關スル相互支持協力ニ關シ右基本的了解ト共ニ速カニ了解ヲ遂ク(別紙第二)

三、前記(一)及(二)ノ交渉ハ別紙第三日獨伊提携強化ニ對處スル基礎要件ヲ體シ且別紙第四交渉方針要領ニ基キ行フ

四、以上ノ了解ハ必スシモ協定ノ形式ヲ執ルヲ要セサルモ獨伊ノ希望アルニ於テハ協定トスルヲ妨ケス

### 別紙第一

日獨伊提携強化ノ爲ノ基本トナルヘキ政治的

了解事項

一、日本及獨伊兩國ハ現在其ノ實現ニ努力シツツアル世界ノ新秩序建設ニ關シ共通ノ立場ニ在ルコトヲ認識シ南洋ヲ含ム東亞ニ於ケル日本ノ生存圈竝歐洲及阿弗利加ニ於ケ

ル獨伊ノ生存權ヲ相互ニ尊重シ右地域ニ於ケル新秩序建設ニ付凡有ル方法ヲ以テ協力ス

二、日本及獨伊兩國ハ相互ニ密接ナル經濟的協力ヲ行フ

之カ爲各自ノ生存圈內ノ所在物資ノ優先的相互交易竝ニ技術ノ交換ヲ行フト共ニ夫々各自ノ生存圈內ニ於ケル相手國ノ經濟的活動ニ付好意的考量ヲ加フ

三、日本及獨伊兩國ハ「ソ」聯トノ平和ヲ維持シ且「ソ」聯ノ政策ヲ兩者共通ノ立場ニ副ハシムル如ク利導スルコトニ協力ス(尙獨伊ト交渉ノ際先方ニ希望アルコト判明シタルトキ、右ノ外更ニ日本又ハ獨伊ノ一方カ蘇聯ト戰爭狀態ニ入ル危險アル場合ニハ執ルヘキ措置ニ關シ協議スルコトニ付テモ了解ヲ遂クルコトトス)

四、日本及獨伊兩國ハ米國ヲシテ西半球及米國ノ領地以外ノ方面ニ容喙セシメサルト共ニ之ニ對シ兩者ノ政治的及經濟的利益ヲ擁スル爲相互ニ協力ス又其ノ一方カ米國ト戰爭狀態ニ入ル場合ニハ他ノ一方ハ凡ユル方法ヲ以テ之ヲ援助ス

日本及獨伊兩國ハ中南米ニ對スル施策ニ關シ緊密ニ協力ス

備考

本了解ハ祕密トス

別紙第二

日本及獨伊兩國ノ歐洲戰爭及支那事變ニ對スル

相互支持協力ニ關スル了解事項

一、日本及獨伊兩國ハ現在兩者カ夫々直面シツツアル支那事變及歐洲戰爭ノ解決ニ方リ左ノ如ク相互ニ支持協力ス

日本ハ

(イ)南洋ヲ含ム東亞所在資源及物資ノ取得ニツキ獨伊ノ希望ニ對シ爲シ得ル限り便宜ヲ供與ス

(ロ)南洋ヲ含ム東亞ニ於ケル英國ノ勢力ニ對スル壓迫ヲ強化スルト共ニ獨伊ノ對英戰爭遂行ヲ容易ニスル爲爲シ

得ル限り協力ス

獨伊ハ

(イ)日本ノ希望スル機械類等ノ供給並ニ技術ノ援助ニ關シ

爲シ得ル限り協力ス

(ロ)支那事變解決ノ爲爲シ得ル限りノ政治的及經濟的協力

ヲ爲ス

ヲ爲ス

備考

本了解ハ祕密トス

別紙第三

日獨伊提携強化ニ對處スル基礎要件

一、皇國ノ大東亞新秩序建設ノ爲ノ生存圈ニ就テ

(イ)獨伊トノ交渉ニ於テ皇國ノ大東亞新秩序建設ノ爲ノ生存圈トシテ考慮スヘキ範圍ハ

日滿支ヲ根幹トシ、舊獨領委任統治諸島、佛領印度及

同太平洋島嶼、泰國、英領馬來、英領「ボルネオ」、

蘭領東印度、「ビルマ」、(濠州、新西蘭)並ニ印度等ト

ス但シ交渉上我方カ提示スル南洋地域ハ「ビルマ」以

東蘭印、「ニユーカレドニア」以北トス尙印度ハ之ヲ

一應「ソ」聯ノ生存圈内ニ置クヲ認ムルコトアルヘシ

(ロ)蘭領東印度ハ獨立態勢ニアラシムルヲ目途トスルモ差

當リ我方ノ政治上經濟上ノ優越的地位ヲ認メシムルモ

ノトス

右ニ關シ萬一獨逸ノ提案ト相觸ルルコトアル場合ニ於

テモ蘭印所在物資及資源ノ優先的供給、蘭印ニ於ケル

獨逸人ノ既得經濟經營繼續ニ關スル保障其ノ他全般ニ於ケル政治的折衝ニ依リ蘭印ニ於ケル皇國ノ優越的地位ヲ認メシムルコトス

(ハ)佛領印度支那ニ關シテモ(ロ)二同シ

二、日獨伊三國ノ經濟協力ニ就テ

(イ)交易ニ關シ皇國ハ日滿支三國ノ農林水產物等ヲ供給スルノ外支那、佛印、蘭印等ノ特殊礦產物及「ゴム」等ノ供給ニ付協力ヲ與フヘク獨伊ハ皇國ノ必要トスル技術ノ援助及航空機、機械類化學製品類等ノ供給ヲ爲ス相互經濟的活動ニ關シテハ皇國ハ特ニ支那及滿洲ニ於テ事實上獨伊ノ爲優先的取扱ヲ爲シ其技術及施設ヲ參加セシム

(ロ)右目的ノ爲夫々經濟協定、貿易協定及支拂協定ヲ締結ス

三、日獨伊三國ノ對「ソ」及對米協力ニ關スル皇國ノ態度ニ就テ

世界カ東亞、「ソ」聯、歐洲及米洲ノ四大分野ニ分ルルヲ豫見セラルル戰後ノ新態勢ニ於テ東亞ノ指導者ヲ以テ任スル皇國ハ歐洲ノ指導勢力タル獨伊ト密接ニ提携シ

(イ)「ソ」聯ヲ東西兩方面ヨリ牽制シ、且之ヲ日獨伊共通ノ立場ニ副フ如ク利導シテ其勢力圈ノ進出方面ヲ日獨伊三國ノ利害關係ニ直接影響少キ方面例ヘハ波斯灣(場合ニ依リテハ印度方面ニ對スル「ソ」聯ノ進出ヲ認ムルコトアルヘシ)ニ向フ方面ニ向ハシムル如ク努ムルト共ニ

(ロ)又米國ニ對シテハ力メテ平和的手段ヲ以テスヘキモ東亞及歐洲分野ノ政治的、經濟的提携ニ依リ所要ニ應シ米國ニ對シ壓迫ヲ加ヘ得ルノ態勢ヲ構成シ以テ皇國ノ主張ヲ貫徹スルニ寄與セシメル如ク策ス

右施策ニ際シ努メテ「ソ」聯ヲ利導スルコトヲ考慮ス且又獨伊ハ現在南米ニ相當ノ移民ト經濟的地歩トヲ有スルヲ以テ將來皇國ノ米國ニ對スル諸般ノ施策ニ之ヲ利用ス

四、日獨伊三國ノ排英協力ニ關スル皇國ノ態度ニ就テ

(イ)皇國ハ東亞新秩序建設上、南洋ヲ含ム東亞ニ於テ英國ノ政治的及經濟的權益ヲ排除スル爲狀態ニ應シ諸施策ヲ講ス

(右施策ハ英國ノ地位ヲ薄弱化スルモノニシテ現ニ支



那ニ於ケル皇國ノ對英政策カ自ラ歐洲戰場ニ有效ニ影響シ居ルコト事實ノ示ス所ナリ

(ロ)皇國ハ更ニ獨伊ノ對英戰爭ニ一層協力スル爲南洋ヲ含ム東亞所在資源及物資ノ取得ニ付キ獨伊兩國ノ希望ニ對シテ協力ヲ惜マス、又東亞ニ於ケル英國權益ノ排除、對英示威及宣傳、英國ノ屬領及殖民地ノ獨立運動支援等獨伊ノ對英戰爭ニ關シ一層ノ協力ヲ爲ス

五、對英米武力行使ニ關シ皇國ハ左ノ諸項ニ依リ自主的ニ決定ス

(一)支那事變處理概ネ終了セル場合ニ於テハ内外諸般ノ情勢之ヲ許ス限り好機ヲ補促シ武力ヲ行使ス

(二)支那事變ノ處理未タ終ラザル場合ニ於テハ原則トシテ開戰ニ至ラサル限度ニ於テ施策スルモ内外諸般ノ情勢特ニ有利ニ進展スルカ若クハ我準備ノ成否ニ拘ハラス國際情勢ノ推移最早猶餘ヲ許サスト認メラルル場合武力ヲ行使ス

(三)内外諸般ノ情勢トハ支那事變處理ノ情況ノ外歐洲情勢特ニ對「ソ」國交調整ノ狀況米國ノ我ニ對スル動向及我戰爭準備等ノ諸件ヲ指スモノトス

#### 別紙第四

##### 交渉方針要領

一、獨伊ヲシテ皇國ノ南洋ヲ含ム東亞ニ於ケル生存圈ヲ承認尊重セシムヘキ別紙第一(二)ノ交渉ニ於テハ南洋ヲ含ム東亞全般ニ付包括的ニ皇國ノ優越的地位ヲ認メシムルコトヲ主眼トス但獨伊側ヨリ特定地區ニ何等留保の態度ニ出ツル場合ニハ別紙第三日獨伊提携強化ニ對處スル基礎要件ノ(一)(ロ)項以下ヲ体シ右地區ニ付具體的折衝ヲ行ヒ之ヲ容認セシム

二、獨伊側ヨリ對英米軍事の協力ニ關シ希望シ來タル場合ニ於テハ皇國トシテハ原則トシテ之ニ應スルノ用意アルモ我現狀ニ鑑ミ武力行使即チ參戰ニ關シテハ別紙第三日獨伊提携強化ニ對處スル基礎要件第四項(第五項カ)ノ(一)(二)(三)ノ如ク考慮シ居ル點ヲ説明諒解セシムルト共ニ獨伊側ヲシテ皇國ノ對英米開戰ニ關スル内外諸般ノ情勢改善ニ關シ我ニ協力セシムル如クスルモノトス

137

昭和十五年九月・十日

松岡外務大臣  
スターマー独国公使——会談

松岡外相・スターマー公使非公式会谈要旨

昭和十五年九月十日(午後五時—七時)  
午後五時半—六時半

松岡外務大臣「スターマー」非公式會談要旨

(駐日獨逸大使陪席)

一、獨逸は今次戦争が世界戦争に發展するを欲せず一日も速に之を終結せしむる事を望み而して特に米國の参加せざらん事を希望す

二、獨逸は此際對英本國戦争に關し日本の軍事的援助を求めず

三、獨逸の日本に求むる所は日本が有ゆる方法に依りて米國を牽制し其の參戰を防止するの役割を演ずることに在り獨逸は現在の處米國は參戰せずと思惟するも而も萬これ無きを期せんとするものなり

四、獨逸は近き將來に於て獨米間に衝突起るべしと考ふる能はざるも、然れども日米の衝突<sup>(衝カ)</sup>乃至戦争は何時かは不可避なる可し

五、獨逸は日獨間(勿論伊も含みて)に了解或は協定を成立せしめ何時にても危機の襲來に對して完全に且效果的に備ふること兩國にとり有利なりと信ず、斯くしてのみ若し防止し得とすれば米國が現在の戦争に参加すること又は將來日本と事を構ふことを防止し得べし

六、日獨伊三國側の決意せる毅然たる態度—明快にして誤認せられざる底の態度の堅持と其の事實を米國を始め世界に知悉せしむる事によりてのみ強力且有効に米國を抑制し得、反之軟弱にして微溫的なる態度を取り若くは聲明をなす如きは却つて侮蔑と危險を招くに止まる可し

七、獨逸は日本が能く現下の情勢を把握し以て西半球より來ることある可き危險(或は現に迫りつつあるやも知るべからず)の重大性と現實性とを自覺し以て米國始め他の列國をして揣摩臆測の餘地なからしむる如き日獨伊三國間の協定を締結することに依りて之を豫防する爲迅速に且決定的に行動せんことを望む

八、申す迄もなく獨(及伊)は米を大西洋に於て牽制せんが爲全力を盡す可く又日本に對し直に軍事的裝備例之飛行機、戰車及其の他の兵器竝若し日本に於て希望せらるるなら

ば之等に人員をも附して合理的に融通し得る限り供給するは勿論其の他の方法に依りても極力對日援助を惜まざる可し(松岡大臣は日本にして獨の希望する意味及方法によりて樞軸に参加するに於ては此等の事項は樞軸陸海混合委員會の如きものに委ねらる可きものなりと申述べたり)

六、獨逸は日本の大東亞に於ける政治的指導者たる事を認め之を尊重するは勿論にして此等の地域に於て獨逸の欲するところは經濟的性質のものなり日本の目的達成の爲獨逸は日本と協力するの準備あり、而して獨逸は當然日本が獨人の企業を容認庇護し又獨の現在及將來必要とする資材を此等の地方より獨をして取得せしむる爲日本の最善を盡されんことを期待す

七、先づ日獨伊三國間の約定を成立せしめ然る後直ちに蘇聯に接近するに然かず。日蘇親善に付獨は「正直なる仲間人」たるの用意あり而して兩國接近の途上に越ゆべからざる障害ありとは覺へず從て差したる困難なく解決し得べきかと思料す。英國側の宣傳に反し獨蘇關係は良好にして蘇聯は獨との約束を満足に履行しつつあり

二、樞軸國(日本を含む)は最惡の危險に備ふる爲徹底的用意あるべきは勿論なるも併し一面獨逸は日米間の衝突回避に有ゆる努力を吝まざるのみならず若し人力の能くなし得る所ならば進んで兩國關係の改善にすらも盡力すべし

三、獨逸は對英戰爭終結前に速かに且つ名實共に眞に樞軸に参加せんことを日本に求めんとするに當り米をも含むアングロサクソン王國とまでは言はざるも(註、畢竟するにアングロサクソン王國に對する鬭争に發展せざるを得ざるべしとの意を仄かしたる反語なり)實は全大英帝國に對し一大鬭争を行ひつつありと云ふ遠大なる觀點に立つものなり現在の戰爭は或は程なく終結するならんも右に云ふ一大鬭争は何等かの形に於て今後幾十年尙繼續すべし(松岡大臣も此の事を強調せり)而して右遠大なる目的の達成せらるる迄三國は最も緊密に結盟し俱に共に相倚り相助くべきなり

三、今回の商議に伊太利の参加す可き時期は獨逸外務大臣に於て考慮し日本外務大臣に通報す可し、獨政府は未だ伊太利と話合ひたる事なし、又スターマー若くは獨側の

何人も蘇聯官憲と本問題に付會談せる事なし

西、スターマーの言は直ちにリッペントロップ外務大臣よりの言葉と取られ差支なし

五、日本外務大臣も以上數點に付その所見を開陳するところありたるも本覺書には之を記録せず

~~~~~

138 昭和15年9月19日

日独伊三国同盟条約の締結に関する御前會議の概要

日獨伊三國條約御前會議ニ關スル件

(松本條約局長覺)

一、日獨伊三國條約締結ニ關シ九月十四日四相會議ノ結果大體ノ方針決定ヲ見同夜獨逸大使館ニリッペントロップ外相ヨリ修正案ヲ電報シ來リタルヲ以テ右案ニ依リ至急政府ト大本營トノ連絡會議御前會議ヲ開催スルコトニ決定ヲ見タルヲ以テ松本條約局長ハ九月十六日午前總理官邸ニ稻田總務課長ヲ訪問シ打合セテ遂ゲタル結果前二回ノ御前會議ノ例ニ倣ヒ別紙甲號ノ次第案ヲ作成シ又別紙

乙號ノ如キ要綱案ヲ作成スルコトニ打合セタリ

二、御前會議ハ九月十九日午後三時ヨリ宮中ニ於テ開催セラレ左ノ各官出席セリ

參謀總長宮、軍令部總長宮、近衛總理大臣、松岡外務大臣、河田大藏大臣、星野企畫院總裁、原樞密院議長、澤田參謀次長、近藤軍令部次長

三、會議ハ近衛總理大臣ヨリ別紙丙號ノ通りノ挨拶アリ次デ松岡大臣ヨリ別紙丁號ノ通り説明アリ質疑應答ノ後原案可決ノ後出席者議題ニ署名シ上奏御裁可ヲ經タリ午後六時半頃散會

甲 號

第三回御前會議次第案

一、出 御

二、内閣總理大臣、御許シテ得タルニ依リ本日ノ會議ノ議事進行ニ當ル旨ヲ宣シ會議ノ趣旨ヲ説明シ且外務大臣議題ノ説明ニ當ル旨ヲ述ブ。

三、外務大臣ヨリ議題ヲ説明ス。

四、總理大臣ヨリ質疑ノアル向ハ之ヲ述ベラレ度キ旨ヲ述ブ。

五、右ニ依リ質疑應答。

六、參謀總長ヨリ意見ヲ開陳セラル。

七、軍令部總長ヨリ意見ヲ開陳セラル。

八、樞密院議長ヨリ意見ヲ開陳ス。

九、總理大臣ヨリ原案可決ト認ムル旨ヲ述ブ。

十、總理大臣、會議終了ヲ言上ス。

十一、入 御

十二、議題ニ參列者花押、續テ上奏手續ヲトル。

乙 號

日獨伊三國條約締結ニ關スル件（御前會議議題）

日獨伊樞軸強化ノ爲別紙要綱ニ依リ獨伊兩國政府ト交渉ヲ

遂ゲ日獨伊三國間ニ條約ヲ締結スルコト

別 紙

要 綱

一、日本國ハ歐洲ニ於ケル新秩序建設ニ關シ獨逸國及伊太利

國ノ指導ノ地位ヲ認メ且之ヲ尊重スルコト

二、獨逸國及伊太利國ハ大東亞ニ於ケル新秩序建設ニ關シ日

本國ノ指導ノ地位ヲ認メ且之ヲ尊重スルコト

三、日本國、獨逸國及伊太利國ハ前記ノ趣旨ニ基ク努力ニ付

相互ニ協力スルコト竝ニ右三國ノ中一國ガ現在ノ歐洲戰

争又ハ日支紛争ニ參入シ居ラザル一國ニ依リテ（公然ト

又ハ陰密ニ）攻撃セラレタル場合ニハ有ユル政治的、經

濟的及軍事的方法ニ依リ相互ニ援助スベキコト

四、日本國、獨逸國及伊太利國ハ相互相倚リ現ニ變化シ又變

化シツツアル世界情勢ニ適應スベキ世界新秩序ノ建設ニ

依リテノミ平和ノ公正ニシテ恆久的ナル基礎ヲ造リ得ル

モノナルコトヲ信シ其ノ實現ニ關スル各自ノ努力ヲ整調

結合スルコト

五、日本國、獨逸國及伊太利國ハ前記各項カ日獨伊三國ノ各

ト「ソヴィエト」聯邦トノ間ニ現存スル政治的狀態ニ如

何ナル影響ヲモ及ホササルモノナルコトヲ確認スルコト

丙 號

日獨伊三國條約締結ニ關スル件

（近衛總理大臣御前會議席上ノ挨拶文案）

御許シヲ得タルニ依リマシテ本日ノ會議ノ議事進行ハ本大

臣ニ於テ之ニ當ルコトニ致シマス。

御承知ノ通り支那事變ハ未ダ解決セザルニ當リ近來米國ノ我國ニ對スル態度ハ相當強硬ヲ加ヘテ居リマスガ米國ノ態度ガ硬化スルニ連レマシテ重慶政府其ノ他日本ニ敵意ヲ有スル各國政府ノ態度ニモ影響シ我國ノ國際的地位ハ益々困難トナリ前途誠ニ憂慮ニ堪ヘザル次第デアリマス。此ノ難局ヲ打開致シマス爲ニハ我國ノ國際の立場ヲ強化スルコトが必要デアリマスガ其ノ方法ハ現在ノ環境ニ於テ我方ト利益ノ一致スル國家トノ提携ヲ強化スルコト以外ニハナイト思ヒマス。然ルニ獨伊ハ米國ノ參戰ヲ防止スルコトヲ希望シ我國ハ米國トノ危機回避ヲ希望スル點ニ於テ利害ノ一致ヲ見テ居ルノデアリマス。依テ政府ハ組閣以來銳意此ノ方向ニ向ツテ努力ヲ續ケテ來タノデアリマスガ、最近ニ至リ遂ニ御手許ニ差上ゲマシタルガ如キ要綱ニ依リ我國ガ今次歐洲戰爭ニ參加スルコトナクシテ右兩國トノ提携ヲ強化シ得ルノ機運ニ達シ右ニ基キ兩國ト交渉ヲ遂ゲ度イト思ヒマス。而シテ本案件ハ固ヨリ平和ヲ目的トスルモノデアリマスガ最惡ノ事態ノ發生ヲモ覺悟スル必要ガアリマスノデ我國運ノ消長ニ關スル未曾有ノ重大案件ト申スベキデアリマ

ス。依ツテ極メテ慎重ニ審議ヲ盡シ御決定ヲ仰ギ度イト考ヘマシタノデ本會議ノ開催ヲ奏請致シマシタ次第デアリマス。本案件ノ本日迄ノ經過竝ニ獨、伊兩國政府トノ間ニ締結セントスル條約要綱ニ付テハ外務大臣ヨリ詳細説明致サセ度イト思ヒマス。

丁 號

日獨伊三國條約締結ニ關スル外務大臣説明案(御前會議)甲、經過

本大臣ハ七月下旬、現內閣ガ成立致シマシテ以來、只今內閣總理大臣ノ申サレマシタ趣旨ニ基キ、獨伊トノ政治的提携ヲ強化シタイト思ヒマシタガ、當時、獨逸ハ佛蘭西ヲ席捲シ、英本國ノ如キモ、旬日ヲ出デズシテ、容易ニ征服シ得ルト云フヤウナ氣勢デゴザリマシテ、獨逸ニ於ケル、我國トノ提携熱ハ一般ニ極メテ低カツタノデアリマス。然シナガラ獨伊ハ、今英本國ヲ屈服サスコトガ出來マシテモ、其ノ後ニ於テ、英帝國全部ノ崩壞戰ハ事シカク容易デハゴザリマセヌ上ニ、更ニ米國ト英帝國ノ殘存勢力トガ結合シテ出來ルトコロノアングロ・サクソ

ン王國又ハブロツクトモ云フベキモノト今次ノ戰爭ニ依ツテ強大ヲ加ヘタルソ聯邦ト云フ二大勢力ト對抗シナケレバナラヌコトハ明瞭デアリマス。其ノ場合地理的ニ惠マレタ地位ヲ占メ且世界無比ノ國體ノ下ニ優秀ナル民族ヲ持ツ我國ノ力ハ偉大ナルモノガアリマスノミナラズ、現在ト雖モ或意味ニ於キマシテ皇國ハ實ニ世界ノ天秤ヲ左ニデモ右ニデモ上下サス丈ノ力ヲ持ツテ居ルト云フノガ不肖本大臣ノ抱ケル見透シト見解デアリマス。而シテ此ノ事位ハヒトラ―總統及少クトモ其ノ周圍ノ者ダケハ認識シテ居ルデアラウト想像シマシタ、否ソノ容子ガ多少窺ハレタノデゴザリマス。彼等ハ當時ニ於テモ我國トノ提携ニ相當ノ熱意ヲ持ツテ居タヤウデアリマス。根本ニカヤウナル考ヲ持ツテ居リマシタガ故ニ私ハ諸般ノ情況上一應ハ急ギタイト云フ心持ノ中ニモ固ヨリ下手ニ出ル要モナク、又已ムヲ得ナケレバ英本國屈服後トナツテモカマワス、若シサウナツタナラバ、愈々以テ緩ツクリト構エヤウト決意シテ居ツタノデアリマス。何レニ致シマシテモ、當時焦ルト見ラレルヤウナ手ヲ我方カラ出シマスルコトハ外交上禁物デアッタノデゴザリマス。我ガ

獨自ノ立場ヲ堅持シ、必ズシモ獨伊ト結ブノ要ナシ、若シソレガ我國ノ存立ト使命遂行上、必要又ハ便利デアルナラバ、米ト結び、或ハ英ヲ救フコトヲモ敢ヘテ辭セヌト云フ姿勢サヘ示シテカカラナケレバナラヌト信ジタノデアリマス。ソレカラ、何ヨリモ先ヅ獨伊始メ世界ニ向ツテ本件ニ關シ斥候戰ヲ始メナケレバナラナカツタノデアリマス。本大臣ハ就任前後ヨリ遲滯ナク之ヲ開始シ、少シク容子ガ知レマシタノデ、一步ヲ進メ本大臣ハ八月一日オット大使ヲオ茶ニ招キテ、樞軸強化ガ我朝野ヲ通ジテノ傾向ナルハ貴大使モ御承知ノ通りデアルガ、ソレガ物ニナルニハマダマダ容易デハナイ、廟議モ未ダ具體的ニ確定シテハ居ナイト云フ趣旨ヲ告ゲマシタ上、支那事變ハ日本獨力ニテ其内片付クル考デアルカラ、別ニ獨逸ニ於テ意ヲ煩ハサレナイデヨロシイト申述ベマシテ、一應大使ノ仲介セントスル口吻ヲ押へ、我建國以來傳統タル八紘一字ノ大理想ヲ實現セントスル決意ノ眞劍ナル事ト、先ヅ之ヲ大東亞共榮圈ニ於テ試ミントスルモノナル旨ヲ説キ、次デ、タトヘ英本國ガ間モナク屈スルトモ、ソレハ大英帝國崩壞ノホンノ初マリナルニ止マリ、

決シテ終ニアラザル所以ヲ申聞ケ(大使モ同様ノ事ヲ自ラ進ンデ申シテ居リマシタ)右二ツノ大局の觀點ヨリシテ、獨モ亦日本トノ提携ノ可否ヲ決スベキデアルト結論シ(一)大東亞圈ニ對スル前述ノ日本ノ理想實現ニ付獨逸ハ如何ナル態度ヲ執ルカ、如何ナル事ヲ以テ日本ヲ助ケ得ルカ又助ケル考ナルカ、又コノ圈内ニ於テ獨逸ハ何ヲ求ムルカ、(二)日ソ關係ニ就キ獨逸ハ如何ニ考フルカ、又何ヲナシ得ルカ、(三)日米關係ニ就キ如何ニ考フルカ又何ヲナシ得ルカトテ、以上三項ニ關スル本大臣ノ質問ヲ至急ヒトラ一總統トリッペンツロップ外相ニ架電シテ、其返事ヲ得ラレタシト告ゲマシタ。

右ニ對スル返事ハ容易ナラズトシテ、獨大使ハ澁ツテ居リマシテ、私モ亦容易ニソノ返事ハ來ナイデアラウト豫想シマシタトコロ、果シテ來マセンデシタ。私ハ態ト催促セズニ放ツテ置キマシタ。然ルニ、リッペンツロップ外相ハ其東洋問題ニ關スル懷刀デアルト言ハレテ居リマスル、ハインリッヒ・スターマー總領事ヲ公使ニ昇任セシメタ上、八月二十三日ベルリン出發、急遽モスコワラ經テ、本邦ニ送ツタノデアリマス。同公使ハ九月七日朝

東京ニ着キマシタノデアリマスガ、本大臣ハ別ニ急イデ會ヒタイ態度ハ示サナカツタノデアリマス。トコロガ九日先方ヨリ會見ヲ申出デマシタノデ、人目ヲ避クル爲同日私ノ私邸デ、同公使及オット大使ト會見致シマシタ。ソレカラ十日二度目ノ會見ヲ遂ゲ九月十一日三度目ノ會

見ニ於テ一案ヲ得、更ニ獨逸本國政府ト本大臣トノ間ニモ意見ヲ交換シタル結果御手許ニ差上ゲマシタ要綱ノ如キモノニ大體落チツキマシタガ、此要綱ニ掲ゲラレテ居リマス各點及ビ八月一日オット大使ヲ經テベルリンニ電報セシメマシタ本大臣ノ質問各點ニ付キマシテハスターマーハ明確率直ニ其ノ見解ヲ述ベテ居リマシタ次第デ、此點ハ本大臣ニ於テモ満足ト致シテ居ル次第デアリマス。依テ今後更ニ是ニ基イテ交渉ヲ進メ細部ニツキ妥結ニ達シタイト思ヒマス。

乙、要綱ノ説明

第一項ノ日本ハ歐洲ニ於ケル新秩序建設ニ對スル獨伊ノ指導的地位ヲ認メ且之ヲ尊重ストアリマスガ、當方デハ當初アフリカニ於ケル新秩序建設ヲ先方ガ持出スカト思ツタノデゴザリマスガ、先方ガ之ヲ持チ出サナカツタカ

ラ、單ニ歐洲ニ於ケル新秩序建設ニ對スル地位承認ニ限ツタ次第デアリマス。

第二項ノ「大東亞ニ於ケル新秩序建設」ト云フ「大東亞」ノ意味ハ只今ノトコロ佛印、タイ國、ビルマ、海峽植民地、蘭印ヨリニューギニヤ、ニューカレドニヤ等ヲ含ムオセアニアノ島嶼ヲ含ム意味デアリマシテ、此ノコトハ此際ノ事デモゴザリマスシ、ソレニ東亞ノ形勢如何ト世界情勢ノ推移ニヨリ漸次其範圍ニ變更ノアリマスコトト豫想サレルコトデモゴザリマスノデ、先方ハハ態ト大擱ミニ話シ、濠洲トニュージールランド及其以南ハ今ノ處這入ラスガ、時ト共ニ自然範圍ハ擴ガルナラン、ト申聞ケ、印度ニハ言及ヲ避ケマシタ。先方モ別ニ細カクハ尋ネズシテ本大臣ノ所述ニ同意ノ意ヲ表シマシタ。是ニ對シ獨逸ハ右區域ニ於ケル日本ノ政治的指導權ハ認ムルガ、經濟的ノ通商、企業、原料取得ト云フガ如キコトニ就テハ日本ニ於テモ出來得ル限り便宜ヲ與ヘテ貰ヒタイト申シテ居ルノデアリマス。日本側モ亦同地域ノ經濟的開發ニハ大ニ獨伊ノ協力ヲ得ンコトヲ期待スルモノデアルト應酬シテ置キマシタ。

第三項ノ中「一國又ハ數國ニ依リ（公然若ハ陰密ニ）攻撃セラレタル場合云々」ノ一國ト申スノハ暗ニ米國ヲ主トシテ指シタノデアリマシテ、其ノ一國ニ依リ攻撃セラレタル場合ニハ自働的ニ參戰義務ガ發スル次第デアリマシテ、即チ我國ハ獨伊ト米國ヲ對照^{（象カ）}トスル軍事同盟ニ這入ルノデアリマス。「公然若ハ陰密ニ攻撃セラレタル場合」ノ「公然若ハ陰密ニ」ノ文句ハ先方デ入レテ來タノデアリマスガ、スターマー公使及オット大使ハ一應ハ之ヲ削除スルコトニ贊成シ、其事ヲリッペン外相ニ電報シタノデアリマスガ、マダ或ハ獨外相ガ之ヲ固執スルカモ知レヌト云フ餘地ハ殘ツテオリマス。其ノ解釋ハ相當困難デアリマシテ、特ニ陰密ニ攻撃セラルルトハ如何ナルコトデアルカ問ヒマシタ處、米國ガ今ノ程度ノ事ヲ爲シテルコトヲ意味スルノデハナイ、寧ロ日本ノ爲ヲ思ツテ考ヘタコトデ、例ヘバ英國ノ有スル太平洋ノ重要地點ヲ、英トノ祕密取極ニ依リテ使用シ、或ハ直ニ米國ガ艦隊ヲシンガポールニ入レル、ト云フガ如キ場合ヲ意味スルノデアルト答ヘマシタ。之ニ對シテ本大臣ヨリ、然ラバ獨伊ニ關シテハ如何、ト問ヒマシタニ對シ、先方ハ、タトヘ

バ歐洲戰場ニ近接セル地點、地中海ニ在ル英ノ有力ナル根據地ヲ米ヲシテ占據セシムルトカ云フヤウナル場合ヲ指スモノナルベシト答ヘマシタ。右ノ如ク攻撃ヲ二ツノ種類ニ區別スルニシロ、單ニ「攻撃」トスル場合ニシロ、米國又ハ其ノ他ノ第三國ノ或行動若クハ行動ノ連鎖ガ、果シテ本項ニ所謂攻撃ヲ構成スルモノト認ムベキヤ否ハ三國協議ニ依ツテノミ決定セラルルノデアリマス。爲念何等カノ形ニ於テソノ事ヲ明瞭ニシテ置カウト云フ話合ニシテアリマス。依ツテ孰レノ辭句トナストモ懸念ハナイト存ジマス。

第四項ニ就テハ別ニ説明スル必要ハナカラウカト存ジマスルガ、コレハ大體前文ニスル考デ話ヲ進メ先方モ略同意致シテ居リマス。我建國ノ御詔書ノ中ニアリマスルハ絃一字即チ總テノ國民、民族ガ各々其所ヲ得ルト云フ大精神ヲモ取入レテ餘程辭句ヲ練ツタモノデ御座リマス。第五項ハ本條約ガ蘇聯ニ向ケラレタルモノニ非ザルコトヲ規定シタモノデアリマス、ガ、實ハソ聯ハ獨伊對英佛戰ニハ參加シテ居ナイ建前トナツテ居ルノデ、或ハ第三項ノ所謂「一國」ニ相當スルモノデハアルマイカトノ疑

惑ヲ生ズル虞モアリマスシ、旁々日獨伊ガ世界新秩序ヲ造ル上ニ於テ蘇聯ヲ敵ニ廻ス懸念ノナイコトヲ明カニシ、特ニ獨逸ト蘇聯トノ間ニポーランド始め、歐洲ニ於ケル現在ノ取極又ハ見解若クハ或種ノ事態ヲ存セル、ソノ事實ニ些カモ影響スル所ノナイコトヲ明カニシテ、蘇聯ヲ安心サセ、之ニ依リ米蘇ノ接近ヲ防グノ目的ニ資シヤウトスル趣旨デアリマス。尙別ニ條約附屬文書ヲ作成致シマシテ、本條約成立後速ニ東京、伯林、羅馬ニ軍事及經濟ノ混合委員會ヲ結成シ、本條約ノ趣旨ニ基キ、實行ニ關スル詳細ナル取極ニ就テ研究セシメ、政府ニ提示ノ上政府ノ承認ヲ求メシムベキコトヲ規定シタイト思ヒマス。又獨伊兩國ガソ聯ヲシテ本件條約ノ趣旨ニ同調セシメ且我國トソ聯トノ國交調整ニ斡旋ノ勞ヲ執ルベキコト竝ニ獨逸ガ我方ニ對シ戰爭資材及技術並要スレバ技術官其他ノ人員等ヲ供給シ、蘇聯其ノ他ヨリ石油ノ獲得ニ協力シ、又我方ヨリモ供給シ得ルモノナラバ、戰爭資材及食糧其ノ他生活必需品並技術ヲ供給スル等ノ事ヲ約束スルコトニナラウト思ヒマスガ、形ハ一應ハ相互的ノ辭句トシナケレバナラヌコトト存ジマス。

更ニ此要綱ノ趣旨ニハ交渉ノ成行ニ依ツテハ、多少ノ變更ヲ見ルコトモアリマセウ、又字句ノ修正ヤ形式ノ變更モ御座イマセウト存ジマスガ、此邊ハ外交接衝上ノ手心ヲ加ヘルコトヲ御許シ戴キタイト存ジマス。但シ如何ナル場合ニモ右要綱ノ根本ノ趣旨ヲ變更スルヤウナコトハ致シマセヌ考デ御座イマスガ若シ萬ガ一二モ根本趣旨ニ變更ヲ來サネバナラヌヤウナ場合ニ立到リマシタナラバ、改メテ必要ナ手續ヲ執リマスコトニ御含ミヲ願ヒマス。

丙、結言

今回ノ對獨交渉ノ基礎ハ平沼內閣時代ノ夫レト全ク異ツテ居リマス。即チ獨逸側モ日本ノ歐洲戰爭參加ノ必要ナシト言明シテ居ル次第デアリマシテ、獨逸ハ米國ノ參戰ヲ、日本ハ日米衝突ヲ、回避スル事ヲ共通目的トシタノデアリマス。從テ皇國政府ガ從來採ツテ來マシタ不介入ノ方針ハ、將來本條約ニヨリ影響セラレルコトアルベシト云フ豫想付ニテ、一應ハ繼續セラレル次第デアリマス。米國ハカナダトノ共同防衛ヲ決定スルヤ、間モナク、日米間ノ些細ナ問題ニ迄、殆ンド堪ヘ難イト思ヘルガ如キ態度ヲ以テ臨ンデ來マシタノデ、本大臣ハ已ムナク此程

嚴肅ニ米大統領及國務長官ノ反省ヲ促シタヤウナ次第デアリマス。

最近ノ動キニ就キ洞察シマスルニ、米國ハ太平洋及ビ南洋方面ニ亘リテ、已ニ施シ若クハ現ニ施シツツアル軍事施設ニ加フルニ此ノ際飛躍の二且取急イデ濠洲、新西蘭、印度、ビルマ其ノ他ノ南方ニ於ケル英領ノ必要地點ニ、有力ナル軍事根據地ヲ獲得シ、以テ日本包圍ノ陣形ヲ整ヘントシテ居ルノデハアルマイカト、カナダトノ前述共同防衛ニ關スル協定成立ガ報ゼラレマシタル時、本大臣ハ已ニ想像シタノデゴザリマスガ、其ノ後間モナク果然英帝國及ビ濠洲政府ト米國トノ間ニ、協議進行中ノ旨ノ、可ナリ信ズルニ足ルト想ハルル、新聞報道サヘ傳ヘラルルニ至ツタノデアリマス。又段々ト支那事變ニテ日本ガ消耗戰ニ惱ンデ、國力ガ著シク減殺セラレタト見テ恫喝の言辭ヲ弄スルノデハアルマイカト想像セラルル廉モゴザリマスガ、ソノ理由ノ那邊ニ在ルニセヨ、日米國交ハ最早禮讓又ハ親善希求等ノ態度ヲ以テ改善スルノ餘地ハ殆ンドナイト思ハレマスノミナラズ、却ツテ惡化サス丈ノ事デハアルマイカト懸念セララル有様ニナツテ參リマ

139

シタ。若シ幾分ニテモ之ヲ改善シ又ハ此ノ上ノ惡化ヲ防
グ手段アリトスレバ唯毅然タル態度ヲ採ルト云フ事シカ、
此ノ際ノ措置トシテハ、殘ツテ居ナイト存ジマス。苟モ
然リトスレバ、ソノ毅然タル態度ヲ強ムル爲ニ一國ニテ
モ多クノ國ト堅ク提携シ、且ソノ事實ヲ一日ニテモ、速
ニ中外ニ宣明周知セシムルコトニ依リテ、米國ニ對抗ス
ル事ガ、外交上喫緊事デアルト信スルノデアリマス。然
シ本大臣ハカカル措置ノ反響乃至效果ヲ注視シツツ尙米
トノ國交ヲ轉換スルノ機會ハ、之ヲ見逃サナイ用意ヲ常
ニ怠ラナイ覺悟デゴザリマス、唯ソレニシテモ、一應ハ
非常ナ堅イ決心ヲ以テ毅然對抗ノ態度ヲ、中外ニ向ツテ
一點疑ヒヲ容ルル餘地ノナイマデニ、明確ニ示サナケレ
バナリマセヌ。此ノ點ハ本條約締結ニ伴フ最重要ナル點
デアリマスカラ、最後ニ之ヲ反覆シテ置キマス。

昭和15年9月24日
松岡外務大臣より
在独国来栖大使宛(電報)

日独伊三国同盟条約の締結決定につき通報

館長符號(極秘、大至急)

本省 9月24日後発

日獨伊樞軸強化ノ目的ニテ去ル九日以來本大臣ト「オツ
ト」大使及「スターマー」公使(七日來朝)ト話合ヲ遂ゲ來
リタル處

「八紘一字ノ精神ニ則リ世界新秩序建設ヲ目的トシ大東亞
ニ於テハ日本、歐洲ニ於テハ獨伊ノ指導的地位ヲ認メ且
尊重シ互ニ協力スルコト

三、三國中ノ一國ガ現ニ歐洲戰爭又ハ日支紛爭ニ參入シ居ラ
ザル一國ニヨリ攻撃ヲ受ケタルトキハ政治的、經濟的及
軍事的ニ相互ニ援助スベキコト

ノ趣旨ノ三國條約ヲ締結スルニ決定シ既ニ貴任國政府ヲ通
ジ伊太利政府トモ協議濟ナルヲ以テ不日東京又ハ伯林(獨
逸政府ハ伯林ヲ希望ス)ニテ調印ノ運ニ至ル見込ナリ

右絶對貴官限りノ御含迄

伊ニ轉電有度

140
昭和15年9月25日

日独伊三国同盟条約の案文承認に関する独側

回答について

九月二十五日午前十一時獨逸大使館「ボルツエ」參事官松本條約局長ヲ來訪獨逸外務省ヨリ大使宛左ノ通來電アリタル旨ヲ述ベタリ

一、獨逸政府ハ條約「テキスト」(英文)ヲ承認ス

二、伊太利政府モ右「テキスト」ヲ承認ス可キコトヲ確信ス、獨逸外務省ハ伊太利外務省ヨリ在東京伊太利大使ガ松岡大臣ニ條約ヲ受諾スル旨正式ニ申入ルル様依頼セリ

三、(イ)獨逸政府ハ英語「テキスト」ニ假ニ署名スル事ニ同意ス

(ロ)右事實ハ絶対ニ極祕トス

(ハ)二週間位後陰密ノ裡ニ英文「テキスト」ヲ日本語、獨逸文、伊太利文ニスリカヘ署名ス

四、來栖大使ニ對スル全權委任狀ハ在京獨逸大使館ニ寄託シ其實實ヲ大使ヨリ獨逸外務省ニ電報ス(右ノ點ニ關シテハ條約局長ヨリ今回ノ如キ批准條項ナキ條約ニハ正式ノ全權御委任狀ハ下附セラレザルヲ以テ來栖大使ニ於テ條約締結方御裁可アリタル趣ヲ外務大臣ヨリ在京獨逸大使

ニ通報方取計フ可シト述ベタルニ「ボ」參事官ハ右ニテ可ナリト答ヘタリ)

五、成ル可ク木曜日ニ署名ノ運ビト致度(松本條約局長ヨリ右ハ實際上不可能ナリト述ベタリ)

尙大使ノ希望トシテ總理大臣ノ「ステートメント」ノ案ハ來栖大使ニ電送獨逸外務大臣ニ提示セラレ打合サルル様致度、松岡大臣ガ伊太利大使ニ會見ノ際ハ例ノ三ツノ書翰ニハ絶対ニ言及セラレザル様希望ス(尙三書翰ハ大臣ヨリ大使宛ノ分ハ日本文ニ英譯ヲ附シ大使ヨリ大臣宛ノ分ハ獨逸文ニ英譯ヲ附スル事ニ申合セタリ)

~~~~~

141 昭和15年9月25日 松岡外務大臣より  
在独回来栖大使宛(電報)

### 日独伊三国同盟条約の調印手続きについて

第六五四號(大至急、館長符號)

往電第六四九號ニ關シ

本省 9月25日午後10時発

英文「テキスト」妥結ニ達シタルニ依リ不取敢英文「テキスト」ニ貴地ニ於テ調印ノ上日獨伊三國文ヲ作成シ之トス、

り代フルコト(此點ハ絶對外部ニ漏サザルコト)ニ決定セル  
ガ當方ニ於テハ明二十六日樞密院ノ審議ヲ了シ明日中或ハ  
明後二十七日午前中ニモ御裁可ヲ經ルノ運トナラバ明後二  
十七日中ニハ貴地ニ於テ本件條約ノ調印可能ナルベシ(大  
体伯林時間二十七日正午調印ノコトト予定シ在京大使館ト  
打合せ居レリ)

本件條約ノ如キ事前ニ御裁可ヲ經テ調印スル條約ニ對シテ  
ハ全權御委任狀ノ御下附ナク御裁可ヲ經タル上單ニ本大臣  
ヨリノ訓令ニ基キ調印スルヲ例トスルモ在京獨逸大使館ヨ  
リノ希望モアリ日獨防共協定締結ノ際ニ於ケル先例ニ基キ  
御裁可アリ次第別電第六五五號<sup>(金略)</sup>ノ趣旨ニテ本大臣ヨリ貴使  
宛電報スルコトト致シタルニ依リ(尤モ別電ニ依リ日附ヲ  
空ケテ予メ其ノ寫ヲ用意シ置カレ度)右電報接受ノ上ハ其  
ノ寫ヲ先方ニ提示シテ調印セラルコトト致度右予メ獨側  
ト打合せ置カレ度尙右電報寫ハ本大臣ヨリ在京獨大使ニ之  
ヲ送達シ同大使ヨリモ其ノ旨電報スルコトニ在京獨大使館  
ト打合濟

142

昭和十五年九月26日

日独伊三国同盟条約締結に関する樞密院審査  
委員會の議事概要

日獨伊三國條約ニ關スル樞密院審査委員會議事概要

(松本條約局長手記)

昭和十五年九月二十六日午前十一時二十分開會

宮中東三ノ間ニ於テ

出席者

樞密院側 原樞密院議長

鈴木樞密院副議長(審査委員長)

欠席ノ金子顧問官及田中顧問官ヲ除キ全顧

問官審査委員トシテ出席

政府側 近衛內閣總理大臣

松岡外務大臣

東條陸軍大臣

及川海軍大臣

河田大藏大臣

星野企畫院總裁

他ニ説明員トシテ

村瀬法制局長官、森山第二部長

松本條約局長

武藤軍務局長

阿部軍務局長

原口爲替局長、松隈銀行局長

辻監理局長

## 議事

一、委員長開會ヲ宣シ書記官ヲシテ條約案文ヲ朗讀セシム

二、近衛總理大臣別紙甲號ノ通挨拶ヲ述ブ

三、松岡外務大臣別紙乙號ノ通説明ス

四、席順ニ依リ質問ニ入ル

河合顧問官 本官ハ本案ノ趣旨ヲ完全ニ了解セリ本官トシテハ豫テヨリ日獨伊同盟ノ成立ヲ希望シ居リタルモノニシテ松岡大臣就任以來其ノ速ナル實現ヲ期待シ一部二松岡大臣ノ活動ヲ手緩シトスル論モ耳ニシタルガ今回遂ニ之ガ成立ヲ見タルハ欣快ニ堪エザル所ナリ只今ノ松岡大臣ノ説明ニ依レバ伊太利ノ態度ハ明ナラザル處此ノ點ヲ承リ度シ

松岡大臣 本件話合ハ先程モ述ベタル通り日獨間ニ始メラ

レタルモノニシテ獨側ハ最初ヨリ伊太利ノ方ハ引受ケ居レリト申述べ居リタリ昨日伊太利大使ハ本大臣ヲ訪問シテ伊太利ハ本件交渉ノ一切ヲ獨側ニ委任シ日獨間ニ纏リタル條約案ニ伊側ハ全幅的ノ贊意ヲ表スル旨本國政府ノ訓令ニ依リ申入レ來リタル次第ナリ

河合顧問官 附屬ノ交換文書ヲ一覽スルニ日獨間ノ關係ノミヲ述べ居ル處伊太利ヨリモ同様ノモノヲ取付クル必要ナキヤ

松岡大臣 實ハ我方トシテハ凡テ獨逸ニ重點ヲ置キ伊太利側ヲ附隨のモノト考ヘテ差支ナシト思考ス從テ交換文書ノ中ニ於テ獨逸外務大臣ガ伊太利ノ援助及協力ヲ必要トスル場合ニハ伊太利ハ勿論獨逸及日本ト同調スベキコトヲ絶對ニ信ズル旨ヲ掲ゲシムルニ止メタル次第ナリ

河合顧問官 條約第三條ハ最モ重要ト思考ス本官ハ日米開戰ヲ信ズルモノニ非ザルモ最惡ノ場合ヲ考慮シテ軍部大臣ハ何等敗ケヲ取ラザル丈ノ覺悟アリト信ズルガ之ニ就テ何等カ本官等ニ安心ヲ與フル様御説明ヲ承リ度シ又蘇聯ガ日本ニ向テ事ヲ起サザルモノトモ限ラズ此ノ場合獨



逸ハ如何ナル態度ヲ執ルモノト考ヘラルルヤ

東條陸軍大臣 本大臣ハ主トシテ陸軍ノ見地ヨリ御回答ス  
最惡ノ事態ニ陥リタル際對米作戰ニ要スル陸軍ノ兵力ハ  
極一部分ヲ使用スルニ過ギズ其ノ點ハ御懸念ハ無用ト思  
考ス然シ乍ラ對米作戰ハ結局對蘇作戰ヲ考慮セザレバ完  
全ナリト云ヒ難シ依テ日蘇ノ國交調整ハ極メテ重要ナル  
問題ニシテ之ガ有效ニ完成スレバ軍事の準備ハ餘程樂ニ  
ナルモノト考ヘ得ル處蘇聯ノ性格上日本トシテ準備ヲ怠  
ル譯ニハ參ラズト思考ス尙支那事變ニ付テハ本條約ヲ有  
效ニ活用スルコトニ依リ最惡ノ事態發生前事變ノ解決ヲ  
圖リ度キ考ナリ

及川海軍大臣 現存艦隊ノ戰備ハ完成シ居レルヲ以テ決シ  
テ米國ニ敗ケハ取ラザルモ戰爭ガ長期ニ亘ル場合ニハ米  
國ノ海軍充實計畫ノ實現ニ伴ヒ我方トシテモ充分ノ準備  
ヲ爲スノ要アリ此ノ點ニ付テハ海軍トシテモ萬全ノ策ヲ  
講ジ居ル次第ナリ

河合顧問官 本官ノ最モ心配スル所ハ物資ノ關係ナルガ一  
体長期戰トナリタル場合孰ノ位ノ間ハ差支ナキ御考ナリ  
ヤ

星野企畫院總裁 昨日御説明申上ゲタル通り(企畫院總裁

ハ其ノ前日樞密院定例參集ニ於テ物資動員計畫ニ付詳細  
ナル説明ヲ行ヘリ)數年前ヨリ我國ハ諸物資ノ自給自足  
ヲ覺悟シテ準備シ來レルガ二十一億ノ輸入ノ中十九億ハ  
英米ニ依存セル有様ナルガ故ニ經濟上ノ壓迫強化ノ場合  
條約第三條發動ノ場合ヲ考ヘテ萬全ノ策ヲ講ズル必要ア  
リ鐵ニ付テ云ヘバ本年ノ生産高ハ五百二十萬噸ノ見込ナ  
ルガ最惡ノ場合ニモ四百萬噸ハ生産シ得ル見込ナリ現在  
軍備竝ニ軍需ニ使用セルモノ百五十萬噸其ノ他ハ生産力  
擴充竝ニ民需官需ニ充當セルモノナルガ屑鐵ガ來ラザル  
場合又ハ鐵材ノ輸入ナキ場合ヲ考慮シテ生産力擴充ニ手  
加減ヲ加ヘ民需官需ヲ制限スレバ左程窮境ニハ立たザル  
見込ナリ非鐵金屬ニ付テハ鐵ノ様ニハ參ラヌモ世界中ヨ  
リ目下蒐集ニ務メ居ルヲ以テ之亦左程心配ハ要ラヌト思  
考ス最モ重大ナルハ石油ナルガ現在ハ多量ヲ米國ニ依存  
シ居リ殊ニ航空機用揮發油ハ殆ンド全部ヲ米國ヨリノ輸  
入ニ仰ギ居ル處國內ノ増産ヲ圖ルト共ニ米國以外ヨリ獲  
得スル方法ヲ講ゼザルベカラズ最近航空油ニ付テハ相當  
ノ「ストック」ヲ得タリ然レ共對米戰爭長期ニ亘ル場合



鐵其ノ他ノ金屬類ノ場合トハ異リ日滿支三國ノ中ノミニ  
テハ自足出來ザルニ依リ出來得ル限り速ニ蘭印又ハ北樺  
太等ヨリ石油獲得權ヲ確保スル必要アリ此ノ點ニ付テハ  
今回ノ獨逸側トノ話合ニ於テモ問題トナリタル點ナリ又  
目下蘭印ニ於テ平和裡ニ石油ヲ獲得スル交渉ガ行ハレ居  
ルモノト御了解願度シ

河合顧問官 昨日ノ御話ノ時ニモ石油ニ付テハ軍部ニ於テ  
モ相當ノ準備アリト云フ意味ノコトヲ申サレタルガ軍部  
大臣ヨリモ御答辯願度シ

及川海軍大臣 海軍トシテハ相當長期ノ準備ヲ有ス又人造  
石油ニ付テモ目下施策中ナリ

東條陸軍大臣 陸軍ノ資材ニ付テモ相當ノ期間ハ堪工得ル  
樣準備アリ非常ナル長期戰トナレバ航空機用、機械化部  
隊用ノ油ニ付テ考慮スル必要アリ

右ニテ一旦休會

午後一時十分再開

石井顧問官 第三條ニ依リ一國ガ攻撃セラルルトキハ直ニ  
參戰義務ヲ生ズルモノナリヤ何等カ此ノ點ニ付話合アリ  
タルヤ

松岡外務大臣 交換文書中ニ「一締約國方條約第三條ノ意  
義ニ於テ攻撃セラレタリヤ否ヤハ三締約國間ノ協議ニ依  
リ決定セラルベキコト勿論トス」(在京獨逸大使來翰)ト  
アルハ御質問ノ點ヲ明確ナラシムル爲本大臣ノ要求ニ依  
リ挿入シタルモノニシテ攻撃アリタルヤ否ヤニ付テ協議  
シ協議纏マレバ自働的ニ共同シテ戰ハザルベカラザル處  
何時如何ナル方法ニ依リ援助スルヤハ締約國各々自主的  
ニ決定シテ協議スルコトナル次第ナリ

石井顧問官 條文中ニ「直ニ」ト云フ字句モナキニ依リ外  
務大臣ノ説明ハ自分モ同感ナリ尙第四條ノ混合專門委員  
會ハ通常同盟條約ニアル軍事專門家間ノ協議ト解シ居リ  
タルガ先程ノ外務大臣ノ説明ニ依レバ經濟的ノ問題モ右  
委員會ニ於テ協議スルモノノ如キ處此ノ點ニ付御説明ヲ  
承り度シ

松岡外務大臣 本件ハ最初ハ條約ノ附屬祕密議定書中ニ規  
定スル案ニナリ居リタリ同案ニ依レバ陸海軍ノ混合委員  
會ヲ東京ニ一、伯林又ハ羅馬ニ一ヲ設ケ其ノ他經濟委員  
會ヲ設クルコトトナリ居レリ然レ共祕密議定書ハ作成セ  
ザルコトトナリ此ノ點ハ條約成立後兩國間ニ協議シテ決

定致度キ處經濟問題ヲ扱フ委員會ハ必要ト思考スルニ依リ設置スルコトトナルベシト考ヘ居レリ

石井顧問官 本條約ニハ同盟條約ニ殆ンド必ズ存在スル單獨不媾和二關スル規定ナキ處右ハ何等カ特殊ノ迷惑アリタル次第ナリヤ

松岡外務大臣 本件ハ一切話出ザリキ實ハ本大臣トシテハ先方ガ云ヒ出セバ之ヲ挿入スルモ差支ナシト思考シタルガ先方ガ之ニ觸レザル場合ニハ之ヲ設ケザル方可ナリト思ヒタリ何トナレバ本條約ハ本大臣ノ考ニテハ戰爭ヲ防止スルコトガ目的ニシテ戰爭スルコトガ目的ニアラザルニ依リ開戰ヲ豫想スル單獨不媾和ノ規定ヲ設ケザル方可ナリト思ヒタルコトガーノ理由ニシテ、他ノ理由ハ萬一戰爭ガ始マレバ此ノ點ハ戰爭初期ニ互ニ約束スレバ宜シト考ヘタルヲ以テ之ガ規定方ヲ申出ザリシ次第ナリ

石井顧問官 御意見御尤ト存ズ尙條約第一條ニ歐洲ニ於ケル新秩序ト云フコトガアル處何ヲ以テ歐洲ノ新秩序ト云フヤ判然タラシメザレバ日本ノ義務ガ判然タリ得ザルニ非ズヤ何カ此ノ點ニ付話合アリシヤ

松岡外務大臣 御尤ノ質問ト存ズルモ本大臣トシテハ新秩

序ノ意義ハ前文ニテ充分現ハレ居レリト思考ス前文ハ當方ノ提案ニシテ獨逸側ハ一字ノ修正ヲモ申出ザリシモノナリ

有馬顧問官 本條約ニ依リ日米戰爭ヲ避ケ度キハ本官モ政府ト同感ナルガ日米ハ宿命的ニ戰ハザルベカラザルモノナラバ今日ガ最モ良キ時期ト考フ但シ最モ心配ナルハ石油ノ缺乏ナリ海軍大臣ハ相當ノ準備アリト云ハレタルガ日米開戰スレバ一年、二年デ終局ニ達スルモノトハ思ハレズ殊ニ今日ノ戰爭ニ於テハ極メテ多量ノ石油ヲ使用セザルベカラザル處人造石油等モ果シテ急場ノ間ニ合フモノナリヤ心配ニ堪エザル次第ナルニ付此ノ點重ネテ海軍大臣ヨリ御回答ヲ得度シ

及川海軍大臣 人造石油ハ未ダ着手シタル許リニテ仲々急場ノ間ニ合フトハ申サレズ依テ平和的手段ニ依テ蘭印又ハ北樺太ヨリ獲得スル他ナク之ガ成功スレバ相當有望ナリ從テ蘇聯トノ國交調整ハ此ノ點ヨリ云フモ重要ナリト存ズ又一方海軍トシテハ長期戰ニナレバ油ノ使ヒ延シモ考ヘザルヲ得ズ

有馬顧問官 ハイ、オクタン價ノ石油ハ充分間ニ合フ次第

ナリヤ

及川海軍大臣 ハイ、オクタン價ノ石油ハ近年海軍ニテモ専門ノ研究機關ヲ設ケ海軍獨自ノ方法ニテ製造シ居レリ又相當ノ準備モアル次第ナリ

窪田顧問官 條約第三條ノ文字上ヨリ見レバ現ニ歐洲戰爭又ハ日支紛爭ニ參入シ居ラザル一國ノ中ニハ蘇聯モ含マルモノト考フルガ蘇聯トノ關係ハ如何ナルモノナリヤ獨逸ト蘇聯トハ何等カ話合アリタル次第ナリヤ

松岡外務大臣 其ノ疑問ヲ避クル爲第五條ヲ設ケタル次第ナリ尙本大臣ガ「スターマー」ニ對シテ蘇聯トノ間ニ何カ本條約ニ付話アリタルヤト訊ネタルニ對シ「スターマー」ハ否定的ノ回答ヲ爲シ居リタルガ本大臣ノ想像スル所ニテハ「スターマー」ハ「モスコ」通過ノ際蘇聯側ト何等カ話ヲ爲シ居ルモノト考ヘ居レリ其ノ證據ト思ハルル一ノ事實アルカ「スターマー」ハ八月二十三日ニ伯林ヲ出發セル處同日「リッベントロープ」外相ハ來栖大使トノ會見ニ於テ何等本件ニ言及セザリシガ「スターマー」ハ二十四日ニ東郷大使ニ會見シタル際ニハ獨逸側ハ日本ト政治條約ヲ締結スル積ナル旨ヲ話シ居ルヲ以テ其

ノ間「スターマー」ハ蘇聯當局ト何カ話ヲ爲セルモノト思考セラル

窪田顧問官 米蘇接近ノ噂モ聞ク處本條約ハ之ヲ促進スルコトトナル惧ナキヤ此ノ點ハ如何

松岡外務大臣 米蘇接近ニ付テハ外務省ニ於テモ各方面注意シテ真相ノ把握ニ務メ居ル處今日迄確實ト認メラル情報ニハ接シ居ラズ本大臣ハ未ダ具體的ノ何物モナシト考ヘ居レリ尙「スターマー」ハ日蘇ノ國交調整ノ成功ニ付テハ極メテ明白ニ其ノ可能性ヲ述ベ獨逸ノ斡旋ヲ申出タル次第ニシテ此ノ點ハ交換文書ニモ記載サレタル通ナリ

石塚顧問官 條約ノ條文トシテハ本官ニ於テ異存ナシ但シ獨逸トノ關係ニ付テハ過去ノ實績ニ照シ百「パーセント」信用ヲ置ク譯ニ行カズ防共協定及文化協定締結ノ際ニモ特殊ノ事項ニ付テハ兎モ角全面的ノ提携ハ不可ナリトノ議論アリキ此ノ點ハ政府ニ於テモ充分御留意相成テ條約實施ニ遺憾ナキヲ期セラレ度シ

清水顧問官 本條約ノ調印者ハ誰ナリヤ

松岡外務大臣 「リッベントロープ」「チアノ」及來栖大使

ノ三名ナリ

清水顧問官 本條約ハ署名ト同時ニ實施セラルコトトナ  
リ居ル處之ハ憲法上差支ナシト思ハルルヤ

松岡外務大臣 スクノ如キ條約ハ前例モ多々アリ調印前ニ  
樞密院ニ御諮詢相成リ御裁可アルモノナルニ依リ憲法上  
ノ問題ハ生ズル惧ナシ

清水顧問官 聞ク所ニ依レバ重慶ニハ未ダ獨逸人ノ技師ガ  
數名居ルト云フガ眞實ナリヤ

東條陸軍大臣 スカル情報ハアルモ眞相不明ナリ

清水顧問官 我南洋委任統治地域ニ對シテモ何等カノ代償  
ヲ支拂フコトトナリ居ル處如何ナル譯ナリヤ

松岡外務大臣 此ノ點ニ付テハ獨逸側ハ目下委任統治トナ  
リ居ル舊獨逸領ハ全部返還ヲ受クル建前トナリ居リ與國タ  
ル日本ノミガ之ヲ返還セザルコトヲ認ムルハ原則ノ問題  
トシテ受諾シ得ズ從テ代償ヲ得テ日本ニ讓渡シタル形式  
ヲ採リ度シト主張セリ最初ハ相當ナル代償 adequate ト  
云フ字句ナリシヲ本大臣ノ主張ニ依リ *pro a way* ト云フ  
コトニシタルモノニシテ先方ハ此ノ代償ハ全然「ノミナ  
ル」ノモノニテ可ナリ例ヘバ珈琲六袋ト云フ例モアリト

云ヒ居リタル位ニテ極メテ輕キ意味ナリ

清水顧問官 本官ノ考ニテハ委任統治ハ今更獨逸ヨリ讓渡  
ヲ受クル必要ナキモノト思ハル

松岡外務大臣 自分ノ考フル所ニ於テハ立博士其ノ他有力  
ナル國際法學者ノ說ノ如ク領土ノ割讓ハナカリシモノト  
見ルノガ正シト思考ス從テ本大臣ハ三年以來「ヴェルサ  
イユ」條約ヲ獨逸ガ實際上破棄シタル以上日本ノ委任統  
治ハ軍事占領ノ繼續ト見ルノガ正シク從テ獨逸ヨリ讓渡  
ヲ受ケテ事態ヲ明瞭ニスル必要アリト考ヘ居レリ

南顧問官 伊太利ハ本條約ニ何時承認ヲ與ヘタリヤ

松岡外務大臣 先程モ御答シタル通り伊太利ハ二十五日ニ  
在京大使ヲ本大臣ノ許ニ派遣シテ同意ヲ表明シ來レリ其  
ノ前ニ「リッペントロープ」外相ガ羅馬ニ於テ伊太利側  
ノ同意ヲ取付ケタルモノナリ

南顧問官 然ラバ十九日ノ御前會議ノ際ニハ伊太利ハ同意  
スルモノトモセザルモノトモ不明ナリシニ本件ヲ御前會  
議ニ附シ御裁可ヲ仰ギタルハ時期頗ル尙早ニアラズヤ  
松岡外務大臣 獨逸側ハ最初ヨリ伊太利ノ同意ヲ確實ニ得  
ラルコトヲ繰返シ述べ居リタルノミナラズ御前會議ニ

テ審議シタルハ日獨間ニ一應纏リタル案ニ依リ日獨伊三國間ニ條約ヲ締結スル方針ヲ附議シタルモノナルニ依リ何等差支ナカリシモノト考フ

南顧問官 大東亞ノ範圍ニ付テハ明白ナルコトヲ決メ居ラザルニアラズヤ

松岡外務大臣 交渉ニ當リ隨時話ヲ爲シ記錄ニ留メタリ  
南顧問官 日英間ニ紛爭發生シタル場合ニ付特ニ交換文書アルハ如何ナル理由ナリヤ

松岡外務大臣 英國ハ既ニ歐洲戰爭ニ參戰シ居ルヲ以テ本條約第三條ノ場合ニ當嵌ラザルモ日本トシテハ日英戰爭ガ絶對ニナシトハ云ヒ得ザルニ依リ特ニ此ノ點ヲ獨逸側ノ好マザリシニ拘ラズ明確ニセシメタリ

南顧問官 本條約ハ日本ヨリ言出シタルモノナリヤ獨逸ヨリ言出シタルモノナリヤ

松岡外務大臣 獨逸ヨリ言出シタルモノナリ

南顧問官 獨逸ガ斯卡ル提議ヲ爲スニ至レルハ對英作戰ニ失敗シタル爲ニアラズヤ

松岡外務大臣 對英作戰ノ長引キタルコトモ一ノ理由ナルヤモ知レザルモ右ガ全部ニハ非ズ數十年ノ長キ眼デ見テ

獨米ノ葛藤<sup>(藤カ)</sup>避ケ難シト見タル爲ナラント思ハル

南顧問官 本條約ニ依リ米國ヲ牽制スルコトハ結構ナルガ米獨提携ノ危險絶對ニナキヤ

松岡外務大臣 米獨提携ノ可能性モ絶對ニナシトハ思ハレズ然レ共日米關係ノ改善ニハ獨系米人ノ米國ニ於ケル勢力ヲ無視出來ザルニ依リ此ノ點ニ於テモ本條約ノ價值アリト思考ス

南顧問官 石油ノ問題ハ先程ノ各大臣ノ回答ヲ承ルモ壁ヲ隔テテ物ヲ聞クガ如ク一寸モ安心出來ズ今少シ明瞭ナルコトヲ承リ安心セシメラレ度シ

企畫院總裁、陸海軍各大臣 先程モ御答シタル通り陸海ハ相當貯藏アリ海外ヨリノ平和的獲得モ有望ナリト河合、有馬兩顧問官ニ對スル回答ヲ繰返シ述ブ

南顧問官 一方ニ於テ日支事變ガ繼續シ一方ニ於テ日米戰爭ガ勃發セバ日本ノ財政ハ如何ナルヤ大藏大臣ニ承り度シ

河田大藏大臣 財政ガ窮屈ニナルコトハ勿論ナリ結局國民ノ貯蓄ヲ増進シ政費節約ヲ圖ル他ナシ

南顧問官 次ニ日蘇關係ニ付承り度シ萬一日米戰爭ガ起リ

タル場合蘇聯ハ恰モ歐洲戰爭前ニ英佛ト獨トヨリ引張風トナリタルガ如ク日米兩國ヨリ提携ノ手ヲ差延スコトナルベシト思ハル故ニ日米關係ヲ考フルニハ先ヅ蘇聯トノ國交調整ヲ行ヒテ後此ノ條約ノ交渉ヲ爲スコトハ出來ザリシモノナリヤ何故ニ蘇聯トノ交渉ヲ後廻シニシテ獨逸ノ言分ニノミ從フモノナリヤ

松岡外務大臣 蘇聯トノ國交調整ニ付テハ前内閣時代ニ中立條約ヲ提議セリ本大臣モ就任以來採リヲ入レテ見タルガ蘇側ハ前内閣ノ提議ヲ受諾スル條件トシテ「ポーツマス」條約ノ再檢討、北樺太利權ノ回收等殆ンド拒否的ノ條件ヲ附シテ受諾ヲ回答シ來レルガ如キ有様ナリ依テ本大臣ハ蘇聯トノ國交調整ハ獨逸ヲ利用スル他ナシトノ結論ニ達シ本條約ニ對スル獨逸側ノ提議ヲ受諾セル次第ナリ

南顧問官 米國ハ歐洲戰爭ニ參加セズト云フコトヲ「スターマー」ハ外務大臣ニ申シタト云フコトナルモ大統領選舉後ハ如何ナルコトニナルヤモ知レズ中立法ヲ改正シテ極力英國ヲ援助スルコトニナルヤモ圖ラレズ其ノ場合ハ米國ハ獨逸ヲ攻撃シタルモノトナルヤ否ヤ

松岡外務大臣 米國ノ措置ガ攻撃トナルヤ否ヤハ其ノ時ノ狀勢ニ依リ判斷スル他ナシ此ノ點ニ付テハ交渉中獨逸側ハ第三條ニ公然ト又ハ陰密ニ( openly or covertly )攻撃セラレタル云々ト云フコトニ致度シト申出タルニ對シ當方ヨリ陰密ニ攻撃スルトハ例ヘバ米國ガ英國ニ驅逐艦ヲ讓渡スルガ如キコトヲモ含マルル惧アルニ依リ斯カル字句ハ削除シタシト主張シタル際先方ハ右字句ハ寧ロ日本側ノ利益ノ爲ニ挿入スルモノニシテ例ヘバ米國艦隊ガ新嘉坡ニ入港シタト云フガ如キ場合ヲ陰密ニ攻撃シタルモノト云フベク驅逐艦讓渡ノ如キハ入ラズト説明シタル經緯モアリ

南顧問官 獨逸側トノ話合ノ際ニ蘇聯ヲシテ援蔣政策ヲ拋棄セシムル爲ニ盡力スルト云フコトニ付念ヲ押サレタリヤ

松岡外務大臣 此ノ點ハ本大臣トシテモ充分考慮シ居リ獨逸ヲシテ蘇聯ヲ通ジテ重慶ヲ和平ニ導カシムルコトヲ考ヘ居ルモノナルガ之ヲ過早ニ云ヒ出スコトハ獨逸側ニ脚下ヲ見ラレ百害アリテ一利ナキ次第ナレバ最初八月初旬ニ「オット」大使ニ會見ノ際先方ヨリ斯カル趣旨ノ事ヲ申

出シタル際モ日本ハ支那事變ハ獨力ニテ片附クル積リナ  
リト申聞置キタル次第ナリ素ヨリ今後ハ本條約ヲ十二分  
ニ活用シテ日蘇國交調整、支那事變收拾ノ促進ヲ圖ル覺  
悟ナリ

奈良顧問官 質問ナシ

荒木顧問官ヨリ軍ノ素質、體力、健康狀態殊ニ肺結核ノ豫  
防等ニ付質問アリ陸海軍大臣ヨリ各回答ス

松井顧問官 質問ナシ

菅原顧問官 五ノ點ニ付質問致度シ(一)ハ外務大臣ハ先程祕  
密議定書ト云フコトヲ申サレタルガ祕密議定書ヲ作成ス  
ルト云フ議ガアリシヤ(二)ハ本條約ト日獨伊防共協定トノ  
關係如何(三)ハ本條約ハ三國條約ナルガ獨伊ノ關係ハ極メ  
テ緊密ナルヲ以テ條約ノ解釋等ニ付紛議ヲ生ジタル場合  
常ニ二對一トナル惧ナキヤ(四)ハ伊太利トノ關係ニ付テハ  
何等文書ノ上ニ殘ス必要ナキヤ(五)ハ對米戰爭勃發シタル  
場合ノ軍事上ノ覺悟ニ付テハ先程説明アリタルモ最モ心  
配ナルハ財政上ノ問題ナリ此ノ點ハ大藏大臣ニ於テモ充  
分ナル覺悟アリト存ズルガ如何

松岡外務大臣 (一)交渉中ニ祕密議定書作成ノ議出タルモ祕

密議定書ノ内容ハ日本側ノ要求ノミヲ入ルル片務的ノモ  
ノトナリ之ヲ完全ニスル爲ニハ時日ヲ必要トスルノミナ  
ラズ伊太利ノ同意ヲモ取付クル必要アリタルニ依リ祕密  
議定書ノ作成ヲ避ケ本大臣ト在京獨逸大使トノ間ニ文書  
ヲ交換シテ祕密議定書ニ代フルコトナリタル次第ナリ  
(二)防共協定ハ其ノ儘存置ス日本トシテハ防共ト云フ大方  
針ハ蘇聯トノ關係如何ニ拘ラズ之ヲ堅持シ行カザルベカ  
ラズト思考ス(三)獨伊ノ關係ハ成程緊密ナルモ伊太利ノ日  
本ニ對スル感情ハ獨以上ノモノアルヲ以テ御心配無用ト  
思考ス(四)別ニ文書ヲ要セザルモノト考フ伊太利大使ハ極  
メテ明白ニ伊太利政府ノ同意ヲ申出來レリ

河田大藏大臣 菅原顧問官ノ御質問ノ第五點ニ付テハ極力  
國民ノ負擔増加ヲ防グ様措置シ度キ所存ナリ

松浦顧問官 本條約ノ趣旨トスル所ハ日米關係ノ惡化ヲ防  
止スルニ在リ本官モ最モ之ヲ希望スル次第ナルガ不幸ニ  
シテ最惡ノ場合ガ起リタル時ニ處スベキ準備ハ之ヲ充分  
整ヘ置カレ度シ

潮顧問官 最惡ノ場合ニ於ケル國內情勢食糧問題等ニ付質  
問アリ企畫院總裁ヨリ回答ス



林顧問官 條約ノ主眼トスル點ハ對米關係ナルガ對蘇關係

ハ此ノ際最モ慎重ニ考慮スル必要アリト存ズ外務大臣ノ御説明ニ依レバ對蘇關係ニ付樂觀の考ヲ有シ居ラルルヤノ印象ヲ得タルガ本官ノ有スル情報ニ依レバ日蘇間並ニ獨蘇間ノ關係ノ將來ニ付相當惡キ材料モアリ例ヘバ昨年獨蘇不可侵條約ガ締結セラレタル際「スターリン」ガ共產黨員ニ與ヘタル訓示ノ内容ニ付自分ノ有スル確實ナル情報ニ依レバ「スターリン」ハ蘇聯ガ今度獨逸ト提携シタルハ西歐赤化ノ一ノ手段ナリ又之ニ依リ決シテ東進政策ヲ拋棄シタルモノニアラズ時期至ラバ積極的ニ出ル積リナリト述ベタル由ナルガ之等ノ點ニ付テハ外務大臣ハ如何御考ナリヤ

松岡外務大臣 日蘇國交調整ガ爾ク容易ナリトハ自分モ考ヘ居ラズ唯獨逸ハ蘇聯ニ對シテ相當ノ壓力ヲ加ヘ得ルコトハ之ヲ認メザルベカラズ自分ノ有スル確實ナル情報ニ依レバ昨年蘇聯ガ何故ニ英佛ヲ離レテ獨逸ト提携スルニ至レリヤト云フニ其ノ動機ノ最モ重要ナル一ハ「ヒトラー」ハ「スターリン」ニ對シテ若シ獨逸側ノ要求ガ容レラレザレバ獨逸ハ蘇聯ヲ攻撃スベシト申傳ヘタリト云フ

コトナリ之等ヨリ判斷シテ日蘇國交調整ニ獨逸ヲ斡旋セシムルコトハ相當有效ナリト考ヘ居レリ

深井顧問官 條約第三條ノ場合即チ日米戰爭ノ場合ニ獨逸ハ如何ナル軍事上ノ援助ヲ日本ニ與ヘ得ルヤ

松岡外務大臣 右ハ交渉ノ際ニモ論議セラレタルガ獨逸ハ第三條ノ事態發生以前ニ於テモ新兵器等ヲ日本ニ供給スベシト申シ居リ又日米戰爭勃發ノ場合ニハ大西洋方面ニ於テ米國ヲ牽制スルコトニナリ居レリ

東條陸軍大臣 蘇聯トノ諒解ノ下ニ優秀ナル軍用器材ノ供給ヲ受クルコトガ最モ重要ナル援助ナリ

及川海軍大臣 大体陸軍ト同様ナリ

深井顧問官 蘇聯ニ對スル關係ニ於テ獨逸ガ蘇聯ヲ牽制スルトハ如何ナル意味ナリヤ斯カル事ハ獨蘇不可侵條約ニ正面ヨリ反スルモノニアラズヤ

東條陸軍大臣 條約上ハ其ノ通ナルガ實際ノ軍事上ノ動キヨリ云ヘバ獨逸ハ蘇聯ヲ牽制シ得ルモノナリ現ニ獨逸ハ對英作戰ヲ行ヒツツアルモ其ノ陸軍ノ大部分ヲ機械化部隊ト共ニ國內ニ保有シ居リ之ガ軍事的ニハ蘇聯ヲ牽制シ居ル次第ナリ



深井顧問官 外務大臣ハ日獨間ノ相互信賴ト云フコトヲ申サレタルガ獨逸側ノ昨年ノ獨蘇不可侵條約締結ノ際ノ態度ハ不信ト云フノ外ナシ昨年九月阿部兼攝外相ガ本院ニ於テ外交經過ヲ説明シタル際當時ノ澤田外務次官ガ平沼内閣ニ於テ獨蘇協定ガ日獨防共協定ノ祕密協定ニ違反セル點ヲ指摘シテ獨逸ニ對シ抗議ヲ提出セル旨ヲ述ベタル處右抗議ノ結果ハ如何ナリ居ルヤ

松岡外務大臣 本大臣ノ聞ク所ニ依レバ右抗議ガ果シテ先方ニ通ジ居ルヤ否ヤ疑ハシク恐ラク獨逸側ヨリハ何等ノ回答ナカリシモノト思考ス

深井顧問官 對外關係ニハ感情ヲ交ヘルコトハ禁物ニシテ外交ハ飽ク迄現實的ニ行ハザルベカラズト思考スル處本條約ノ前文ニ萬邦ヲシテ各其ノ所ヲ得シムルトアルガ「ヒトラ」ノ常ニ云フ所ハ弱肉強食ハ自然ノ法則ナルカノ如キ感觸ヲ與フルガ獨逸側ハ果シテ此ノ前文ノ趣旨ヲ正當ニ理解シ居ルヤ

松岡外務大臣 我外交ノ使命ハ皇道ノ宣布ニ在リ利害得失ノミニ依リテ動クモノニアラズ弱肉強食ノ如キ思想ハ斷ジテ之ヲ排撃スベキモノト考フ

深井顧問官 日米戰爭ヲ不可避トスレバ此ノ際獨逸カ英米カ孰レカニ外交ノ重點ヲ置カザルベカラズト云フコトハ理解出來ルモ本條約締結ノ結果ハ或ハ日米戰爭ヲ早メルコトトナルヤモ知レズ總理大臣ハ最惡ノ場合ニ於ケル軍需品、一般物資ノ缺乏思想ノ惡化等ニ對處シテ之ヲ切抜ケ得ル自信アリヤ否ヤ覺悟ヲ承リ度シ

近衛總理大臣 本條約ノ根本ノ考ヘ方ハ元ヨリ日米ノ衝突ヲ回避スルニ在リ然レ共下手ニ出レバ米國ヲツケ上ラセル丈ナルニ依リ毅然タル態度ヲ示ス必要アリト思考ス萬一最惡ノ事態ヲ生ジタル場合ニハ政府ハ外交内政ヲ通ジテ非常ナル覺悟ヲ以テ施策セザルベカラズト考ヘ居レリ先日本大臣ガ參内本件ヲ上奏致シタル際 天皇陛下ニ於カセラレテモ非常ナル御決心ヲ有シ遊バサルコトヲ伺ヒ寔ニ恐懼感激ニ堪エズ本大臣トシテモ身命ヲ堵<sup>つ</sup>シテ本條約ノ遺憾ナキ運用ヲ期シ度シト考ヘ居レリ

二上顧問官 外交上、經濟上ニ付テハ大分質疑應答アリタルニ依リ自分ヨリハ條約其ノモノニ付疑問ノ點ヲ質シ度シ先形式ノ點ニ付テ茲ニ配布ノ書類ノ中何々ガ御諮詢ニナリ居ルヤ不明ナリ之等ノ文書ハ日本文ガ本文ナリヤ交

換文書ノ方モ内容ヨリ見レバ國際約束ト思ハルルガ之ニ付テハ御諮詢ナキ次第ナリヤ

松岡外務大臣 御諮詢ニ相成リ居ルハ條約案ノミニシテ他ハ參考ナリ條約ノ本文ハ日本文、獨逸文及伊太利文トナル筈ナルモ差當リ英文ノモノニ署名スルコトトナリ居レリ

松本條約局長 附屬ノ交換文書ハ條約ト同様ノ效力ヲ有スル所謂交換公文トハ内容竝ニ形式(例ヘバ番號ヲ附ス)ニ於テ異リ居リ所謂國際約束トハ認メ難キモ條約ノ解釋及松岡大臣ト「オット」大使トノ意見ノ一致シタル點ヲ記載セルモノニシテ極メテ重要ナル文書ト認メテ參考トシテ上奏案ニ附屬セシメタル次第ナリ

二上顧問官 差當リ英文ニ署名スルト云フガ如キハ異例ニシテ斯カル手續ガ許サルトハ思ハズ又交換文書ノ内容ハ國際約束ナルヲ以テ之亦御諮詢ノ客体トスベキモノト思考ス

原議長 之等形式ノ問題ニ付テハ後刻懇談會ヲ開催スルコトト致度シ

(審査委員會終了後政府側退席シ懇談會ヲ開キタル結

果條約案文ノミヲ御諮詢ノ客体トスルコト竝ニ差當リ條約案日本文ノミヲ審議シ英文ニ署名シ後日日獨伊文トスリ代フル點ハ默過スルコトニ決定セル趣ナリ)

二上顧問官 條約第三條ニ歐洲戰爭又ハ日支紛爭ニ參入シ居ラザルアルハ不正確ナル言現シ方ニテ歐洲戰爭又ハ日支紛爭ノ雙方ニ參入シ居ラザル一國ガ攻撃シタル場合ニハ第三條ガ發動スル様ニモ取レル處其ノ點如何次ニ混合專門委員會トハ先程ノ外務大臣ノ説明ニ依レバ軍事ト經濟トノ混合ノ様ニモ取レタルガ之ハ三國ノ混合ノ意味ニアラズヤ更ニ第五條ト第三條トヲ合セ考フルニ獨逸ハ蘇聯トノ間ニ不可侵條約ヲ有スルヲ以テ日本ガ蘇聯ヨリ攻撃ヲ受ケタル場合ニモ獨逸ハ蘇聯ヲ攻撃スルコト能ハズ之ニ反シテ獨逸ガ蘇聯ヨリ攻撃ヲ受ケタル場合ニハ日本ハ獨逸ヲ援助スル爲蘇聯ヲ攻撃セザルベカラズ從テ片務的ノ規定ナラズヤ

松岡外務大臣 二上顧問官ノ御質問ノ第一點ハ用語ノ問題ニテ實際ノ解釋上ハ疑義ヲ生ズル餘地ナシト思考ス第二點ハ勿論三國ノ混合委員會ノ意味ナリ第三條カ第五條ノ結果日本ニ片務的ナリトノ議論ハ本條ノ政治的意味ヲ沒

却シタルモノニシテ蘇聯が獨逸ヲ攻撃スルガ如キ場合ニハ獨蘇間ニ現存スル政治的狀態ハ重大ナル變革ヲ受クルモノニシテ斯カル場合ニ日本ノ處スル道ハ本條ノ規定ノ範圍外ナリト思考ス本條ノ趣旨ハ差當リ本條約ガ蘇聯ヲ目標トシ居ラザルコトヲ明示シタルモノナリ

眞野顧問官 質問ナシ

大島顧問官 大東亞ノ範圍ニ付テハ何等カ話合アリシヤ  
松岡外務大臣 勿論話合アリシコトハ本日午前中説明シタル通ナリ

小幡顧問官 日本ガ日支事變ヲ解決シ居ラザル此ノ際ニ當テ歐洲戰爭ニ米國ガ參戰シタル場合ニ獨伊ヲ援助スル義務ヲ負フコトハ極メテ重大ナル義務ヲ負フモノナルニ反シ日米ガ開戰スルト云フ可能性ハ少シト思ハル依テ本條約ハ極メテ片務的ナルモノトナラザルヤ

松岡外務大臣 米國ガ歐洲戰爭ニ參加スルヤ否ヤ又日米戰爭ガ勃發スルヤ否ヤハ雙方五分五分ノ可能性アリト見テ差支ナシ依テ片務的ノモノトハ思考セズ

竹越顧問官 本條約締結ノ結果最惡ノ場合ヲ生ジタルトキ獨逸ハ如何ナル援助ヲ日本ニ與ヘ得ルヤ又日本海軍ガ獨

伊ヲ援助スル場合ニハ如何ナル援助ヲ爲スヤ

松岡外務大臣 如何ナル援助ヲ與ヘ得ルヤ等ノ問題ハ混合委員會ニテ充分研究セザルベカラズ

鈴木審査委員長 本條約ノ成立ト否トニ拘ラズ日米戰爭ハ不可避ト考フルニ依リ米國海軍ノ擴張ヲ充分監視シテ之ニ相應スル準備ヲ怠ルベカラズ

及川海軍大臣 差當リ速戰即決デ米國ニ當レバ充分勝算アリ將來ニ付テハ着々各般ノ擴張計畫ヲ目論ミ居ル次第ナリ

石井顧問官 交換文書ノ最後ノモノヲ見ルニ我委任統治下ノ南洋群島ハ依然日本ノ屬地トスルモノニ對シ代償ヲ支拂フベキ旨記載シアリ之ニ對スル松岡大臣ノ説明ニ依レバ「ヴェルサイユ」條約ハ既ニ消滅シタルモノナルニ依リ南洋群島ハ日本ハ今尙軍事占領ヲ繼續セルモノニシテ從テ日本ハ獨逸ヨリ代償ヲ支拂ヒテ之ヲ讓受クル必要アリトノコトナル處委任統治地域ハ「ヴェルサイユ」條約ニ依テ五大國ニ讓渡セラレタルモノヲ日本ガ獲得シタルモノト見ルベク既ニ日本ノ屬地ナリト解スルヲ以テ正シト自分ハ思考スルニ依リ獨逸大使ノ口頭宣言ニハ自分ハ

贊意ヲ表シ兼ヌ尤モ本問題ハ御諮詢外ノ問題ナルヲ以テ  
唯御參考迄ニ自分ノ意見ヲ述ブルニ止メ置キタシ

松岡外務大臣 立博士等有力ナル國際法學者ノ意見ハ委任  
統治ハ領土ノ讓渡ニ非ズト爲シ居レルガ故ニ法理論ヲ別  
トシテ實際政治ノ問題トシテハ一應獨逸ヨリ何等カノ方  
法ニテ割讓ヲ受クル方可ナリト云フコトガ自分ノ三年以  
來ノ考ナリ聞ク所ニ依レバ三年位前ニ日本海軍ヨリ在伯  
林ノ海軍武官ヲ通ジテ獨側ニ對シ一定ノ代償ノ下ニ割讓  
方申出タル趣ナリ

石井顧問官 本問題ニ付テハ立博士トモ意見ヲ交換シタル  
コトアリ立博士ノ意見モ委任統治ガ領土ノ割讓ニアラズ  
ト云フ丈デ獨逸ガ五大國ニ讓渡シタル點ニ付テハ爭ナキ  
様思考ス從テ今更日本ガ獨逸ヨリ代償ヲ支拂ヒテ割讓ヲ  
受クルガ如キハ本官ノ同意シ難キ所ナリ

三土顧問官 今朝來ノ質疑應答ヲ聞イテ居レバ米國トノ戰  
爭トナリタル場合ノコトヲ主トシテ論議セラレ居ル様ナ  
ルモ本條約締結後直ニ米國ノ我國ニ對スル經濟壓迫ハ一  
層加重セラルルモノト思考ス其ノ場合ニ於ケル我國民生  
活ノ問題ハ重大ナル問題ナリト思ハルル處之二付テハ充

分ナル用意出來居レリヤ又日本人ハ兎角此ノ種ノ條約ガ  
出來ルト獨逸カ、ブレトナリ反米運動等ヲ試ムルモノ出デ  
來ル惧アリ斯カル點ハ嚴ニ取締リ頂キタシ

星野企畫院總裁 國民生活ノ問題ハ政府トシテ最モ關心ヲ  
有シ居リ之ガ對策ニ付テハ萬遺憾ナキヲ期シタシ

近衛內閣總理大臣 排米運動ヲ取締ルコトハ極メテ同感ナ  
レバ嚴重實施致シタシト存ズ

午後七時三十分政府側退場

別紙甲號

日獨伊三國條約締結ニ關スル件

(近衛總理大臣樞密院委員會席上ノ挨拶文案)

御承知ノ通り支那事變ハ未ダ解決セザルニ當リ、近來米國  
ノ我國ニ對スル態度ハ相當強硬ヲ加ヘテ居リマスガ米國ノ  
態度ガ硬化スルニ連レマシテ重慶政府其ノ他日本ニ敵意ヲ  
有スル各國政府ノ態度ニモ影響シ我國ノ國際的地位ハ益々  
困難トナリ前途誠ニ憂慮ニ堪ヘザル次第アリマス。此ノ  
難局ヲ打開致シマス爲ニハ我國ノ國際の立場ヲ強化スルコ  
トガ必要デアリマスガ其ノ方法ハ現在ノ環境ニ於テ我方ト

利益ノ一致スル國家トノ提携ヲ強化スルコト以外ニハナイ  
ト思ヒマス。然ルニ獨伊ハ米國ノ參戰ヲ防止スルコトヲ希  
望シ、我國ハ米國トノ危機回避ヲ希望スル點ニ於テ利害ノ  
一致ヲ見テ居ルノデアリマス。依テ政府ハ組閣以來銳意此  
ノ方向ニ向ツテ努力ヲ續ケテ來タノデアリマスガ、最近ニ  
至リ遂ニ御手許ニ差上ゲマシタルガ如キ條約案ニ依リ我國  
ガ今次歐洲戰爭ニ參加スルコトナクシテ右兩國トノ提携ヲ  
強化シ得ルノ機運ニ達シマシタノデ右ニ基キ兩國ト條約締  
結方御裁可ヲ仰ギ度イト存ジテ居リマス。而シテ本案件ハ  
固ヨリ平和ヲ目的トスルモノデアリマスガ最惡ノ事態ノ發  
生ヲモ覺悟スル必要ガアリマスノデ我國運ノ消長ニ關スル  
未曾有ノ重大案件ト申スベキデアリマス。依ツテ極メテ慎  
重ニ審議ヲ盡シ御決定ヲ仰ギ度イト考ヘ居リマス次第デア  
リマス。本案件ノ本日迄ノ經過竝ニ獨、伊兩國トノ間ニ締  
結セントスル條約案ニ付キマシテハ之ヨリ外務大臣ヨリ詳  
細説明致シマス。

#### 別紙乙號

#### 日獨伊三國條約締結ニ關スル外務大臣説明案

#### 甲、經過

本大臣ハ七月下旬、現內閣ガ成立致シマシテ以來、獨伊  
トノ政治的提携ヲ強化シタイト思ヒマシタガ、當時、獨  
逸ハ佛蘭西ヲ席捲シ、英本國ノ如キモ、旬日ヲ出デズシ  
テ、容易ニ征服シ得ルト云フヤウナ氣勢デゴザリマシテ、  
獨逸ニ於ケル、我國トノ提携熱ハ一般ニ極メテ低カツタ  
ノデアリマス。然シナガラ獨伊ハ、今英本國ヲ屈服サス  
コトガ出來マシテモ、其ノ後ニ於テ、英帝國全部ノ崩壞  
戰ハ事シカク容易デハゴザリマセヌ上ニ、更ニ米國ト英  
帝國ノ殘存勢力トガ結合シテ出來ルトコロノアングロ・  
サクソン王國又ハブロツクトモ云フベキモノト今次ノ戰  
爭ニ依ツテ強大ヲ加ヘタルソ聯邦ト云フニ大勢力ト對抗  
シナケレバナラヌコトハ明瞭デアリマス。其ノ場合地理  
的ニ惠マレタ地位ヲ占メ且世界無比ノ國體ノ下ニ優秀ナ  
ル民族ヲ持ツ我國ノ力ハ偉大ナルモノガアリマスノミナ  
ラズ、現在ト雖モ或意味ニ於キマシテ皇國ハ實ニ世界ノ  
天秤ヲ左ニデモ右ニデモ上下サス丈ノ力ヲ持ツテ居ルト  
云フノガ不肖本大臣ノ抱ケル見透シト見解デアリマス。  
ソウカト申シマシテモ總理大臣ノ云ハレタ様ニ日本國際

情勢ハ極メテ困難ナノデアリマス。而シテ此ノ事位ハヒトラ―總統及少クトモ其ノ周圍ノ者ダケハ認識シテ居ルデアラウト想像シマシタ、否ソノ容子が多少窺ハレタノデゴザリマス。彼等ハ當時ニ於テモ我國トノ提携ニ相當ノ熱意ヲ持ツテ居タヤウデアリマス。根本ニカヤウナル考ヲ持ツテ居リマシタガ故ニ私ハ諸般ノ情況上一應ハ急ギタイト云フ心持ノ中ニモ固ヨリ下手ニ出ル要モナク、又已ムヲ得ナケレバ英本國屈服後トナツテモカマワヌ、若シサウナツタナラバ、愈々以テ緩ツクリト構エヤウト決意致シテ居ツタノデアリマス。何レニ致シマシテモ、當時焦ルト見ラレルヤウナ手ヲ我方カラ出シマスルコトハ外交上禁物デアツタノデゴザリマス。

我が獨自ノ立場ヲ堅持シ、必ズシモ獨伊ト結ブノ要ナシ、若シソレガ我國ノ存立ト使命遂行上、必要又ハ便利デアルナラバ、米ト結び、或ハ英ヲ救フコトヲモ敢ヘテ辭セヌト云フ姿勢サヘ示シテカカラナケレバナラヌト信、ジタノデアリマス。ソレカラ、何ヨリモ先ヅ獨伊始メ世界ニ向ツテ本件ニ關シ斥候戰ヲ始メナケレバナラナカツタノデアリマス。本大臣ハ就任前後ヨリ遲滯ナク之ヲ開始シ、

少シク容子が知レマシタノデ、一步ヲ進メ本大臣ハ八月一日オット大使ヲ御茶ニ招キテ、樞軸強化ガ我朝野ヲ通ジテノ傾向ナルハ貴大使モ御承知ノ通りデアルガ、ソレガ物ニナルニハマダマダ容易デハナイ、廟議モ未ダ具体的ニ確定シテハ居ナイト云フ趣旨ヲ告ゲマシタ上、支那事變ハ日本獨力ニテ其内片付ケル考デアルカラ、別ニ獨逸ニ於テ意ヲ煩ハサレナイデヨロシイト申述ベマシテ、一應大使ノ仲介セントスル口吻ヲ押ヘ、我建國以來傳統タル八紘一字ノ大理想ヲ實現セントスル決意ノ眞劍ナル事ト、先ヅ之ヲ大東亞共榮圈ニ於テ試ミントスルモノナル旨ヲ説キ、次デ、タトヘ英本國ガ間モナク屈スルトモ、ソレハ大英帝國崩壞ノホンノ初マリナルニ止マリ、決シテ終ニアラザル所以ヲ申聞ケ(大使モ同様ノ事ヲ自ラ進ンデ申シテ居リマシタ)右二ツノ大局の觀點ヨリシテ、獨モ亦日本トノ提携ノ可否ヲ決スベキデアルト結論シ(一)大東亞圈ニ對スル前述ノ日本ノ理想實現ニ付獨逸ハ如何ナル態度ヲ執ルカ、如何ナル事ヲ以テ日本ヲ助ケ得ルカ又助ケル考ナルカ、又コノ圈内ニ於テ獨逸ハ何ヲ求ムルカ、(二)日ソ關係ニ就キ獨逸ハ如何ニ考フルカ、又何

ヲナシ得ルカ、(三)日米關係ニ就キ如何ニ考フルカ又何ヲナシ得ルカトテ、以上三項ニ關スル本大臣ノ質問ヲ至急ヒトラー總統トリッペンツロップ外相ニ架電シテ、其返事ヲ得ラレタシト告ゲマシタ。其ノ際自分ハ大使ニ太平洋問題ノ重要性ヲ述べ日米ガ爭フカ否カ二人類ノ將來ガカカツテ居ルコトヲ説イタノデアリマス。オット大使ハ獨逸ハ米國ノ參戰ヲ希望セズ戰後ハ米國トノ關係改善ニ努メ度イト思フト申シテ居リマシタ。

右ニ對スル返事ハ容易ナラズトシテ、獨大使ハ澁ツテ居リマシテ、私モ亦容易ニソノ返事ハ來ナイデアラウト豫想シマシタトコロ、果シテ來マセンデシタ。(尙八月十七日在京伊太利大使ヲ招致致シマシテオットニ對スルト同様ノ質問ヲ發シテ置キマシタ。)私ハ態ト催促セズニ放ツテ置キマシタ。然ルニ、リッペンツロップ外相ハ其東洋問題ニ關スル懷刀デアルト言ハレテ居リマスル、ハインリッヒ・スターマー總領事ヲ公使ニ昇任セシメタ上、八月二十三日ベルリン出發、急遽モスコワ經テ、本邦ニ送ツタノデアリマス。同公使ハ九月七日朝東京ニ着キマシタノデアリマスガ、本大臣ハ別ニ急イデ會ヒタイ態

度ハ示サナカッタノデアリマス。トコロガ九日先方ヨリ會見ヲ申出デマシタノデ、人目ヲ避クル爲同日私ノ私邸デ、同公使及オット大使ト會見致シマシタ。ソレカラ十日二度目ノ會見ヲ遂ゲ九月十一日三度目ノ會見ニ於テ一案ヲ得、更ニ兩國間ニ意見ヲ交換シタル結果條約案ノ要綱ヲ作成致シマシテ九月十九日御前會議ヲ開イテ決定ヲ仰ギ爾後更ニ右要綱ニ基イテ交渉ヲ進メ今般條約案ノ妥結ニ達シタ次第デ御座イマス。

## 乙、條約案ノ説明

前文ニ付テハ別ニ御説明スル必要ハナカラウカト存ジマスルガ我建國ノ御詔書ノ中ニアリマスル八紘一字、即チ總テノ國民、民族ガ各其ノ所ヲ得ルト云フ大精神ニ基キ余程辭句ヲ練ツタモノデ御座イマス。

第一條ニ日本ハ歐洲ニ於ケル新秩序建設ニ對スル獨伊ノ指導的地位ヲ認メ且之ヲ尊重ストアリマスガ、當方デハ當初アフリカニ於ケル新秩序建設ヲ先方ガ持出スカト思ツタノデゴザリマスガ、先方ガ之ヲ持チ出サナカッタカラ、單ニ歐洲ニ於ケル新秩序建設ニ對スル地位承認ニ限ツタ次第デアリマス。



第二條ノ「大東亞ニ於ケル新秩序建設」ト云フ「大東亞」ノ意味ハ只今ノトコロ佛印、タイ國、ビルマ、海峽植民地、蘭印ヨリニューギニヤ、ニューカレドニヤ等ヲ含ムオセアニアノ島嶼ヲ含ム意味デアリマシテ、此ノコトハ此際ノ事デモゴザリマスシ、ソレニ東亞ノ形勢如何ト世界情勢ノ推移ニヨリ漸次其範圍ニ變更ノアリマスコトト豫想サレルコトデモゴザリマスノデ、先方ヘハ態ト大擲ミニ話シ、濠洲トニュージーランド及其以南ハ今ノ處這入ラヌガ、時ト共ニ自然範圍ハ擴ガルナラン、ト申聞ケ、印度ニハ言及ヲ避ケマシタ。先方モ別ニ細カクハ尋ネズシテ本大臣ノ所述ニ同意ノ意ヲ表シマシタ。

是ニ對シ獨逸ハ右區域ニ於ケル日本ノ政治的指導權ハ認ムルガ、經濟的ノ通商、企業、原料取得ト云フガ如キコトニ就テハ日本ニ於テモ出來得ル限り便宜ヲ與ヘテ貫ヒタイト申シテ居ルノデアリマス。日本側モ亦同地域ノ經濟的開發ニハ大ニ獨伊ノ協力ヲ得ンコトヲ期待スルモノデアルト應酬シテ置キマシタ。

第三條ノ中「現ニ歐洲戰爭又ハ日支紛爭ニ參入シ居ラザル一國ニ依リ攻撃セラレタルトキハ云々」ノ一國ト申ス

ノハ暗ニ米國ヲ主トシテ指シタノデアリマシテ、其ノ一國ニ依リ攻撃セラレタル場合ニハ自働的ニ參戰義務ガ發スル次第デアリマシテ、則チ我國ハ獨伊ト米國ヲ對照<sup>(象)</sup>トスル軍事同盟ニ這入ルノデアリマス。又交換文書中ニ攻撃ヲ受ケタカドウカハ三國間デ協議シタ上デ決メルコトニナツテ居リ、參戰義務ガ發生シタカドウカハ自主的ニ決定スル様ニナツテ居リマス。

第四條ハ本條約實施ノ爲日獨伊三國委員ヨリ成ル混合專門委員會ヲ遲滯ナク開催スベキ旨ヲ規定シテ居リマス。之等ノ委員會ハ本條約實施ノ軍事的、經濟的方法ヲ講究スル次第デアリマス。

第五條ハ本條約ガ蘇聯ニ向ケラレタルモノニ非ザルコトヲ規定シタモノデアリマス、ガ、實ハソ聯ハ獨伊對英佛戰ニハ參加シテ居ナイ建前トナツテ居ルノデ、或ハ第三條ノ所謂「一國」ニ相當スルモノデハアルマイカトノ疑惑ヲ生ズル處モアリマスシ、旁々日獨伊ガ世界新秩序ヲ造ル上ニ於テ蘇聯ヲ敵ニ廻ス懸念ノナイコトヲ明カニシ、特ニ獨逸ト蘇聯トノ間ニポーランド始メ、歐洲ニ於ケル現在ノ取極又ハ見解若クハ或種ノ事態ヲ存セル、ソノ事



實ニ些カモ影響スル所ノナイコトヲ明カニシテ、蘇聯ヲ安心サセ、之ニ依リ米蘇ノ接近ヲ防グノ目的ニ資シヤウトスル趣旨デアリマス。

### 丙、結 言

今回ノ對獨交渉ノ基礎ハ平沼内閣時代ノ夫レト全ク異ツテ居リマス。即チ獨逸側モ日本ノ歐洲戰爭參加ノ必要ナシト言明シテ居ル次第デアリマシテ、獨逸ハ米國ノ參戰ヲ、日本ハ日米衝突ヲ、回避スル事ヲ共通目的トシタノデアリマス。從テ皇國政府ガ從來採ツテ來マシタ不介入ノ方針ハ、將來本條約ニヨリ影響セラレルコトアルベシト云フ豫想付ニテ、一應ハ繼續セラレル次第デアリマス。米國ハ「カナダ」トノ共同防衛ヲ決定スルヤ、間モナク日米間ノ些細ナ問題ニ迄、殆ンド堪ヘ難イト思ヘルガ如キ態度ヲ以テ臨ンデ來マシタノデ、本大臣ハ已ムナク此程嚴肅ニ米大統領及國務長官ノ反省ヲ促シタヤウナ次第デアリマス。

最近ノ動キニ就キ洞察シマスルニ、米國ハ太平洋及ビ南洋方面ニ亘リテ、已ニ施シ若クハ現ニ施シツツアル軍事施設ニ加フルニ此ノ際飛躍のニ且取急イデ濠洲、新西蘭、

印度、ビルマ其ノ他ノ南方ニ於ケル英領ノ必要地點ニ、有力ナル軍事根據地ヲ獲得シ、以テ日本包圍ノ陣形ヲ整ヘントシテ居ルノデハアルマイカト、カナダトノ前述共同防衛ニ關スル協定成立ガ報ゼラレマシタル時、本大臣ハ已ニ想像シタノデゴザリマスガ、其後間モナク果然英帝國及ビ濠洲政府ト米國トノ間ニ、協議進行中ノ旨ノ、可ナリ信ズルニ足ルト想ハルル、新聞報道サヘ傳ヘラルルニ至ツタノデアリマス。又段々ト支那事變ニテ日本ガ消耗戰ニ惱ンデ、國力ガ著シク減殺セラレタト見テ恫喝の言辭ヲ弄スルノデハアルマイカト想像セラルル廉モゴザリマスガ、ソノ理由ノ那邊ニ在ルニセヨ、日米國交ハ最早禮讓又ハ親善希求等ノ態度ヲ以テ改善スルノ餘地ハ殆ンドナイト思ハレマスノミナラズ、却ツテ惡化サス丈ノ事デハアルマイカト懸念セラルル有様ニナツテ參リマシタ。若シ幾分ニテモ之ヲ改善シ又ハ此ノ上ノ惡化ヲ防グ手段アリトスレバ唯毅然タル態度ヲ採ルト云フ事シカ、此ノ際ノ措置トシテハ、殘ツテ居ナイト存ジマス。苟モ然リトスレバ、ソノ毅然タル態度ヲ強ムル爲ニ一國ニテモ多クノ國ト堅ク提携シ、且ソノ事實ヲ一日ニテモ、速

ニ中外ニ宣明周知セシムルコトニ依リテ、米國ニ對抗スル事ガ、外交上喫緊事デアルト信スルノデアリマス。然シ本大臣ハカカル措置ノ反響乃至效果ヲ注視シツツ尙米トノ國交ヲ轉換スルノ機會ハ、之ヲ見逃サナイ用意ヲ常ニ怠ラナイ覺悟デゴザリマス、唯ソレニシテモ、一應ハ非常ナ堅イ決心ヲ以テ毅然對抗ノ態度ヲ、中外ニ向ツテ一點疑ヒヲ容ルル餘地ノナイマデニ、明確ニ示サナケレバナリマセヌ。此ノ點ハ本條約締結ニ伴フ最重要ナル點デアリマスカラ、最後ニ之ヲ反覆シテ置キマス。



143  
昭和15年9月26日

日独伊三国同盟条約締結に関する枢密院本会  
議の議事概要

樞密院本會議議事概要

九月二十六日午後九時四十五分開會

宮中東溜ノ間ニ於テ

出席者

金子顧問官及田中顧問官ヲ除ク全顧問官出席

全閣僚出席

説明員ハ審査委員會ト同様

天皇陛下九時四十五分出御

原議長開會ヲ宣ス

鈴木副議長審査委員長トシテ委員會ノ經過ヲ報告シ本條約締結ニ伴フ政府ノ施策萬全ヲ期スルコト對英米關係ニ於テ無用ノ刺戟ヲ避クルコト等ノ希望ヲ附加シタル審査報告ヲ朗讀ス

石井顧問官

本案ニ賛成ナルモ近代ノ同盟ハ古代ノ同盟トハ異リ利害關係ノ結合ニ過ギザルモノナリ歴史ノ教フル所ニ依レバ同盟國間ノ關係ハ頗ル難シキモノナリ殊ニ獨逸ハ最モ惡キ同盟國ニシテ獨逸ト同盟ヲ結ビタル國ハ凡テ不慮ノ災難ヲ被リ居レリ「ビスマルク」ハ嘗テ同盟ニハ常ニ騎馬武者ト驚馬トアリト云ヘリ事實獨逸ガ同盟國タル土、埃ヲ遇スルコト恰モ騎馬武者ガ驚馬ヲ操ルガ如ク彼等ノ獨立性ハ完全ニ失ハレタリ或ハ「ナチス」ハ帝制獨逸トハ異ルト云フ論ヲ爲スモノモアルナランモ「ヒトラー」モ國際條約ヲ以テ一片ノ紙片ト見居ルコトハ昨年八月日獨

間ニ防共協定アルニ拘ラズ獨蘇不可侵條約ヲ結ビタルコトニ依リテモ解ル通ナリ

次ニ伊太利ハ如何伊太利ハ「マキアベリー」ヲ生ミタル國ニシテ獨逸ト同盟ヲ結ンデ之ヲ無視シタル獨逸以上ノ強者ナリ今度此ノ獨伊兩國ト同盟ヲ結ブ次第ナルヲ以テ條約ノ運用ニ付テハ充分心セザルベカラズト思考ス然レ共今日ノ日獨伊ノ如ク利害關係ノ全ク一致セル國ハ古今東西ヲ通ジテ稀ニシテ此ノ三國ガ結合スルコトハ蓋シ自然ノ勢ト云フベク此ノ見地ヨリ本條約ノ締結ハ國策トシテ當ヲ得タルモノト思考ス唯之ガ運用ニハ充分注意スル必要アルベシ

議長贊否ヲ起立ニ問ヒ全顧問官起立滿場一致可決時二午後十時十分ナリ

144 昭和15年9月26日

在独国来栖大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

# 日独伊三国同盟条約の締結に關し独伊の意見 一致について

第一二五一號(至急、館長符號扱)

往電第一二三三號ニ關シ

二十五日同一「ソース」ヨリ得タル情報左ノ通り

(一)日獨伊樞軸強化問題ノ打合ニ於テハ獨伊間ニ完全ナル意見ノ一致ヲ見「リ」ハ満足シテ歸獨セリ「ヒ」總統ハ「リ」外相ヲシテ本件ノ世界史的意義ニ付特ニ「ム」首相ノ注意ヲ喚起セシメタルカ「ム」ハ「リ」ヨリ話ノ進捗振ヲ聞キタル際事突然ナリシヲ以テ驚キタルモ暫ク默考ノ上直ニ之ニ同意セル趣ナリ

(二)西班牙トノ軍事同盟條約ニ關シテモ獨伊ノ意見一致シニ十六日「チアノ」來獨シ二十七日同條約ノ調印行ハルル筈ナリ右ハ西班牙ノ參戰ト關聯シ同國ハ遠カラス參戰スルコトトナルヘキモ獨伊ノ狙フ所ハ西ノ兵力ヨリモ西ノ樞軸接近カ獨伊對南米諸國トノ關係改善延テハ米ノ汎米戰線統一阻止ニ役立ツヘキ點ニ在ルヘシ尤モ獨トシテハ西トノ軍事同盟ハ西ノ參戰實現スル迄餘リ宣傳セサル方針ノ如シ

ベルリン 9月26日前發  
本省 9月26日夜着

## 二 日独伊三国同盟

(三)日獨伊條約成立ノ際ノ對蘇關係ニ關スル打合ノ爲目下

「シューレンベルグ」大使歸獨中ナリ獨側ハ本件條約カ  
蘇聯トノ戰爭ヲ豫想スルモノニアラサルコトヲ特ニ強調  
スル様國內新聞ヲ指導スル方針ナルカ他面牽制ノ意味ヲ  
以テ東方ニ兵力ヲ集中シ居レリ

(四)對英空襲ハ益々強化セラルル方針ニテ二十五日頃ヨリ使  
用スヘキ機數及爆彈ハ從來トハ比較ニナラヌ程ニテ英國  
民ノ「モラル」ニ與フル影響ハ想像以上ノモノアルヘシ

(冒頭往電通り取扱ニ御注意アリタシ)

伊ヘ轉電セリ



145 昭和15年9月27日 在独国来栖大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

### 日独伊三国同盟条約の調印完了報告

ベルリン 9月27日後発  
本省 9月28日前着

第一二五九號(大至急)

日獨伊三國條約二十七日午後一時三十分總統官邸ニ於テ本  
使「リツペントロップ」及「チアノ」兩外相ニ於テ滯リナ

ク調印ヲ了セリ



146 昭和15年9月27日 調印

### 日独伊三国同盟条約

付記一 昭和十五年九月二十七日付松岡外務大臣より

在本邦オット独国大使宛公信条二機密第一三

三号

日英間武力紛争發生時の独国の援助に關する

日独交換公文往翰

二 昭和十五年九月二十七日付松岡外務大臣より

在本邦オット独国大使宛公信条二機密第一三

四号

南洋委任統治に關する日独交換公文往翰

三 昭和十五年九月二十七日付在本邦オット独国

大使より松岡外務大臣宛公信G一〇〇〇号

条約の運用實施に關する日独交換公文往翰

文

四 昭和十五年九月二十七日付松岡外務大臣より

在本邦オット独国大使宛公信条二機密第一三五号

右來翰内容を了承する日独交換公文往翰

### 日本國、獨逸國及伊太利國間三國條約

大日本帝國政府、獨逸國政府及伊太利國政府ハ萬邦ヲシテ各其ノ所ヲ得シムルヲ以テ恆久平和ノ先決要件ナリト認メタルニ依リ大東亞及歐洲ノ地域ニ於テ各其ノ地域ニ於ケル當該民族ノ共存共榮ノ實ヲ舉グルニ足ルベキ新秩序ヲ建設シ且之ヲ維持センコトヲ根本義ト爲シ右地域ニ於テ此ノ趣旨ニ據レル努力ニ付相互ニ提携シ且協力スルコトニ決意セリ而シテ三國政府ハ更ニ世界到ル所ニ於テ同様ノ努力ヲ爲サントスル諸國ニ對シ協力ヲ咨マザルモノニシテ斯クシテ世界平和ニ對スル三國終局ノ抱負ヲ實現センコトヲ欲ス依テ日本國政府、獨逸國政府及伊太利國政府ハ左ノ通協定セリ

### 第一條

日本國ハ獨逸國及伊太利國ノ歐洲ニ於ケル新秩序建設ニ關シ指導の地位ヲ認メ且之ヲ尊重ス

### 第二條

獨逸國及伊太利國ハ日本國ノ大東亞ニ於ケル新秩序建設ニ關シ指導の地位ヲ認メ且之ヲ尊重ス

### 第三條

日本國、獨逸國及伊太利國ハ前記ノ方針ニ基ク努力ニ付相互ニ協力スベキコトヲ約ス更ニ三締約國中何レカノ一國ガ現ニ歐洲戰爭又ハ日支紛爭ニ參入シ居ラザル一國ニ依テ攻撃セラレタルトキハ三國ハ有ラユル政治的、經濟的及軍事的方法ニ依リ相互ニ援助スベキコトヲ約ス

### 第四條

本條約實施ノ爲各日本國政府、獨逸國政府及伊太利國政府ニ依リ任命セラルベキ委員ヨリ成ル混合專門委員會ハ遲滞ナク開催セラルベキモトス

### 第五條

日本國、獨逸國及伊太利國ハ前記諸條項ガ三締約國ノ各ト「ソヴィエト」聯邦トノ間ニ現存スル政治的狀態ニ何等ノ影響ヲモ及ボサザルモノナルコトヲ確認ス

### 第六條

本條約ハ署名ト同時ニ實施セラルベク、實施ノ日ヨリ十年

間有效トス

右期間満了前適當ナル時期ニ於テ締約國中ノ一國ノ要求ニ基キ締約國ハ本條約ノ更新ニ關シ協議スベシ

右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本條約ニ署名調印セリ

昭和十五年九月二十七日即チ千九百四十年、「ファシスト」曆十八年九月二十七日「ベルリン」ニ於テ本書三通ヲ作成ス

來栖 三郎

〔印〕

Joachim von Ribbentrop〔印〕

Ciano

〔印〕

（付記一）

條二機密第一三三號

以書翰啓上致候陳者本大臣ハ日本國政府ハ獨逸國及伊太利國政府ト均シク現在ノ歐洲戰爭ガ其ノ範圍及規模ニ於テ能フ限り制限セラレ且急速ニ終結センコトヲ熱望スル旨竝ニ日本國政府ニ於テモ右目的ニ對シ有ラウル努力ヲ惜マザルベキ旨ヲ通報スルノ光榮ヲ有シ候

然レドモ大東亞及其ノ他ノ地方ニ於ケル現状ニ鑑ミ日本國

政府ハ日英間ニ何等武力紛爭發生ノ危險ナキコトヲ現下ノ情勢ニ於テ確信スルコト能ハザル次第ニ有之從テ日本國政府ハ獨逸國政府ニ對シ右可能性ニ付注意ヲ喚起スルト共ニ日本國政府ハ右ノ如キ場合ニ獨逸國ガ其ノ有スル一切ノ手段ニ依リ日本國ヲ援助スル爲最善ヲ盡サルコトヲ確信スル旨陳述スルモノニ有之候

本大臣ハ茲ニ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具

昭和十五年九月二十七日

外務大臣 松岡 洋右

在京獨逸國大使

「ゲネラル、オット」閣下

編 注 本往翰の内容は同日付在本邦オット独国大使より松岡

外務大臣宛公信 G 一〇〇一号により了承された。

（付記二）

條二機密第一三四號

以書翰啓上致候陳者本大臣ハ閣下ガ獨逸國政府ノ爲ニ爲サ

レタル左記口頭宣言ヲ確認セラレンコトヲ希望致候

「獨逸國政府ハ南洋ニ於テ現ニ日本國ノ委任統治下ニ在  
ル舊獨逸國殖民地ガ引續キ日本國ノ屬地タルコトニ同意  
スベク之ガ爲獨逸國ハ何等カノ代償ヲ受クルモノトス南  
洋ニ於ケル其ノ他ノ舊殖民地ニ關シテハ右殖民地ハ現歐  
洲戰爭ヲ終結スル平和ノ成立ト共ニ自働的ニ獨逸國ニ復  
歸スベシ然ル後獨逸國政府ハ出來得ル限り日本國ニ有利  
ニ右殖民地ヲ有償ニテ處分スル目的ヲ以テ友好的精神ニ  
基キ日本國政府ト協議スルノ用意アリ」

本大臣ハ茲ニ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具

昭和十五年九月二十七日

外務大臣 松岡 洋右

在京獨逸國大使

「ゲネラル、オット」閣下

編 注 本往翰の内容は同日付在本邦オット独國大使より松岡

外務大臣宛公信G一〇〇二号により了承された。

(付記三)

在京獨逸國大使ヨリ外務大臣宛來翰

(G、一〇〇〇號)

(絕對極秘)

以書翰啓上致候陳者本月九日東京ニ於テ開始セラレタル吾  
人ノ會談ノ結果幸ニシテ三國條約ノ締結ニ到達セントスル  
ニ當リ閣下ガ會談中終始最モ寛容ニシテ且友好的ナル精神  
ヲ以テ主要ナル役割ヲ果サレタルコトニ對シ閣下ニ向テ深  
甚ナル謝意ヲ表明スルコトハ「スターマー」公使及本使ノ  
最モ眞摯ナル希望ニ有之候

吾人ハ此ノ機會ニ於テ閣下ト吾人トノ會談ニ於テ反覆セラ  
レタル若干ノ主要事項ニ付再ビ本書翰ニ於テ左記ノ通陳述  
セント欲スルモノニ有之候

獨逸國政府ハ締約國ハ夫々大東亞及歐洲ニ於ケル新秩序  
建設ニ指導的地位ヲ占ムルヲ任務トスル世界歴史ニ於ケ  
ル新ナル且決定的ナル段階ニ入ラントスルモノナルコト  
ヲ確信ス

將來長期ニ亘リ締約國ノ利害關係ガ一致スベキ事實及締  
約國ノ絶對的相互信頼ハ條約ノ確乎タル基礎ヲ成スモノ  
トス

獨逸國政府ハ條約實施ニ關スル技術の細目ハ困難ナク決定セラルベク條約實施中ニ發生スベキ有ラユル事態ヲ豫想スルハ條約ノ重要性ト一致セズ且實際上不可能ナルコトヲ確信ス右事態ハ發生スル毎ニ相互信頼及互助ノ精神ニ基キテノミ處理セラルベシ

條約第四條ニ規定セラレタル専門委員會ノ決定ハ夫々關係各國政府ノ承認ヲ經ルニ非ザレバ實施セラルコトナカルベシ

一締約國ガ條約第三條ノ意義ニ於テ攻撃セラレタリヤ否ヤハ三締約國間ノ協議ニ依リ決定セラルベキコト勿論トス

條約ノ意圖スル所ニ反シ日本國ガ未ダ歐洲戰爭又ハ支那事變ニ參加シ居ラザル一國ニ依リ攻撃セラレタル場合ニハ獨逸國ハ日本國ニ全面的の支持ヲ與ヘ且有ラユル軍事的及經濟的手段ヲ以テ日本國ヲ援助スベキコト當然ナリト思考ス

日本國ト「ソヴィエト」聯邦トノ關係ニ關シテハ獨逸國ハ其ノ力ノ及ブ限り友好的の了解ヲ増進スルニ努ムベク且何時ニテモ右目的ノ爲周旋ノ勞ヲ執ルベシ

獨逸國ハ日本國ヲシテ大東亞ニ於ケル新秩序ノ建設ヲ容易ナラシムルト共ニ如何ナル危局ニ對シテモ充分備フル所アラシムル爲自國ノ工業能力竝ニ其ノ他ノ技術的及物質的資源ヲ能フ限り日本國ノ爲ニ使用スベシ更ニ獨逸國及日本國ハ有ラユル方法ニ依リ其ノ必要トスル原料品及礦物(油ヲ含ム)ヲ獲得スル爲相互ニ援助スベキコトヲ約ス

獨逸國外務大臣ハ前記諸事項ニ關聯シ伊太利國ノ援助及協力ガ要請セラルルトキハ伊太利國ハ勿論獨逸國及日本國ト同調スベキコトヲ絕對ニ信ズルモノナリ

本使ハ右陳述ヲ特別代表者「スターマー」公使ニ依リ親シク齎サレ且本國政府ヨリ繰返シ本使ニ傳達セラレタル獨逸國外務大臣ノ見解トシテ閣下ニ提示スルモノニ有之候  
本使ハ茲ニ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百四十年九月二十七日東京ニ於テ

オット

大日本帝國外務大臣

松岡 洋右閣下



編注 本来翰の原文(独文)は省略。

(付記四)

條二機密第一三五號

以書翰啓上致候陳者本大臣ハ本日附貴翰第G一〇〇〇號ヲ  
受領スルノ光榮ヲ有スルト共ニ右貴翰ノ内容ヲ了承スルヲ  
欣幸トスルモノニ有之候

本大臣ハ茲ニ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具

昭和十五年九月二十七日

外務大臣 松岡 洋右

在京獨逸國大使

「ゲネラル、オット」閣下



147 昭和15年9月27日

日独伊三国同盟条約の締結に関する詔書

付記 昭和十五年九月二十七日

右条約の締結に関する告諭

詔書

大義ヲ八紘ニ宣揚シ坤輿ヲ一宇タラシムルハ實ニ皇祖皇宗  
ノ大訓ニシテ朕ガ夙夜簪々措カザル所ナリ而シテ今ヤ世局  
ハ其ノ騷亂底止スル所ヲ知ラズ人類ノ蒙ルベキ禍患亦將ニ  
測ルベカラザルモノアラントス朕ハ禍亂ノ戡定平和ノ克復  
ノ一日モ速ナランコトニ軫念極メテ切ナリ乃チ政府ニ命ジ  
テ帝國ト其ノ意圖ヲ同ジクスル獨伊兩國トノ提攜協力ヲ議  
セシメ茲ニ三國間ニ於ケル條約ノ成立ヲ見タルハ朕ノ深ク  
擇ブ所ナリ

惟フニ萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ  
堵ニ安ンゼシムルハ曠古ノ大業ニシテ前途甚ダ遼遠ナリ爾  
臣民益々國體ノ觀念ヲ明徴ニシ深ク謀リ遠ク慮リ協心戮力  
非常ノ時局ヲ克服シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼セヨ

御名御璽

昭和十五年九月二十七日

内閣總理大臣公爵 近衛 文麿

陸 軍 大 臣 東條 英機

外務大臣兼拓務大臣 松岡 洋右

文 部 大 臣 橋田 邦彦

商工大臣臨時代理

大藏大臣 河田 烈

大藏大臣 河田 烈

内務大臣兼厚生大臣 安井 英二

司法大臣 風見 章

逓信大臣兼鐵道大臣 村田 省藏

農林大臣 石黑 忠篤

海軍大臣 及川古志郎

企画院總裁 星野 直樹

(付記)

日獨伊三國條約締結ニ關スル「告諭」

日獨伊三國條約ノ締結ニ當リ、畏クモ 大詔ヲ渙發セラレ、帝國ノ嚮フ所ヲ明ニシ、國民ノ進ムベキ道ヲ示サセ給ヘリ。聖慮宏遠洵ニ恐懼感激ニ堪ヘザルナリ。

恭シク惟フニ世界ノ平和ヲ保持シ、大東亞ノ安定ヲ確立スルハ、我ガ肇國ノ精神ニ淵源シ、正ニ不動ノ國是タリ。昨秋歐洲戰爭ノ發生ヲ見、世界ノ騷亂益々擴大シ、底止スルトコロヲ知ラズ。是ニ於テカ速ニ禍亂ヲ戡定シ、平和克復

ノ方途ヲ講ズルハ、現下喫緊ノ要務タリ。適々獨伊兩國ハ帝國ト志向ヲ同ジウスルモノアリ。因リテ帝國ハ之ト相提携シ、夫々大東亞及歐洲ノ地域ニ於テ新秩序ヲ建設シ、進ンデ世界平和ノ克復ニ協力センコトヲ期シ、今般三國間ニ條約ノ締結ヲ見ルニ至レリ。

今ヤ帝國ハ愈々決意ヲ新ニシテ、大東亞ノ新秩序建設ニ邁進スルノ秋ナリ。然レドモ帝國ノ所信ヲ貫徹スルハ前途尙遼遠ニシテ、幾多ノ障礙ニ遭遇スルコトアルベキヲ覺悟セザルベカラズ。全國民ハ謹デ 聖旨ヲ奉體シ、非常時局ノ克服ノ爲益々國體ノ觀念ヲ明徴ニシ、協心戮力、如何ナル難關ヲ突破シ、以テ 聖慮ヲ安ンジ奉ランコトヲ期セザルベカラズ。是レ本大臣ノ全國民ニ望ム所ナリ。

昭和十五年九月二十七日

内閣總理大臣公爵 近衛 文麿

148

昭和十五年9月27日

在米國堀内大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

日独伊三国同盟成立に対する米国政府の反応  
について

第一五六一號

ワシントン 9月27日後発  
本 省 9月28日夜着

一、日獨伊三國條約成立ハ二十七日早朝當地ニ傳ハリ朝野ニ一大衝動ヲ與ヘ國務省邊ハ自若タル内ニモ事態ノ重大性ヲ痛感シ居ル旨「ラヂオ」放送サレタルカ同日ノ新聞會見ニ於テ大統領ハ本同盟ヲ豫想シ居タリヤトノ質問ニ答ヘ「イエスアンドノウ」ト濁シ(特情ニ「ノウ」トノミ答ヘタリトアルハ誤リ)「ハル」長官ハ本同盟ノ發表ハ過去數ヶ年間日獨伊三國間ニ事實上存在セル關係ヲ世間ニ明カニシタルニ過キストテ本件ヲ「ミニマイズ」スルニ努メタリ

二、議會方面ニ於テハ「ウオーズウオース」(下院共和)「ビンソン」(下院海軍委員長)等ハ國務省筋同様本件ヲ「ミニマイズ」シ居ルモ「オースチン」(上院共和黨副總務)ハ本同盟ハ吾人カ世界ノ自由主義政體ヲ存續スルニ必要ナル鬭爭ニ重大ナル役割ヲ有スルコトヲ示セリトシ「コマリ」(上院外交委員民主)ハ本同盟ハ世界ノ平和ト安全ヲ脅威ストシ居リ「ナイエ」(同共和孤立派)ハ米ノ極

東政策ハ遂ニ日本ヲ驅ツテ獨伊ト握手セシメタリト云ヒ「クラーク」(上院孤立派)ハ右ハ米ノ戰爭ニ參加政策ニ何等ノ變更ヲ來サシムルモノニ非スト述ヘタル旨放送サレタリ

三、大統領ハ本日午前「スチムソン」陸軍「ノツクス」海軍「ハル」國務長官ト各別ニ協議セルカ午後右ノ外「マシヤル」參謀總長「スターク」軍令部長「ヌードセン」國防諮問委員會幹部ヲ交ヘ重大協議ヲ行フ趣傳ヘラレタリ尙「ロシアン」英大使モ大統領ニ面謁對英援助ノ増加及促進ニ付協議シタル旨報道セラレ居レリ

壽府ヘ轉電セリ

壽府ヨリ英、獨、伊ヘ轉電アリタシ

149

昭和15年9月28日 在米國堀内大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

日独伊三国同盟成立に関するハル米國務長

官声明

ワシントン 発  
本 省 9月28日前着

特情華府第五二號

「ハル」國務長官ハ二十七日日獨伊三國新條約成立ニ關スル「ステートメント」ヲ發表、新條約ハ結局既成事實ノ成文化ニ過キス而モ米國ノ政策ノ中ニハ既ニ對策力綴リ込マレテ居ルト次ノ如ク言明シタ

日獨伊三國同盟條約ハ米國政府ノ見解ニヨレハ既ニ茲數年來ノ國際關係ヲ實質的ニ變ヘルモノテハナイ、新協定成立ノ宣言ハ久シイ以來カラ現存シ實效ヲ舉ケテ居タ日獨伊三國關係ヲ中外ニ闡明シタニ過キス米國政府ハ屢々コノ問題ニ關シ繰返シ注意ヲ喚起シテ來タノテアル而シテ斯ル協定ノ締結交渉力進メラレツツアツタコトハ既ニヨク判ツテ居タシコノ事實ハ米國政府ノ政策決定ニ當ツテ充分考慮ノ中ニ取り入レラレテ居タノテアル

尙「ハル」長官ハコレ以上具體的の見解表明ヲ拒否シタカニ十七日午前ノ「ロシアン」英大使ト會談ニ關シテハ過般英國カラ租借シタ大西洋ノ空海軍基地ノ位置ニ關スルモノテ日獨伊協定ニ關スル話ハ出ナカツタト言明シタ

150

昭和15年9月28日 在独国来栖大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

日独伊三国同盟条約調印式の状況報告

別電 昭和十五年九月二十七日発在独国来栖大使より

り松岡外務大臣宛第一二六一号

右調印式における来栖大使挨拶文

ベルリン 9月28日前発

本省 9月28日夜着

第一二六〇號(大至急)

二十七日日獨伊三國條約調印式ハ伊代表「チアノ」外相一行ノ伯林飛來遅レタル爲定刻ヨリ約一時間遅レ午後一時(伯林時間)ヨリ總統官邸廣間ニ於テ獨軍部「ナチ」黨要人日伊大使館員内外新聞記者數百名列席ノ下ニ開催セラル員着席後先ツ「リツペントロツプ」外相ハ世界史ニ劃期的ナル條約調印ノ爲茲ニ參集ヲ求メタル旨ノ開會ノ辭ヲ述ヘタル後獨側ノ希望ニ基キ豫メ打合セ置キタル所ニ依リ日獨伊各國語ニテ條約「テキスト」ヲ朗讀セリ日本語「テキスト」ハ加瀬之ヲ朗讀セリ右ノ後直ニ「テキスト」ニ署名(各全權ノ署名ノミニテ肩書ナシ)ヲ開始シ本使ハ日本語ニ

テ署名シ一時十五分署名調印ヲ了セリ次テ「ヒットラー」

總統臨場シ「リ」ニ代リ中央ニ着席其ノ右ニ「チ」及本使  
左ニ「リ」着席ス「リ」ハ立チテ一場ノ挨拶ヲ試ミ「チ」

ニ代ル(獨伊ノ挨拶内容ハ獨外務省ヨリ駐日大使館ヲ通シ  
貴方ヘ傳達濟ノ筈)「チ」ニ續イテ本使別電第一二六一號  
ノ通日本語ノ挨拶ヲナシ調印式ヲ終了セリ

「ヒ」總統ハ深キ感銘ヲ受ケタル面持ニテ本使及「チ」ト  
固キ握手ヲ交シ本使「チ」ト共ニ「リ」外相同伴)別室ニ  
退キ本使ト會談中東亞ニ於ケル日本ノ嚴然タル指導的地位  
ハ獨伊ノ歐羅巴ニ於ケル地位ト同様ニテ之ヲ否認セントス  
ルハ事實ニ忠實ナル所以ニアラス又自分ノ日本ニ對スル尊  
敬ハ幼時日露戰爭ノ成果ヲ經驗シテ以來聊モ變ラサル旨ヲ  
述ヘタルカ本調印式ヲ通シ「ヒ」總統及「リ」外相ハ待望  
久シキ本條約ノ成立ニ満面喜ヒニ溢レ居タルヲ認メタリ  
尙式場ニ於テハ式ノ進捗狀況ヲ終始「ラヂオ」ニテ放送シ  
活動寫眞ハ代表ノ署名振迄仔細ニ撮影シ又總統官邸ノ外  
「ウイルヘルム」街及「ウンターデンリンデン」街ハ日獨  
伊三國旗ヲ打振ル民衆及堵列セル兵士ニテ埋メラレ本使等  
ノ通過ニ際シ熱烈ナル歡迎振ヲ示シタリ

## (別電)

ベルリン 9月27日後發

本省 9月29日前着

### 第一二六一號

本日茲ニ友邦獨逸國及伊太利國トノ間ニ世界歷史上誠ニ意  
義深キ三國條約ノ調印ヲ見マシタルコトハ本使ノ衷心ヨリ  
欣快ニ堪ヘヌ所テアリマス吾等三國ハ其ノ傳統ニ於テモ將  
又國民性ニ於テモ幾多相似共通ノ點ヲ有スルト共ニ現ニ  
夫々大東亞及歐羅巴ニ於テ新秩序建設ノ爲ニ奮闘シテ居リ  
マスル關係上既ニ相互ノ間ニ深キ理解ト同情トヲ有シ強靱  
ナル友情ノ絆ニ依テ結ハレテ居リマシタカ今回此ノ友情カ  
結晶シテ三國條約ノ成立トナリ目標ヲ同シウスル三國カ其  
ノ力ヲ併セ理想ニ邁進スルノ決意ヲ一層堅ムルニ至リマシ  
タコトハ誠ニ劃期ノ一大事實テアリマシテ私ハ茲ニ日本帝  
國政府ヲ代表シ三國提携ノ將來ノ洋洋タルモノアルヲ祝セ  
ントスルモノテアリマス此ノ條約ノ結局ノ目的トスル所ハ  
正義ヲ根幹トシタル不變且恆久ナル世界平和ノ確立ニアル  
ノテアリマシテ素ヨリ我等三國ハ我等ト主張ヲ同フシ同様

## 二 日独伊三国同盟

ノ努力ヲ爲サントスル諸國ニ對シ協力ヲ惜マサルノミナラス日獨伊三國ト「ソヴィエト」聯邦トノ間ニ存スル現在ノ政治的地位ニ何等ノ影響ヲ及ホスモノテモアリマセン由來日本武士道ノ精神ハ劍ニ依ツテ象徵サレテ居リマスカ克ク劍ヲ用フル者ノ極意ハ劍ニ依テ濫リ二人ヲ殺サス却テ之ニ依テ人ヲ救フニアリマス私ハ本條約カ日獨伊三國ニ於ケル正義ノ闘士ノ手中ニ克ク活人ノ劍トナツテ世界平和ノ再建ニ寄與センコトヲ翹望シテ止マサルモノテアリマス

151 昭和15年9月28日

在米國堀内大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

### 日独伊三国同盟成立に対する米側反応を踏ま えたわが方外交方針の確立方具申

ワシントン 9月28日後発

本省 9月29日夜着

第一五六七號(極秘、至急)

一、今次日獨伊三國條約ノ締結ハ米政府當局ニ於テ豫テ危惧シ之カ對策ヲ考慮シ居リタルコトトハ言ヘ其ノ成立ノ意外ニ早カリシコト及米國ヲモ明瞭ニ對象トシ居ルコト等

ハ朝野ニ衝動ヲ與ヘ殊ニ一般民衆ニハ日本カ判然敵方ニ廻リタルコトノ重大性ヲ今更乍ラ痛感セシメ居ル處政府トシテハ差向キ今次條約ノ效果ヲ出來ル限り「ミニマイズ」スルト共ニ共和黨又ハ孤立派ノ政府攻撃ニ備フル爲今次條約ハ過去數年間事實上存在セル關係ノ條約化ニ過キス右條約ノ成立ハ寧ロ政府ノ從來執リ來レル政策ノ誤ラサリシコトヲ實證スルモノナリトノ趣旨ニテ表面努メテ冷靜ヲ裝ヒ輿論ノ反響ヲ見詰メツツ今後ノ對策ヲ考究シ居ルモノト觀測セラル

二、今次條約ニ對スル米國輿論ノ反響ハ別電第一五六八號ニ

(電ラズ)

テ觀取セラルル通り概シテ冷靜ナル態度ヲ持セント努メ居ルカ如ク其ノ主張ハ米ノ國防計畫擴充ヲ促進スルト同時ニ米ノ防衛第一線タル英ノ抗戰力強化ノ爲今後對英援助ヲ倍加促進スヘシト言フニ殆ト一致シ居ル處政府ニ於テモ米ノ軍備ノ現狀及大統領選舉ヲ目前ニ控ヘ種々內政上機微ナル事情アルカ如キ此ノ際直ニ日獨伊三國ニ對シ眞正面ヨリ立向フカ如キ政策ニ出ツルコトハ萬ナカルヘク

英米對日獨伊ノ抗爭ハ將來數年乃至數十年ニ亘ル長期戰

ニシテ今日一時的の二不利ナル地位ニ立ツトモ究極ニ於テ勝利ヲ占ムルニ於テハ現在失フ所モ之ヲ必ス取返シ得ヘシトノ大局的目標ノ上ニ實際的政策ヲ樹立實施シ居ルモノト判斷セラレ此ノ見地ヨリ英カ目下ノ苦境ヲ切り拔ケ得ル様所謂 sort of war ノ最大限度迄ノ援助ヲ促進スルト共二國內ニ於テハ國防總動員及產業ノ整備擴充ニ全力ヲ盡シ兩洋艦隊ノ完成及大陸軍ノ建設ニ精魂ヲ傾注スルモノト見テ誤ナカルヘシ

三、右カ米ノ根本外交ニ如何ニ現ハレ來ルヤハ俄ニ豫斷シ難キモ米カ我方ニ對シ今直ニ正面衝突ヲモ辭セサルカ如キ斷乎タル手段ニ出テ來ルコトハ先ツナキモノト認メ差支ナク米ハ一方ニ於テ從來執リ來レル行政の手段ニ依リ對日壓迫措置ヲ強化シ漸次重要軍需資材ノ對日禁輸(往電第一五六五號御參照)ノ舉ニ出テ來タルト共ニ條約第三條ノ適用ヲ避ケツツ(同條ニ言フ攻撃トハ如何ナル限度ノ行爲ヲ意味スルヤハ米ノ最モ知ラントスル點ニシテ對英援助ニ當リテハ勿論對支援助ニ當リテモ今後此ノ點ニ極メテ細心ノ注意ヲ拂フモノト存セラル)最大限度ノ對支援助(英ノ緬甸「ルート」再開ヲ含ム此ノ點既ニ英ニ於

テ同意濟トノ報モアリ)ヲ續行シ

更ニ<sup>(3)</sup>現在大體ノ諒解ニ達シ居ルモノト見ラレ居ル太平洋ニ於ケル英屬領海空軍基地ノ利用ヲ策シ遠卷ナカラ對日壓迫圈ヲ礎キ上ケンツスルノ方策ニ出テ來ルモノト考ヘラル

四、上述ノ通り大體ノ考ヘ方トシテハ米ハ假令一時ノ不利ハ忍フトスルモ將來之ヲ取返シ得ルコトヲ目處トシ相當遠大ナル政策ヲ樹テ英米ノ提携ヲ緊密ニシ自國國防力ノ充實ニ邁進スヘキヲ以テ差向キ我方ノ大陸政策ニ對スル直接ノ妨害ハ案外輕微ナルヘシト判斷セラルルヲ以テ我方トシテモ右ニ對應スル透徹セル國策ヲ建テ一日モ速ニ支那事變ノ處理ヲ促進セラルルト共ニ對蘇國交ノ急速調整ヲ圖リ更ニ佛印及蘭印ニ對シ實質の進出ヲ遂ケ今後如何ナル事態トナルトモ抜カントシテ拔ク能ハサルカ如キ不動ノ地歩ヲ確立シ置カルルコト肝要ト存ス既ニ御考究済ミノコトトハ存スルモ爲念申進ス

壽府へ轉電セリ

(英カ)

壽府ヨリ獨、伊へ轉電アリタシ

英ヨリ蘇へ轉電アリタシ

紐育へ轉報セリ

152

昭和15年9月29日

在ニューヨーク井口(貞夫)総領事代理  
より  
松岡外務大臣宛(電報)

日獨伊三国同盟成立に關する米國紙報道振り報告

ニューヨーク 9月29日前發  
本省 9月29日夜着

第六二四號

一、<sup>(1)</sup>日獨伊軍事同盟締結ノ趣ハ最近寧口西班牙ノ樞軸參加カ  
喧傳セラレ日本ノ參加ハ數日前上海電報ニ依リ傳ヘラレ  
タルモ之ヲ以テ日本ノ對米牽制ノ「トライアル、バルー  
ン」ナリト輕視シ居リタル際トテ斯ル同盟ノ成立ハ過去  
數年來豫測セラレタルコトナルヲ以テ別段驚愕ノ要ナク  
却テ對英援助ヲ強化シ從來ノ政策ニ變更ヲ見ルコトナシ  
トノ華府官邊側説明ニモ拘ラス一般ハ多大ノ衝動ヲ受ケ  
居ルモノノ如ク諸新聞モ亦伊太利參戰當時ニ比シ更ニ  
「センセイシヨナル」ナ取扱ヲナシ本軍事同盟成立ニ依  
リ米國國防ノ安全ハ強大ナル脅威ノ下ニ晒サレ日米間ノ

衝突不可避ナルカ如キ印象ヲ與ヘ居レリ

二、本同盟ノ本質ニ關シ或ハ右ハ對蘇牽制ノ目的ヲモ兼ヌル  
モノナリトシ蘇側ノ動搖ヲ傳ヘ居ル倫敦發電報ヲ掲ケ反  
宣傳ヲナシ居ルモノアルモ大部分ハ今次大戰力結局長期  
戰トナルヘシトノ獨伊側想定ニ基キ日本ヲ利用シ米國ノ  
對英援助ノ限界ヲ制限セントシ又ハ樞軸側勝利ヲ見越セ  
ル日本カ米國ノ對極東政策ヲ制扼シ以テ其ノ南進政策ヲ  
實現セントスルヲ目途スルモノナリトシ  
本同盟<sup>(2)</sup>ノ對米敵性ヲ何レモ是認シ一見締約國ノ受クル利  
益ハ獨伊側ニ偏頗ナルヲ以テ日本ハ獨逸ノ斡旋ニ依リ對  
蘇政治的諒解ノ成立ヲ保障セラレ居ルヘシト觀測シ居レ  
リ

三、米國ノ三国同盟對策ニ關シ華府來電ハ

(イ)太平洋ニ於ケル英海軍基地ノ即時利用

(ロ)「ビルマ」公路經由大規模ノ對支軍事援助

(ハ)超弩級爆擊機其ノ他ノ對英讓渡等ノ手段ニ依リ對英支  
援助ノ決定的強化ヲ企ツルト共ニ對蘇政治的接近ヲ促  
進スヘシ

ト傳ヘ居ル處各紙社説ハ何レモ之ニ呼應シ米國トシテ從



來可能的範圍ニ於テ對日協力的態度ヲ持シ來レルニモ拘ラス(「タイムス」)獨伊ト提携スルニ至リ今や世界ニ於ケル侵略國群ト平和的國家間ニ「シヨウダウン」ノ時來レルニ及ヒ米國ハ斯ル脅威ニ委縮且退却スルコトナク既定ノ方針ノ下ニ前進シ(「サイエンス、モニター」)對支援助ニ依リ日本ヲ對支戰爭ニ於テ消耗セシムルト共ニ

一切ノ問題ノ決定點タル英國勝利ノ爲對英援助ヲ強化スヘシ(各紙)ト強カリヲ竝ヘ猶太系「ポスト」ノ如キ對日通商關係斷絶ヲ主張シ居レリ

四、日本ノ獨伊樞軸參加ノ責任ニ關シ前掲「タイムス」カ協力的態度ヲ拒絕セルハ日本ナリト一應辯明シ他ニ言シ居ルモノナキ處二十八日紐育「サン」所載論評ニ於テ「デイビッド、ローレンス」(著名ナル評論家ニシテ目下「ウィルキー」ヲ支持ス)ハ米國ノ積極的政策ハ日本國內ニ於ケル自由主義派ノ退却ヲ餘儀ナクセシメ遂ニ獨伊樞軸ニ驅リタル結果米國ハ獨リ日本ヲ降服セシメルコトモ出來ス又對英援助モ徹底化シ得サルノ矛盾ニ陥リタルハ全ク「ロ」政權ノ祕密的獨裁的外交ノ責任ナリト批判シ居レリ

獨、伊へ轉電セリ  
米へ暗送セリ

153 昭和15年9月30日

在ソ連邦東郷大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

### 日独伊三国同盟成立に関するブラウダ紙社説報告

モスクワ 9月30日後發  
本省 10月1日前着

第一三二五號

三十日初メテ「ブラウダ」ハ左記ノ社説ヲ掲載セリ  
日獨伊協定ハ日獨伊對英米間ニ既ニ存在セル關係ヲ形式化セルモノニシテ本件ニ關シ蘇聯政府ハ公表前獨逸政府ヨリ通報ニ接シ居タルニ依リ何等突然ノ出來事ニアラス本協定ハ戰爭カ一層廣汎ナル新段階ニ入りタルヲ示ス之迄戰爭ハ西方ニ於テハ歐洲及北阿弗利加、東方ニ於テハ支那ニ局限セラレ兩者間ニ何等關聯ナカリシカ今や此ノ狀態ハ終リ日本ハ歐洲ニ介入政策ヲ、獨伊ハ極東ニ介入政策ヲ放棄セリ右ハ曩ニ「モロトフ」ノ演說セル戰爭ノ激化及擴大ヲ實證セルモノナルカ英米ノ軍事協力及擴大ニ關スル最近ノ諸事

實カ本協定ノ出現ヲ促進セルハ疑ノ餘地ナシ

本協定ノ特異性ノ一ハ各締約國ノ勢力圈ヲ認メ他ノ國家特ニ英米側ヨリスル右勢力圈ノ侵害ニ對シ相互援助義務ヲ認メタルコトナリ右ニ依リ日本ハ大東亞圈ヲ、獨伊ハ歐洲ヲ得タルカ締約國カスル勢力圈ノ分割ヲ實現シ得ルヤ否ヤハ一二交戰國ノ實力、戰爭推移ノ如何ニ懸ルヘシ  
第二ノ特異性ハ蘇聯ニ關スル留保ナルカ右ハ締約國ニ於テ蘇聯ノ中立ヲ尊重セルコト竝獨蘇間及伊蘇間ニ存スル不侵略協定ノ效力及意義ヲ確認セルモノト解スヘキナリ  
蘇聯ノ平和中立政策ハ今後モ不動不變ナルヘシ  
獨伊英米ヘ轉電セリ



154 昭和15年9月30日 在独国来栖大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

# 日独伊三国同盟成立に際するドイツの對ソ措置 振りにつきリッペントロップ内話について

ベルリン 9月30日後発  
本省 10月1日夜着

第一二七一號(極秘、館長符號扱)

條約調印前日ノ二十六日「リ」外相ト會談ノ際「リ」ハ三九年ニ莫斯科訪問ノ折「スターリン」ハ蘇聯邦ハ他國ノ爲火中ノ栗ヲ拾ハスト言ヒタルカ其ノ後少シモ變リ居ラス本件條約カ出來テモ蘇聯邦ハ益々「ニユトラル」ノ態度ヲ執リ行クヘシト述ヘ調印當日ノ二十七日「リ」主催晚餐ノ席上蘇聯邦ヘノ手配振ヲ質シタルニ「リ」ハ本件ニ關シテハ簡單ニ二十六日莫斯科ニ於テ「モロトフ」ニ内報シタル處「モ」ハ右「インフオアメーション」ヲ多トシ居タリ獨側トシテハ一、二週間内ニ更ニ詳細蘇側ニ對シ説明シタキ所存ナリト述ヘ本使ヨリ「シユーレンベルグ」大使歸伯中ノ由ノ處同大使歸任ノ上説明ノコトトナル次第ナリヤト問ヘルニ或ハ左様ニ成ルヤモ知レスト言ヒ居タリ次テ本使ヨリ米ノ反響ニ付何等承知セラルルヤト問ヘルニ「リ」ハ未タ入電無シ貴使ハ米國ノ事情ニ通シ居ラルル處如何ニ考フルヤト反問セルニ付米ハ衝動ヲ受クルニ相違ナキモ少シ時カ經テハ落着キ冷靜ニ考フル様ニ成ラント述ヘタルニ「リ」ハ自分モ同様ニ考ヘ居リ本條約ニ反對シテ騒ク米人ノ如何ナル種類ノ連中(暗ニ猶太人及親英分子ヲ指セリ)ナルカハ解リ居レリト述ヘ居タルモ兎ニ角米ノ反響ニ注意ヲ拂ヒ居

ルコトハ事實ナリ尙獨側ニ於テ結局米、蘇ニ對スル反響ヲ如何ニ見ルヤハ注意中ニテ追電ス

伊、蘇、米へ轉電セリ

~~~~~

155 昭和15年10月1日

在ハンガリー井上(益太郎)臨時代理公使より
松岡外務大臣宛(電報)

日独伊三国同盟のハンガリーへの影響につき
同国外相と会談について

ブダペスト 10月1日後発
本省 10月2日前着

第一七一號(極秘、館長符號扱)
往電第一七〇號ニ關シ

三十日外相ヲ往訪日獨伊同盟カ洪牙利ニ直接影響スル所アリヤ否ヤヲ質シタル所外相ハ總テ打明ケテ申上ケタシトテ實ハ二十八日「リップペン」ノ演說ノ正式「テキスト」ヲ入手スルヤ自分ハ直ニ在獨洪牙利公使ヲシテ獨外務次官ニ對シ此ノ際(イ)洪牙利トシテ右同盟ニ加入スルノ適否竝(ロ)若シ右加入ヲ適當トスルニ於テハ其ノ様式ノ二點ヲ承知シ度キ

旨申入レシメタル處外務次官ハ外相へ報告ノ上何分ノ回答ヲスヘキ旨答ヘタリ蓋シ斯ル措置ヲ執ラシメタル理由ハ洪牙利トシテハ一方ニ於テ無理ニ割込運動ヲ爲ス意嚮ナキト共ニ他方決シテ負擔ヲ回避スル意嚮ナク即チ獨側ニテ希望スルニ於テハ何時ニテモ之ニ應スルノ用意アルコトヲ知ラシメンカ爲ナリ同様ノ申出ハ曾テ日獨伊防共協定成立ノ際ニモ爲シ其ノ結果一年後之ニ加入スルコトナリ日獨伊軍事同盟成立ノ際モ同様ノ申入レヲ爲シタル處後者ニ對シテ暫ク待ツ様トノ獨側ノ回答ニテ今日迄實現スルニ至ラサル次第ナリト説明シ次テ前記獨側へ申出テノ次第ハ日本政府へ取次カレタシト述ヘタリ就テハ右ニ御承知相成度シ尙外相ハ本件ハ現ニ日本政府限りノ極秘トセラレタキ旨述ヘ居タルニ付御含置請フ

~~~~~

156 昭和15年10月2日

在米國堀内大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

日独伊三国同盟成立に対する米国内の反響報告

ワシントン 10月2日前発  
本省 10月2日夜着

第一五八二號

往電第一五六七號ニ關シ

今日迄新聞論調及「ラヂオ」評論等ニ現レタル日獨伊同盟ノ反響ヲ觀ルニ中ニハ感情論ニ走ルモノアルモ概ネ冷靜ナル態度ヲ示シ多數説ハ英米結束ノ強化、對英援助ノ促進ヲ強調シ居ルモ對日態度ニ關シテハ意見別レ米現政府ノ對日强硬政策ヲ非難シ日米國交調整ヲ説ク者アルモ(往電第一五八〇號「ハワード」ノ意見「デヴィッド、ローレンス」ノ意見等)他方日本ニ對スル積極的對抗策ヲ主張スル者鮮カラス殊ニ二十九日紐育「ヘラルド、トリビュン」ハ大西洋ハ當分安全ナルニ付先ツ日本ニ對處スヘシト論シ(往電第一五七二號)之ニ引續キ往電第一五七九號「エリオット」少佐「ハーバード」大學内國防委員會聯盟祕書「スターリング」少將ノ即時對日强硬措置採用等次第ニ現レツツアリ尤モ是等論者モ英屈服セハ萬事窮スヘキコトハ認メ當分英ノ持堪フルコトヲ論議ノ前提ト爲シ居リ或ハ英ノ抵抗持續中ニ日本ヲ片付クヘシト爲シ居レリ要スルニ米輿論カ歐洲情勢ヲ極東問題以上ニ重要視シ居ルコト英獨戰ノ歸趨見透シ難ク從テ今ノ所ハ艦隊ノ大部分ヲ太平洋ニ置クモ或

ハ大西洋ニ廻航スル必要ヲ生スルヤモ知レストテ太平洋ヨリモ寧ロ大西洋ニ關心大ナルコト、新嘉坡ヲ目指ス軍事的地位強化ヲ論スルモ日米間ノ衝突ハ回避ヲ希望シ居ルコト對英援助及對支援助ハ特ニ戰爭ニ至ラサル方法ニ依ルヘシト爲シ居ルコト等ハ大體一致シ居ル所ト觀テ差支ナカルヘシ

壽府ヘ轉電シ紐育ヘ暗送セリ

壽府ヨリ英、獨、伊ヘ轉電アリタシ

蘇ヘ轉電アリタシ



157 昭和15年10月3日

在米國堀内大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

日独伊三国同盟成立後における米国の参戦可

能性等に関する森島参事官と在米国独国代理

大使との会談報告

ワシントン 10月3日後発

本省 10月4日後着

第一五九〇號(極祕)

三日森島獨代理大使ト會談ノ際

(一) 同代理大使ハ三國條約ニ對スル米ノ對日反動ニ付尋ネタルニ付森島ヨリ同條約ハ米ニ對スル警告ト言フヘク對歐對極東兩方面ニ對シ米參戰ノ可能性ヲ阻止セルモノト言フヘシ米トシテハ日本ニ對シ道義的禁輸、條約廢棄、輸出許可制等採リ得ヘキ手段ハ既ニ之ヲ採リ居ル次第ナレハ此ノ上日本ヲ挑發スルカ如キ政策ハ採リ得サルヘク精々禁輸ノ範圍擴張、輸出許可制ノ強化等ニ止マルヘシト思考ス他方英米ノ協力緊密ヲ加フルハ當然ノ結果ナルヲ以テ太平洋方面ニ於ケル英米ノ動向ニハ充分注意スル旨答ヘ對獨關係ニ於ケル反動ニ付尋ネタルニ同代理大使ハ米ノ參戰ヲ防止スルノ效果アリトノ點ハ全然同感ナリ米カ參戰スルトセハ太平洋大西兩面ニ於テ事ヲ構スルコトナリ其ノ結果ハ却テ對英援助ヲ強化セントスル現在ノ方針ニ背致スルコトナルヲ以テ參戰スルコトナキモノト思考スト答ヘタルモ尙米ノ態度ニ懸念ヲ抱ケルモノノ如ク上海始メ極東方面ニハ多數米人居住シ居ル處日本側ニテ是等米人ニ對シ挑發的ノ措置ニ出テ米ヲシテ已ムヲ得ス戰爭ニ引込ムカ如キ惧ナキヤト尋ネタリ右ニ對シ森島ヨリ日本政府トシテハ出先ニ對シ強ヒテ米人ヲ刺戟スル

カ如キコトナキ様嚴重訓令シ居ルヲ以テ右ノ如キ懸念ナシト信ス又三國條約ハ防禦ニ外ナラサルヲ以テ米ニシテ其ノ對日態度ヲ改變シ來タルニ於テハ日本トシテモ國交調整ヲ考慮スルニ咨カナラサルヘシト述ヘタル處同代理大使ハ右日本ノ態度ハ甚タ賢明ト言フヘク獨トシテモ戰爭發生以來細心ノ注意ヲ以テ米ヲ激發スルカ如キコトナキ様措置シ來タリ居ル旨答ヘタリ

(二) 次テ森島ヨリ獨ノ對英上陸作戰ニ言及シ最近新聞報道ニ依レハ上陸作戰ハ遷延シ戰局ハ埃及方面ニ移ルヤニ思考セラルル處如何ト尋ネタルニ代理大使ハ上陸作戰ハ制空權ヲ確得セサル限り不可能ト認メラルル處最近英空軍ノ抵抗相當有力ナル上上陸作戰ノ事實上難事タルハ諾威「ダカール」ニ於ケル英軍ノ失敗ニ依リテモ明カナル所ニシテ私見ナルカ獨トシテハ上陸作戰ヲ唯一ノ方法ト認メ居ラス右以外ニモ英帝國ヲ崩壞ニ導キ得ヘキ手段アルヘク又元來「ヒットラー」ハ英本國ノ全面的壞滅ヲ期シ居ラス英ノ對歐霸權サヘ覆ヘルニ於テハ英ヲ歐洲ニ存續セシムルヲ以テ得策ト思考シ居ルハ累次ノ總統ノ言說ニ依リ御承知ノ通りニシテ自分一個トシテハ英ノ内閣更迭

ニ依リ對英和平ヲ實現スルヲ以テ獨ノ爲採ルヘキ措置ト考ヘ居ル旨答ヘタリ御參考迄

壽府ヘ轉電セリ

壽府ヨリ英、獨、伊ヘ轉電アリタシ



158

昭和15年10月3日  
在米國堀内大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

### 日独伊三国同盟の目的等に関する米國世論の

#### 啓発状況について

ワシントン 10月3日後発  
本省 10月4日前着

第一五九一號(極秘)

<sup>(1)</sup> 日獨伊同盟ノ米國ニ於ケル反響ハ屢次電報ノ通りナル處貴電合第二七・一三號御明示ノ如ク本條約ノ目的カ歐洲及大東亞ノ新秩序ノ確立ニ存シ日米關係ニ於テハ日本トシ國交調整ノ希望ヲ拋棄スルコトナク今後モ右調整ニ務ムルモノナルコトヲ米國朝野ニ徹底セシムルコトハ輿論ヲ善導シテ米側ノ對日壓迫策ヲ牽制シ延イテ日米ノ衝突ヲ避ケ我方ノ國防資材補給ノ道ヲ確保スル所以ナルヲ以テ本使ハ數日來當

國言論界ノ有力者ト接觸シ前記趣旨ノ啓發ニ務メ居ル處幸ヒ事態ノ重大性ヲ認識シテ日米國交ノ調整ヲ眞面目ニ希望シ輿論指導ニ協力セントスル者鮮カラス

<sup>(2)</sup> Daoud Lawrence(其ノ時評ハ多數新聞ニ掲載セラル)ハ從來數回日米親善論ヲ發表シ先般本使ト會談ノ際モ其ノ持論タル民間ノ日米問題研究委員會設置ノ腹案ヲ述ヘ恰モ同盟成立ノ當日其ノ趣旨ノ論文華府「イブニングスター」紙上ニ掲載セラレタルカ同盟發表ノ報ヲ聞キテ直ニ本使ヲ來訪シ本同盟ノ成立ニ依リ米國大衆ハ始めテ極東問題カ彼等ノ安危ニ懸ル重大問題ナルヲ自覺スルニ至リ今ヤ米國ノ參戰ト「ルーズベルト」ノ當選トハ共ニ確實トナリ此ノ儘ニテ推移セハ日米戰爭ハ避ケ難シトテ極メテ悲觀の感想ヲ洩シタルニ付本使ハ日米國交調整ノ絕望ニ非サル所以ヲ說キ昨年來米國側對日政策ノ誤レル諸點ヲ指摘シ置キタル處「ロ」ハ翌日ノ紙上ニ再ヒ評論ヲ掲ケ米國民ハ支那及蘭印ノ爲戰フノ用意アリヤト冒頭シ米政府ノ暫定拒否對日禁輸對支借款等ノ强硬政策ヲ批難シ政府及大統領ノ反省ヲ促セリ

<sup>(3)</sup> 三十日「ロイハワード」ハ米側ノ極東問題委員設置論

(往電第一五八〇號)ヲ「ハワード」系各紙ニ發表スルニ當リ特ニ外交主筆「シムス」ヲシテ本使ヲ來訪セシメ「ハ」ハ二十八日「クリーブランド」ニ於ケル「ウエルス」次官ノ演説(紐育同盟電御參照)中日米交渉ノ餘地アル旨言明シタルコトヲ重視シ此ノ際日米双方ノ輿論ヲ鎮靜セシムル爲直ニ右委員任命方提唱スルモノナルコトヲ傳ヘ本使ノ所見ヲ求メタルニ付米側カ自發的ニ斯ル措置ヲ採ルコトハ有益ナルヘキヲ答フルト共ニ米側ノ對日强硬政策力漸次事態ヲ惡化セシメタルコトヲ述ヘ置キタルカ「シムス」ハ翌一日ノ「ハワード」系新聞ニ本使トノ右會談ヲ發表スルト同時ニ「日本ト戰ハサルヘカラサルカ」ト題スル社説ヲ掲ケ日米國交調整ノ必要ヲ唱導セリ紐育「デイリーニユース」ハ本年七月以降對日妥協論ヲ每週一回掲載シ居レルカ「ワーソン」社長ハ三國同盟發表後記者ヲ派シ右方針ヲ續行スル旨ヲ告ケ特ニ本使ノ會見談ヲ求メタルニ付過日ノ貴大臣放送ノ趣旨ヲ述ヘ米カ歐洲戰爭ニ參加セサル限り日米ノ衝突ヲ避ケ國交ヲ調整シ得ル餘地アリ此ノ重大時局ニ當リ遠大ナル政治的卓見ヲ必要トスルノ趣旨ヲ述ヘ置キタルカ右ハ二日同紙及華

府「タイムス」、「ヘラルド」ニ掲載セラレタリ尙「バ」ハ「ウイルキー」ニ對日平和論ヲ唱ヘシムル様工作中ナル旨内報シ來レリ

四、今回ノ同盟成立ニ關聯シ「ハワード」及「ハースト」系ノ新聞カ共ニ日米衝突ノ理由ナキヲ論シ輿論及國民ノ反省ヲ促シ居ルコトハ好都合ナルニ付今後モ充分聯絡ヲ保ツ積リナルカ(一語不明)有力者ノ動向ヲ示セリ以上ノ經緯不取敢

159

昭和15年10月3日

在ソ連邦東郷大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

### 日独伊三国同盟に対するモロトフ外務人民委員の反応について

モスクワ 10月3日後発

本省 10月4日夜着

第一三三九號(極秘)

客月二十八日在當地獨代理大使來訪三國同盟ニ關スル當地外交團一般ノ感想等ヲ尋ネタル後二十六日同人ヨリ「モロトフ」ニ對シ同盟成立ノ旨ヲ通報スルト共ニ右ハ戰爭煽動



## 二 日独伊三国同盟

者タル民主主義諸國ノ行動ニ依リ餘儀ナクセラレタルモノナル旨竝ニ防禦同盟ニ過キサルコトヲ説明セル處「モ」ハ獨カ蘇聯ト隣國關係ニアル日本トノ間ニ斯ル關係ヲ設定シタルコトニ付テハ蘇聯ハ鮮カラサル關心ヲ有スル次第ナルカ兎ニ角條文ニ付篤ト研究シタキ旨述ヘタル趣内話セリ然ル處一日往電第一三三四號會談ノ後三國同盟問題ニ觸レ「モロトフ」ハ外務省「スポークスマン」(カ)發表セラレサルモノニハ重要ナルモノナシト述ヘタル趣ナルカ右ハ未發表ノモノアルヲ意味スル次第ナリヤト問ヘルニ依リ本使ハ自分ノ受ケタル公報ニ依レハ祕密條項ナシトノコトナルニ依リ右ハ何等カノ間違ヒナルヘキ旨述フルト共ニ本使トシテハ右同盟條約カ防禦的ナルコト竝ニ蘇聯カ既ニ獨逸及伊太利トノ間ニ其ノ反對國家群ニ加入セサルコトヲ約シ居ルコトニ顧ミ本條約ハ蘇聯ノ外交政策ニ背馳スルコトナカルヘク又日蘇間國交調整ニモ障礙ヲ及ホスコトナカルヘキヲ信スル旨述ヘタル處「モ」ハ蘇聯トシテ本條約カ如何ニ實行セラルルヤヲ見タル上之ニ對スル蘇聯ノ態度ヲ決定スヘキ話合<sup>(マ)</sup>ニテ殊ニ日本ニ付テハ從來貴使トノ間ニ話合來リタル中立協定ニ關スル八月十四日附蘇聯側提案ニ對スル日

本側ノ具體的意見ヲ承知スルコト必要ナリト述ヘタリ  
右御參考迄

獨、伊へ轉電セリ

~~~~~

160 昭和15年10月3日

在英國重光大使より
松岡外務大臣宛(電報)

日独伊三国同盟成立に対する英国内の反響報告

ロンドン 10月3日後発

本省 10月4日夜着

第一六四六號(至急)

當方⁽¹⁾ニ於テハ日本カ獨伊ト同盟シタルハ結局英米政策ノ歸結ノ然ラシメタル所ナリトシテ英國側ニ反省ヲ促スト共ニ太平洋ニ事ヲ起スハ英國トシテ全般的ニ不利益ナルノミナラス米國ノ援助ヲ歐洲ニ受クル所以ニアラサルヲ説キテ英國側ヲシテ米國側ニ「ブレイキ」ヲ掛ケシムルコトヲ努メ更ニ英國ヲシテ今後モ益々東亞方面ヨリ事實上退却セシメ我方ノ地位ヲ築クニ便スル様ニ心懸ケ精精各方面ノ聯絡ヲ利用シテ努力シ居ル處當方面ノ最近ノ模様御參考迄左ノ通り

一、新聞記事ハ政府筋ノ指導モアリ冷靜ノ取扱ナルカ論說ハ可ナリ露骨ニシテ尙一般人心ニ與ヘタル影響ハ強ク最近益々擡頭ヲ見ツツアリタル日本接近ノ現實派ハ腰ヲ折ラレ對日感情カ相當ノ程度迄惡化セルハ已ムヲ得サル所ニシテ今後ハ公ノ交渉ノ如キ先ツ行詰リ狀態ニ逢着スルモノ多キヲ免レス

二、官界ニ於テハ從來ノ聯盟思想派ヲ以テ滿タサレ居ル外務省ニ於テハ「バ」次官ニ於テ漸次極東部ヨリ反日的分子ヲ排斥シ漸ク主要人員ノ交迭ヲ了シタルカ日本ニ對スル所謂「アピーズメント」派タル「ハ」外相「バ」次官ハ一方省内ノ一般ヨリ他方政界ニ於ケル「チエムバレン」排斥組ヨリ攻撃ヲ受ケ緬甸道路問題ヲ以テ失敗ナリト非難セラレ日本トノ關係ハ相當機微ノ事情ニアリタル際ナリシヲ以テ三國同盟成立ニ依リ根本的ニ對日關係ノ檢當ヲ爲スニ至レルモノノ如ク首腦部ハヨク現實ヲ察シ冷靜ニ利害ヲ判斷セント努メ居ルハ疑ナキモ日本カ獨伊ト政治經濟ニ亘リテモ廣汎ナル聯絡提携ノ關係ニ入りタル譯ナレハ準敵國トシテ取扱ハサルヘカラスト爲シ一般ハ勿論政府部内ノ空氣ハ相當著シキモノアリ

三、佛國降服以來ハ米國トノ關係ヲ密接ニシテ戰局ヲ好轉セシメントスル政策ニハ英國政界ニ反對ナク右ハ「チャール」ノ指導ノ下ニ急進シタルカ米國ヲシテ參戰セシムヘキヤ否ヤニ付テハ之亦理想ヲ主トスル一派ノ考ヘ方ト現實ヲ主トスル方ノ考ヘ方ト多大ノ差アリ(六語脱)の觀方及政界ニ對スル思想感情の二有利ナル影響ト究極ノ效果ニ重キヲ置クニ反シ後者ハ米國ノ陸空海武力、國內ノ情勢ニ鑑ミ若シ米國カ公然參戰スルニ於テハ米國自身ノ準備ニ迫ラレテ恐ラク英國ニ對スル實際的援助ハ著シク障害ヲ受クヘキニ付寧ロ參戰ナキ同盟國タルノ立場ヲ歡迎スト主張ス今回ノ三國同盟ニ對シテモ同シク二様ナ議論ハ引續キ行ハレ居リ理想派ノ主張ハ三國同盟ニ拘ラス米國ノ勢力ヲ參戰ニ導クヘシト爲シ米國ノ同種ノ主張ヲ爲ス者ニ刺戟ヲ與ヘ常ニ太平洋ニ事ヲ起シ日米衝突ニ依リ世界戰爭ヲ惹起セントスル極左方面ノ世界的宣傳ニ乘セラレ居リ右ハ今後モ感情論ト共ニ非常ニ危險ナルモノニシテ從來國際問題ニ付テ常ニ理想ニ走り居リシ勞働黨ノ主流(極左方面ハ分離シ)カ政權ヲ得テ後ハ戰勝ノ目的ヨリ其ノ態度カ寧ロ實際的トナリ居ル點ハ現實派ノ考ヘ

方ニ力ヲ添ヘ居レリ

要スルニ英國ノ對日感情ノ惡化ハ殆ト極端ナル程度ニ及
フヘキモ冷靜ナル國民性ナルニ依リ常ニ現實的ノ考ヘ方
ニ傾クモノト觀ラル

米ヘ轉電セリ

米ヨリ獨、伊ヘ轉電アリタシ



161

昭和15年10月3日

在英國重光大使より
松岡外務大臣宛(電報)

日独伊三国同盟成立による英國政府内の対日

空氣の惡化狀況等に関する諜報報告

ロンドン 10月3日後発

本省 10月4日夜着

第一六四七號(至急)

⁽¹⁾ 諜報者ヲシテ特ニ英國政府部内ノ空氣ヲ探ラシメタル其ノ
報告左ノ通り

一、政府部内ノ殆ト一致ノ意見ハ三國同盟ヲ以テ英國ノ難境
ニ際シ英國ノ味方ニナリ得ヘキ米蘇兩國ヲ引離シ英國ヲ
孤立ニ陥ルルコトヲ主タル目的トスルモノニシテ日本ノ

政策ハ其ノ公ノ説明ニ拘ラス英國ニ敵意ヲ表スルモノト
解セサルヲ得ストシテ甚タシク惡感ヲ表シ居リ日本ニ對
スル「アピーズメント」派ノ政策ハ明カニ失敗セルコト
ヲ認メ居レリ

二、「ローシアン」大使ヨリノ報告ニ依レハ米國ハ寧ロ右同
盟成立ニ依リ益々積極的態度ニ出ツヘク或ハ參戰ノ時期
ヲ早メタリト見ラレ若シ「ルーズベルト」選舉ノ場合ハ
確實ニ參戰スヘシトノコトナリ但シ當地「ケネデー」大
使ハ英國海軍カ米國ノ前衛タルカ如ク米國ノ工業ハ英國
ニ缺クヘカラサルモノナリ從テ米國ノ參戰ハ飽ク迄避ク
ルヲ要スル旨直接大統領ニ進言セリ

三、⁽²⁾英國側モ米國ノ措置ヲ今更掣肘スルコト能ハス目下對策
トシテ華府ニ於テ日本ニ對スル原料品輸出ヲ廣汎ナル範
圍ニ亘リテ禁止スル案カ審議セラレ居リ(日獨伊カ經濟
的二直ニ援助スルコトニ對抗スル爲)更ニ蘇聯及支那ニ
對シ勸キ掛ケントシツツアリ尤モ蘇聯ニ對シテハ英國ト
シテハ斷念シ居ルモ是等ハ皆米國ニ任セ居レリ

四、濠洲ノ華府代表「ケーシ」ハ英國外務省ニ永ク勤務シタ
ル聯盟型ノ思想ヲ有シ華府ニ於ケル英米濠ノ話ニ關シテ

ハ遣リ過キタリト考ヘラレ居レルカ兎ニ角是迄日本問題
ニ關シ英本國政府ニ對スル濠洲ノ壓力ハ相當強ク且日本
トノ通商ヲ喪失スルヲ好マサル點ハ今日モ變ラサルモ今
後如何ナル程度迄本國政府牽制作用ヲ爲シ得ルヤ疑問ナ
リ

米、蘇へ轉電セリ

蘇ヨリ獨、伊へ轉電アリタシ

~~~~~

162 昭和15年10月7日

松岡外務大臣より  
在米國堀内大使他宛

### 日獨伊三国同盟条約の締結に関する在外公館長

#### 宛訓令

條一機密合第一二六七號

昭和拾五年拾月七日

外務大臣 松岡 洋右

在米國

特命全權大使 堀内 謙介殿

日獨伊三國條約締結ニ關シ訓令ノ件

今般日獨伊三國條約締結ニ際シ別紙ノ通本大臣訓令傳達ス

#### (別紙)

今般日獨伊三國條約成立シ畏クモ詔書渙發セラレ玆ニ我國  
朝野ハ其ノ向フベキ方向確立セラレ一致團結獨伊ト相提携  
シテ大東亞共榮圈ノ確立惹キテハ世界新秩序ノ建設ニ邁進  
シ得ルコトトナレリ而シテ今後ノ國際情勢ニ對シ國民ハ異  
常ノ決意ヲ以テ之ニ對處スルノ要アルモノナル處特ニ今後  
本條約ヲ運用シテ平和裡ニ我ガ目的ヲ達シ聖旨ニ答ヘ奉ル  
ノ大任ハ主トシテ我ガ外務省ニアルヲ以テ外務職員各位ハ  
一致團結減私奉公ノ精神ヲ發揮シ一切ノ過去ヲ清算シ眞ニ  
全省一体トナリ以テ我ガ朝野ヲ通ジ率先シテ其ノ範ヲ示サ  
ンコトヲ期スル次第ナリ

尚ホ本件條約ノ運用ニ關シ左記ノ諸點誤解ナキ様充分注意  
セラレタシ

一、條約ハ九月二十七日外務省公表ノ條文ノミニシテ祕密協  
定ナシ

二、第五條ハ政治的見地ヨリ本條約第三條ガ「ソ」聯ニ適用  
ナキコトヲ明ニシタルモノニシテ日蘇國交ノ調整ハ今後  
ニ於ケル重要ナル政策トシテ之ガ促進ヲ期ス

然レトモ他面共產主義ノ排除ハ日滿支三國ノ普遍的共通政策ニシテ從來ノ方針ニ何等變更ナシ

三、條約文中ノ「大東亞」ナル字句ノ解釋ニ關シ無用ノ論議詮索ヲ爲サザルコト(概ネ日本ノ政治勢力ノ及ブ程度ニ解釋シ例ヘバ西比利亞、印度、濠洲、新西蘭、比律賓等ヲ含ムヤ否ヤニ付キテハ論議ヲ避クルコト)

四、本條約締結ニ依リ小乗的排英米運動ヲ實施セザルコト

編 注 本公信の宛先は、「各國大公使、各總領事、各領事」

となつてゐる。

~~~~~

163

昭和15年10月8日 松岡外務大臣
在本邦クレイギー英國大使 會談

日独伊三国同盟の成立等に関する松岡外相と

クレイギー英國大使との会談記録

松岡大臣「クレイギー」英大使會談録

(昭十五、十、八)

十月八日午前十時英國大使來訪一時間半ニ亘リ歡談ス

先方ヨリ日獨伊三國同盟條約ニ觸レタルニ付本大臣ハ左ノ

通答へ置ケリ

「同盟條約ハ極メテ簡明ニ書キアリ其ノ意味ハ別ニ説明ヲ用キスシテ明ナリ(it speaks for itself)條約公表ノ夜本大臣カ國民ニ放送シタルモノノ内容ハ既ニ御承知ノコトト信スル處(同大使ハ「然リ」ト答フ)アレ以外別ニ補足スルコトモナシ唯「ハリファックス」外相ニ對シ「本條約ハ(一)此ノ上戰爭ノ舞臺ヲ擴大シ若クハ參戰國ヲ増スコトヲ避ケ出來ル丈ケ速ニ歐洲戰爭ノ終結ヲ見再ヒ列強カ圓卓ヲ圍ミテ今少シ冷靜ニ互ニ思ヒ遣リヲナシ懇談スルカ如キ雰圍氣ヲ招來シタシトノ趣旨ニ基キテ締結セラレタルモノナリ支那事變ニ付テモ同様ニ考ヘ居ル譯ナリ(二)英米殊ニ米國ノ日本ニ對スル態度ニ鑑ミ本大臣而シテ日本ニ於ケル領袖達モ此ノ道ヲ歩ムヨリ外他ニ方途ナシト感シタルカ爲ス様ナ舉ニ出テタル次第ナリ」(Japan has no alternative or at least many of leaders felt so)」ト本大臣ノ言トシテ傳フルコトヲ求ム

右ハ貴大使ノ云フカ如ク假ニ二百歩ヲ譲リテ日本カ今回同盟條約ヲ締結シタルコトヲ以テ誤レリトナスモ夫レハ英米殊ニ米國ノ態度カ之ヲ余儀ナクシタリト云ハサルヘカ

ラストノ意味ナリ尙本大臣ハ他ニ擇フヘキ道ナカリシト云フ丈ケニ非ス現ニ同條約前文ニ明記セル通り實ニ我カ建國以來ノ傳統タル八紘一字ノ大理念、大精神ノ下ニ締結セラレタルモノニシテ余カ常ニ述ヘ居ル通り大和民族ハ究極スル所此ノ大理想ノ爲ニ飽迄戰ヒ拔キテ其ノ爲ヨシ滅亡スルトモ可ナリ何等人類ノ福祉ニ貢獻スル所ナクシテ僅ニ其ノ生存ヲ保タンヨリモ其ノ方カ勝レリトノ堅キ信念ヲ有スル次第ナリ兎ニモ角ニモ此ノ我國建國以來ノ大理念、大精神ニ今回獨伊ノ共鳴ヲ得タルカ故ニ一ニハ本條約ヲ締結シタルナリ」

尙英國大使カ獨逸人ハ實ニ「ブリュータル」ニシテ到底斯ル精神ニ眞ニ共鳴シ得サル國民ナリ云々ト論シタルニ對シ本大臣ハ獨逸人ヲ然ク惡ク見テハ居ラス「ゲート」「シレル」「カント」「シヨペンハウエル」「ベートーベン」「ワグネル」等ヲ出シタル獨逸人種カ本質のニ英國大使ノ云ハルル如キモノトハ思ヘス彼等ニ充分呼吸シ得ル空間又ハ「チャンス」ヲ與フルナラハ彼等モ又英國人同様立派ナ國民トナルヘキコトヲ信ス(同大使カ余リニ英人ヲ稱揚シ獨人ヲ罵倒シタルニ付皮肉リタルモノナリ)日本トシテハ徹

頭徹尾獨伊ノミナラス如何ナル國民又ハ民族ニテモ之ト鬭爭スルヨリモ寧ロ友好關係ヲ結ヒテ漸次我民族ノ大理念ニ感化セントスルモノナリ英人モ無用ノ戰ヲナスヨリモ獨伊ト和シ其ノ友邦トナリテ八紘一字ノ精神ヲ地上ニ實現スル様協力サルル方人類ノ爲幸福ナリト本大臣ハ信スルモノナリ

ト述ヘ

又英國大使ハ本同盟條約ヲ以テ日本ノ運命ヲ全然獨裁官タル「ヒットラー」ノ手中ニ委シタルモノナリト述ヘタルニ付本大臣ハ然ラスト答ヘタルニ同大使ハ例ヘハ例ノ獨逸人ノコト故無制限潛水艦襲撃ヲ行ヒ兼ネマジク若シ斯ル舉ニ出ツレハ米國ハ直ニ參戰スヘシ其ノ場合日本ハ嫌テモ應テモ參戰ヲ餘儀ナクセラルルニ非スヤト述ヘタルニ付本大臣ハ之ニ對シ

本條約ハ其ノ第三條ニ明記セル通り防禦のモノニシテ他ヨリ襲撃セラレタル場合ニ限レリ而シテ第三條ニ所謂「攻撃」ヲ受ケタリヤ否ヤハ日本政府ハ自由ニ其ノ認定ヲ決シ得ヘシ固ヨリ同盟シタル以上其ノ場合日獨伊三國政府ノ間ニ協議ノ上然ルヤ否ヤヲ決定スヘキモ獨伊カ認定シタリト

テ日本カ之ヲ認メサルヘカラサル謂ナシ貴大使ハ日獨伊三
國トモ夫々獨立國ナリト云フコトヲ明白ニ認識セラレサル
ヘカラス尙日本ノ運命ヲ何人又ハ何國ノ手ニモ委ヌルカ如
キ惧レアルコトハ總テ避ケサルヘカラストノ主張ハ本大臣
カ内閣參議タリシ時代ヨリ反覆シタル所ナルハ或ハ貴大使
ニ於テモ洩レ聞キ居ラルルナラン斯様ナコトヲ考フルモノ
ハ日本ニ一人モアル筈ナシト答ヘ置ケリ(編注)

編 注 以下には援蔣ビルマルト再開問題に関する会談記録

が存在するが、『日本外交文書 日中戦争』第1960文書
と内容が重複するので省略。

事項編注

日独伊三国同盟の成立経緯については、『日本外交文書 日
独伊三国同盟関係調書集』をあわせて参照りたい。